THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿三年　第十二號

第二百三十七號

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

トルストイ著　徳田秋江氏譯

【最上製凾入美本】

生ひ立ちの記

▲何人も一讀の價値あり▼

本書はト翁が少年時代の耳目に映せる人生自然の批評と云ふべきもので、文豪が少年時代の面目を偲ぶことが出來る。殊に其官能的描寫は筆の先きでなく、燃犀なる觀察の自然の結果であることは、自然派の先蹤をなしたものとして深き興味と意味とがある。譯者秋江氏の筆は、やはらかに情味が饒かで、よく原著の氣分を髣髴たらしめてゐる。片々たる言行錄や傳記風の書と異り、何人も一讀の價ある好著である。（文章世界評）

定價九拾錢　小包料八錢

再版出來

小說　三人叢書

小栗風葉　徳田秋聲　柳川春葉　共著

總洋布製最美本

金壹圓五拾錢　小包料拾貳錢

（第二版）

▲時代の要求に應じて現る▼

現代作家中の流行兒を以て知らるゝ三家が佳作十數篇を集めしもの時代が如何なる小說を要求するか時代の要求に應じて現はれたる小說の形式內容の如何を知らんには勢ひ本書に指を屈せざるを得ず。三子の艶麗清楚絢爛たる花の如き文章に至つては世既に定評あり、紙質良好にして印刷鮮明也（報知新聞評）▲三人の筆致も抱負も此書で窺ふ事が出來るとせば此書は豫期以上の歡迎を受くるであらう（朝日新聞評）

東京神田區駿河臺袋町　東京國民書院　電話本三千四番　振替京千二百番

信用なき店舗及卑猥なる質品の廣告揭載は謝絶す

文學博士三宅雄二郎主筆

日本及日本人

第五百號

明治四十二年元旦發行

四六倍版

五百頁

東京四谷愛住町

政教社

市内は御一報次第直に
御一覧に供し可申、地
方の御注文は直ちに發
送する手筈整ひ居候



内地小包料は代金引替
手數料共金貳拾錢臺灣
樺太滿韓送料は金卅五
錢

弊店主任高橋彌四郎儀は舊トモエヤ支店長
として廿有餘年間勤務せし處曩に同店を辭し
右の場所に合資會社アヲキ商店を組織し多年練磨
研究の功を實地に應用し各位をして後顧の憂な
く且流行に遲れざる品物を確實廉價に販賣仕
候間何卒御引立之程奉希上候敬具

市内ハ電話又ハ御一報次第早速店員御用伺ニ參堂可仕候

安心の出來る
クツとカバンは

アヲキ商店

京橋區南傳馬町二丁目東側
電話本局 一七四三番

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

[illegible]及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論第二十三年第十二號目次

▲公論

兩宮崩御後の清國情勢
出版界の惡傾向 ……社論……一

時代の謳歌……竹越與三郎……一四

優勝民族と其素質……鎌田榮吉……二九

勤儉貯蓄の說……建部遯吾……三五

▲海外

滯歐所感……上田敏……四一

海外消息……如楓庵……四五

▲說苑

三宅雪嶺論

○三宅雪嶺翁……建部遯吾……五〇

○三宅雪嶺博士……松井柏軒……五六

○類の無い人……黑山生……五八

○三宅先生……戶川秋骨……六六

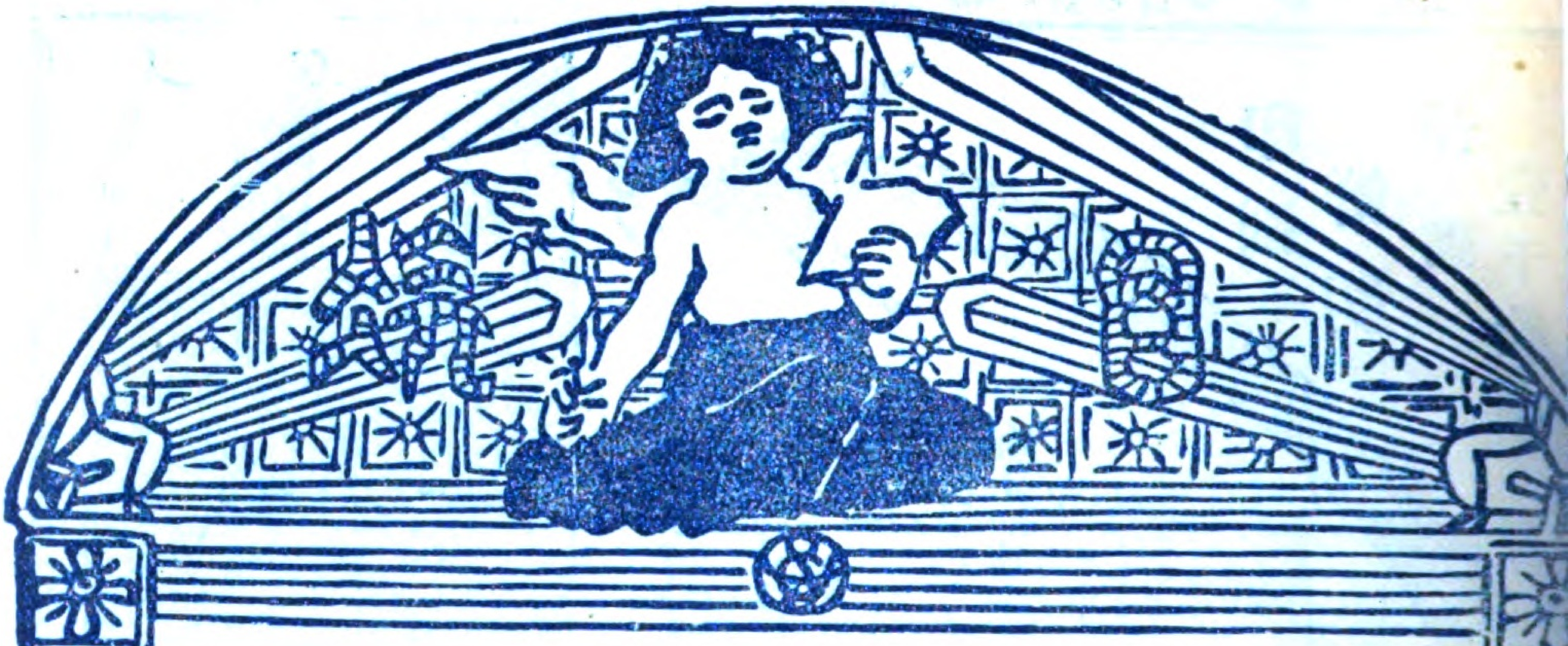
○三宅雪嶺翁……田岡嶺雲……六八

○雪嶺論……白雨生……七〇

○三宅君について……井上哲次郎……七二

○三宅雪嶺論……匿名氏……七三

佐藤信淵翁……新渡戶稻造……七九



▲海内

清國の情勢に對する世論……星雲子…八四

▲小説

崖……眞山青果…八七

昔の女……三島霜川…一一〇

閑日月……正宗白鳥…一三一

▲詞藻

長詩二章……太田正雄…一三八

長詩二章……吉井勇…一三九

英詩四篇……野口米次郎…一四二

和歌……尾上柴舟選…一四四

俳句……大谷繞石選…一四八

▲評論

電話使用料度數制に對する當局者と新聞紙との態度……野逸道人…一五三

▲雜俎

歌舞伎座と市村座……醉美生…一五八

▲新刊批評……一六〇



◎大增訂日本大辭典 ことばの泉を推供す

絶世の大好評を博して、發行以來二十三版を重ねし、故落合直文先生著ことばの泉は、大增訂の計畫ありしを以て、久しく世の眷顧に背きたるが爲め、古本も正價以上に賣買せらるゝの盛況を呈せり此偉大なる日本辭典の覇王は、五ヶ年を經て漸く大增訂を完了せしを紀念すべく、空前の大廉價を以て諸君の座右に推供す即ち諸君は今空前の特權を掌握せり

特に本文を所持せらるゝ方にて補遺のみ入用の向に限り期限中下の特價を以て販賣す期限後は補遺のみの御注文に應ぜず

諸君が特權を行使し得べき期間は決して永き間に非ず即決即斷

今日唯今申込れよ

故落合直文著
森鷗外博士序
正價金拾貳圓
特價販賣
十二月
廿日限り
語數廿萬言餘

印刷鮮明
挿畫壹千餘個

期限後は斷然正價一切割引せず

特價 主卷 補遺 全二冊 金九圓
郵稅內地四拾八錢臺灣樺太清韓壹圓拾錢

補遺特價四圓
郵稅 內地廿錢 臺清韓樺太拾錢 市內無料

體裁 四六倍判金具付脊革美製六號活字四段組廿八行廿字詰
用紙 舶來最上等紙
紙數 參千百餘頁

あいうえを順
いろは索引畫引索引

●內容見本 無代進呈

東京日本橋
大倉書店 發行
振替貯金口座二三八番





第二十三年
第十二號
（第二百卅七號）

兩宮崩御後の清國情勢

（一）

清國光緒皇帝は十一月十四日を以て崩ぜられ、而して慈禧皇太后（即ち西太后）は翌十五日を以て崩御せられたる旨、公然列國に通知せられたり、帝の大漸なるや、太后の旨を承けて皇弟醇親王の子溥儀を立てゝ皇儲と爲し、醇親王を以て攝政とするの詔を發せられ、次で九年を期して立憲の大政を創始して以て我が在天の靈を慰さめよといへる帝の遺詔、及び臣僚心を一にし、太后に聽きて政治を行ふべき旨の遺詔を併せ發せられたり

西太后も亦病革まるや、軍國の政治は攝政醇親王より裁定せしむ、大事は必らず皇太后（光緒帝の皇后）に稟請して執行すべきを諭示せられたり

皇帝及び實際の主權者たる西太后の兩宮殆んど同時に崩御す、清廷の不幸の重大なる實に哀悼に餘あり、然かも今後の政局如何、是れ差當ての問題也

（二）

光緒帝が十一月十四日に崩御し、西太后が翌十五日崩御せられたりといふの公表は、單に公表に止まる、必らずしも事實に非ず、否、多くの疑ひを挾むべき餘地あると言を俟たずとす

我が政治界に於て、殊に多數の清國通及び清人多數の了解する所によれば、西太后先づ始めに崩御せられたるも、帝は未だ之を知られず、却つて臣下の進藥に由て暴死せられたるものゝ如し

帝は聰明英邁の資也、之を其の風貌より相するも、其の實弟醇親王の爲人より考ふるも、決して庸昧の君主にあらず、素より貴公子通有の常習として、疳癖強く、躁急に事を擧ぐるの傾向はあらんも、天成の英氣は抑へんと欲して抑ゆると能はざるものありしに似たり、現に其の師たりし翁同和を親任し、康有爲の如き年壯の秀才を任用して、變法自彊の改革を企畫されたるが如き、帝の資質の一端を窺ふに足る、然るに事の唐突なるがため、西太后以下諸王大官等の反對に會ひ、帝は殆んど幽囚の身となり、翁は罪せられ康は逃れて左右皆存せず、太后再び垂簾して萬機を總裁せらるゝに至て、帝の大志悉く沮せられ、同時に四億の民衆に君臨する尊を以てして、宛然たる幽室の囚人と一變せられたりき、加ふるに帝の皇后が西太后に愛せらるゝも帝と善からず、帝より年長にして而して美ならず、而して甚だ婉柔ならざるが如きは、轉た帝をして其の精神を過敏衰弱ならしめたりしや論莫かるべし

然れども帝が尙ほ春秋に富むの身を以て、急に崩御せらるゝが如き重患を有せられしとは、未だ甚だ信ず可らず、勿論近時著るしく健康を損ぜられ、現に我が東亞同文會々長鍋島侯等の謁を請ふや、始め許して後に止められたりしと雖も、十月下旬には日本公使伊集院氏を引見せられしといへば、急に崩御されたると聊か意外に思はれざるに非ず、茲に於てか多くは揣摩すらく、七十四歲にして赤痢に罹られたる西太后先づ崩せられたり、西太后崩御の後は、帝の起ちて萬機を親裁さるゝと當然の順序なり、然れども帝起たれん乎、再び變法自彊を斷行し、殊に立憲の實施を急ぎて、銳意改革せらるべし、而して曩に翁同和等に反きて西太后に密奏し、以て帝の改革を沮止したりし袁世凱の如きは、必らず身首處を異にすべく、守舊主義者として西太后に親任せられし張之洞また黜けられ、諸王大官また多く貶斥を免かれざるべし、況んや西太后の寵を專らにして大姦の目ありし彼の宦官李蓮英の如きをや、乃ち事端を恐れ、自家の廢黜を怖れたるもの密かに藥を進めて帝の壽を縮めたると疑ふ可らず

彼の帝に疾ありと稱して故らに各省より名醫を召し、又萬機太后の旨を承くるの遺詔を發したるが如き、力めて帝の崩御の迹を裝ふの傾向あり、密謀の密にして而して巧みなる殆んど驚ろくべきものあり、殊に醇親王の子溥儀の齡僅かに四歲(或は六歲ともいふ)なるを册立して皇儲とし、親王を攝政としたりしが如き、事に遺算あるとなし、而して其の廷中一二人の謀圖にあらざるや、知るべきのみ

以上は揣摩する者の唱導する大要也、事の奇にして怪なる、吾人意料の外にありと雖も、由來暗黑面の深き淸廷に在ては、如何なる事情あるや殆んど思議す可らず、殊に此の推測を否認すべき的確なる事

實の公知されざるに於て、吾人は姑らく之を一說として記述し、更らに淸國の將來を視察するの外なし

(三)

光緒帝の崩御が淸國の政局に多くの變化を生ぜざるべしとの世論には、吾人も亦一致せざるを得ず、帝は一室に幽居して、僅かに外臣に謁を賜ふの外、徒らに虛器を擁せらるゝのみ、皇帝たる實權は却つて西太后にあり、帝の有ると無きとは素より事實に於て何等の影響する所あらざれば也

然れども西太后の死活は斯の如く平易なる能はず、恭親王、肅親王等が鋒鋩を收めて事端を滋くせざりしも、袁世凱、張之洞、那桐、鐵良等が心に慊焉たるも然かも太だしく相爭はざりしも、滿人漢人等の內に相鬩がざりしも、西太后能く之を鎭壓し統御せしに由る、然るに太后世を去らん乎、多くの野心家群起して、各々其の欲する所を恣にすべく、隨つて爭鬩絕へず、北京より漸く地方に及ぼし、諸王大官等中央政府に於て相反目すると同時に、總督巡撫等また地方に於て相對峙し、十八省四百州を擧げて亂麻の如きに至らんとは、我が政界多數の觀測する所也

然れども吾人の見は聊か異なれり、日淸戰役以來、滿洲の北部は露國に收められ、膠州灣は獨逸に領せられ、南滿洲また竟に日本の手に移りて、各省到る處の利權皆歐米人に專占せらる、彼の團匪の變には、北京城下の盟を爲し、兩宮遠く西方に蒙塵せられて、垢辱殆んど極まれり、外難の大に恐るべきは、淸廷の擧げて戰慄する所、如何に頑迷固陋者流と雖も、切に之を自覺せざるを得ず、况んや身自から其の局に當りて外人と折衝し、若くは外國兵を目擊し、兩宮の蒙塵と共に親しく辛酸を嘗めたりし諸王大

官をや、彼等が時として勢力の爭奪に暗鬪を演ずることあるも、畢竟細微の暗鬪に止まる、大體に於て心を一にし力を協せ、然らざるも陰忍して我執せず、己れを枉げて事の圓滑を害せざるは、單に西太后の威望赫々たるが故のみにあらず、實に外難の由て乘ぜんことを怖るれば也、漫りに勢力を爭ひ、中央地方に蟠蜒して紛亂を事とせば、單り所在の匪徒亂黨を煽起するに止まらず、虎視耽々たる强國に乘ぜられて、竟に淸國を危くすることを恐るれば也

彼等の或る者假令光緒帝を毒弑すとも、而して心に之を難ずるものも、而して溥儀の帝位に登り、醇親王の攝政たるに快からざるものも、皆相訐き相爭ふに於ては、直ちに外難を招き、外國の干渉を受けんことを恐れて、枉げて一致し協力するにあらざらんや、若し諸王及び袁張那鐵等を以て單に勢力を爭ひ、滿漢の感情を以て相鬩ぎて、また國家的觀念なきものと做すが如きは、寧ろ彼等を侮辱するもの也、否、彼等を視ることを謬まるもの也、彼等假令列國政事家の如く忠純にして大勢に通曉することなしとするも、國家を孤注としてまでも、只自個の勢威權力をのみ張らんとするものなりと做すは、寧ろ酷也、

吾人は斯く觀察す、思ふに西太后の崩御に由て、或は一歩其の方針を謬まらん乎、亂階立ろに生じて國家危亡の端之より開くべしとし、諸王大臣等相計りて善後の方策に專一なりし結果、皇儲攝政の事總て甚だしく紛爭せずして定まりしものなるべし、彼等はまた民望を離叛せざらしむるがため、光緒帝の遺詔と號して、九箇年の後必らず立憲の大政を實施して、以て不幸なりし皇帝在天の靈を慰さめんことを發表したりしなるべし

諸王大官等既に協心戮力せば、地方の總督巡撫等また何ぞ徒らに相紛爭せんや

（四）

我が德川幕府の末造に於て、將軍の薨ずるや、繼嗣問題紛爭の種子となり、大奥は勿論、德川氏の連枝一門たる三家を始め、譜第外様の大小名また多く好む所欲する所に偏して、紛々乎として相爭ひ、著るしく幕府の威嚴を損し、竟に薩長の叛を招き、延きて幕府倒滅の機を胚胎したりき、今日の清廷また斯の如しと思惟するものあるべし

然れども記せよ、我が幕末の大小名等は、未だ日清戰役の如き苦き經驗を喫せざりき、明治三十三年の變亂の如き手痛き機會に出遇はざりき、今の清廷を以て幕末に比するは、抑も彼此の情勢を無視する者のみ、今の清廷の諸王大官は、常に外勢に壓迫せられて其の最も怖るべき所以を解するもの也、革命黨其の他の亂を思ふもの多くして、皆乘ずべき機會を耽視することを知れるもの也、彼の聰々として中外の形勢に盲なりし我が幕末の大小名とは、到底同日に視る可らざるのみ

或は曰く、淸國の革命黨、殊に南淸地方の革命黨は、常に機會を俟つもの也、兩宮の諒闇に乘じて必らず所在鼓應して相起つべし、是れ四百餘州紛亂の階梯なりと

然れども革命黨の實力如何と察せよ、彼等の或るものは哥老會一流の徒也、常に竊盜せざるも强盜す、即ち銃器刀劍を携へて官人を襲擊し、財物を强奪して以て自から義賊と號す、實に梁山泊的にして又古演劇的なる無賴漢也、故に剛膽にして死を怖れず、慓悍にして獰猛なれども、然かも放縱にして節度あ

るとなし、彼の總督等の擁有する官兵なるもの多くは雇兵にして、事ある毎に苦力其の他を雇使するがため、軍器服裝は儼乎たる軍隊なるも、勿論訓練あるものに非ず、蓋し總督等常に軍費を私消して規定の兵員を置かず、事あるに方つて俄かに雇兵を以て辛ふじて其の定員に充つるのみ、故に怯弱にして用を爲さず、賊に逢へば却つて投降す、革命黨員等此の事實に據りて官軍の怯懦なるを信じ、且つ一たび革命軍を起さば、官兵皆銃を倒まにして來り降るべしと做せり、或は然るべし、然れども是れ一部分のみ、總て然りとは做す可らず、現に强兵を以て鳴る直隷及び湖廣の軍隊の如き、精强頗ぶる恃むに足るものあり、革命黨等假令所謂投降の苦力兵及び哥老會の猛士を糾合して之に當るも、到底其の敵にあらざらん、革命黨が武力を以て官兵と戰ふが如きは實に無謀の極也

思ふに革命黨中の識者は、徒らに武力を以て事を起すの拙なるを知れるなるべし、彼等は寧ろ別手段を以て其の志を成さんとすべし、別手段とは他なし、立憲政治により、多數決を以て漸く其の志を成す、是れ也、勿論曾國藩の如き大人物出て、精鋭なる湖廣蘇浙の士の死心を得て、風雲を叱咤するあらば革命の事或は成るべし、然かも今日の革命黨には斯の如き大人物なきを如何せんや

吾人は素より十年二十年の後を知ると能はず、然れども北京の諸王大官等が國難に殉するの誠意を以て、假令一時なりとも同心戮力する間は、革命黨竟に起つと莫かるべし、假令起つも、僻遠の地に草賊的一揆を演ずるに止まらん、少くも一二年の間は然るべしと想定す

列國の內、或は皇帝太后の崩御に乘じて、野心を逞ふせんと欲するものなきや否や、彼等の或るものにして、若し巧みに諸王大官中の野心家に通謀し、若くば地方の革命黨に密計を授け、之を煽動し援助せば、亂階を生ずると素より言を俟たずとす

然れども吾人の見を以てすれば、我が日本と英國とは、少くも斯の如き計略に反對すべし、日英同盟は清國の現狀を維持し、由て以て其の平和を保障するものなれば也、勿論諸王大官の紛爭するに干涉して、强ひて協心戮力せしめんとまで壓迫するが如きは莫かるべきも、列國中の或るものが放らに紛亂に乘ぜんとするが如きは、斷じて日英同盟の默認せざる所也、而して米國も亦義として然るべきと論莫からん

若し露國にして十年前の如き態度を依然繼續せば、此の際必らず沈默すると無かるべし、然れども今の露國は平和主義を執持するもの也、日露戰役に疲れて輕々しく其の慘事の再演を欲せざるものなり、現に近くバルカン半島問題に就ても、最も平和に最も靜穩なる態度に出てたるを視るも、其の志察すべし、素より北滿洲に於ける現地位を放棄するが如きとは萬なかるべきも、進んで北京の政變に乘ずるが如きは、斷じて露國の爲さゞる所也

獨逸皇帝が其の海軍擴張を以て、大に東洋に成すとあらんとするがためなりと公言せられしに徵すれば、或は好んで淸國の不幸に乘ぜらるゝも知る可からずといふ者あり、然れども獨逸海軍の計畫せる軍艦の建造を視るに、其の載炭量の大ならざる、決して東洋に事を企つるものとは信ず可らず、獨帝の公言は畢竟力めて英國の嫉視を避けんとする遁辭のみ、假令有爲なる獨帝手を淸國に伸さんとするも、其

の議會及び國民の意思に徵するに、獨逸が今日獨り進んで野心を淸國に逞ふせんとは信ずる能はず、何ぞ况んや日英米の列國之を容さゞるべきをや

淸廷兩宮の崩御によりて、直ちに列國野心家の干渉を來し、延きて亂階と爲るといふが如きも、亦寧ろ杞憂のみ

吾人は淸國の形勢を斯く樂觀す、但し此の樂觀の繼續すべき時期は、吾人も其の永きを保證する能はず、蓋し彼の立憲政治其のものこそ、實に淸國の大變動を來すべき槓杆にして、兩宮崩御の如きは、之に比すれば一の小問題のみ、而して此の槓杆の使用期限は近く九箇年の後に迫り、之を使用すると否とは、亦實に全淸國を搖かすに足るべき大問題也、吾人は淸國の將來を卜するに於て寧ろ主として此の大問題を注視せんと欲す　（十一月十六日稿）

出版界の惡傾向

泰平既に四十年、多少の內亂はあり、淸國及び露國との大戰はありしも、多く邊隅に止まれると、大戰の國境以外に在て、然かも連戰連捷の好果を收め得たるとに由り、多數國民の血を視ざると實に四十餘年に及ぶ、國民生活の漸く華麗なると共に、物質的要求以外、別に精神的要求を生ずると、蓋し必然の理數ならずんばあらず

乃ち一方に美術文學の發達すると共に、國民讀書の好尙また甚だ熾んにして、此がため出版事業大に興り、刋行の書籍啻だに汗牛充棟のみならず

熟々此の多數の出版書を通覽するに、無用の書多くして有要の書は甚だ鮮し、バイブルが二千年を經て尙ほ日夕戶々に誦せられ、論語が三千年の後、曾て讀者を絕たざるに視れば、天下有要の書は、歲月と共に其の價値を減ずるものにあらず、然かも此の二千年三千年の間、著述せられ出版せらたるもの千を以て數へ萬を以て算すべきに、然かも千秋に不朽なる者の寥々たるに徵するに、無用の書の多くして有要の書の太だ少きや明らけし、學者畢生の心血を濺ぎて著述したるものも、千年に傳はる能はずして、徒らに蠹魚の腹中に葬られ、若くは襖其の他の下貼たるに止まるは、寧ろ太だ憐れむ可からずや、何ぞ況んや多く勞するとなく、單に一時の名聞のため、若くば衣食のため、輕々に筆を執れるものをや、其の期年ならずして世に忘れらるゝは、忘るゝものゝ罪に非ず、無用の書を作りたる罪のみ

中村敬宇翁の西國立志編（スマイルス自助論飜譯）、福澤諭吉翁の世界國づくし、內田正雄氏の輿地誌略は、明治の三大出版と稱せられて、一時實に天下を風靡したりき、然かも今日如何の狀ぞや、敬宇翁の立志編は、其の譯文の妥當平正なるがため、將た意味の尊貴なるがため、今に尙ほ坊間に行はるゝと雖も、世界國づくしは其の刻版已に慶應義塾の天井板と爲つて、僅かに當年の遺物たるのみ、輿地誌略に至ては、之を求むるも幾んど得べからず、所謂明治の三大著述なるもの亦斯の如きのみ、何ぞ況やん遠く之に及ばざる片々たる著作物をや

黒岩氏の天人論は、近時の出版書中、實行に於て實に比類なしと稱せられたりき、然れども其の刊行後未だ五年ならずして、已に杳として物色す可らざるが如し

吾人は此等の事實を看て、憮然として自から歎せざる能はず、時に臨んで筆を執り、心血を傾けて論辯する所のものも、二年三年の後、漠焉として世に存せざらんとす、自から憐まざらんと欲するも得んや、然れども更に退いて思ふに、天下無用の書を著はす者の罪劫や數ふべらず、多くの紙を損し、多くの墨汁を損し、而して少からざる人工と費用とを投じ、併せて讀書子をして金玉啻だならざる貴重の時間を徒消せしむ、天物人事を暴殄すると實に測る可らざる也、之を擧げて世の著述家、殊にブックメーカアに警告する必らずしも無要ならざるべき乎

更らに一事の慨すべきは、書肆が爭ふて浩瀚なる各種の辭典を出版すると是れ也、然かも之が滔々として止む可からざる流行と爲れるが如きと是れ也

辭典辭書は、諸種の分類法に由て捜索を便ならしめ、有らゆる事物を解説し説明するものにして、其の狹くして深からんよりも、寧ろ淺くして廣きを主とす、力めて多數の事物を網羅するを主眼とする以上、素より然らざるを得ざれば也、故に日用常事の淺薄なるものは之を辭典に求めて甚だ便なるも、少しく專門的に研究せんと欲せば、否、專門的にあらざるも、少しく詳しく知らんと欲せば、到底辭書辭典に由て滿足する能はず、若し世を擧げて辭典辭書を便なりと做し、啻だ之に由て足れりとせば、其の智識の淺薄なる論を待たず、乃ち結果よりいへば、辭典辭書の盛行は、寧ろ學術の退歩を意味するもの

と做し、專門的研究の衰ふる徴候と爲すも過當ならざらんとす、是れ吾人の慨する所以也

且つ此の辭典辭書なるものは、其の記する所の多くは淺薄なるに似ず、頁數の多くして書册の大なる、而して價の低からざる、隨つて物資の多く消費せらるゝと貲る可らず、天下無用の書を作つて天物人事を暴殄するの太だしき、豈之に缺ぐるもの多かる可けんや

彼の大英百科全書（エンサイクロペヂア、ブリタニカ）は、此種辭書辭典中の巨擘也、最大最高價なる未だ之に過ぐるものあらざるべし、近時我が書肆の競ふて浩瀚なる辭典辭書を出版せんとする、また多くは之を模倣するのみ、然れども思へ、家計の太だ裕かならざる讀書子にして、百科全書の月賦支拂にすら窮するに似ず、此の書に由て覺に幾干の補益を得たりしぞ、吾人の知る所によれば、僅かにトンチン保險法の要領を解し得たりしものあり、朧氣ながら養鷄の大要を會得したりしものあり、唯だ是れのみ、然かも其の人は、此の浩瀚なる大出版を古本屋に沽却し、若くは典じ去つて其の書齋に存せざるに至れり、比較的に詳密なる大英百科全書すら然り、況んや遠く之に及ばざる各種の辭書辭典をや

吾人の斯く曰ふは、徒らに書肆を嘲けり罵るにはあらず、書肆が利益の多寡よりも、其の名譽面目に掛けて、競ふて大なる辭典辭書を刊行する其の意氣は稱するに餘りあるも、奈何せん、其の出版物は其の實天下無用の書にして、徒らに天物人事を暴殄するに過ぎざるを、是れ實に近時の我が出版界に於ける悪傾向也、吾人は寧ろ書肆が其の資を轉じて篤實なる學者を助け、有益なる研究を積ましめて以て其の結果を發表せしめんことを望む、是れ大に學界に貢獻し、文明を贊襄する所以ならざらんや

殊に惟むべきは、多数の新聞紙を始め、貴族又は學者識者等が動もすれば辭典辭書の浩瀚なるを激賞して、必らずしも其の實際の價値を辨別せず、相率いて之れを稱揚し、益々書肆の虚榮心を煽するゝ也、吾人は之を非難して、切に其の反省を促さゞる能はず、多くの天物人事を徒消して、無用の書を作り、以て天下の讀書界を苦ましむ、寧ろ罪悪也、抑も何の稱すべき所ぞ、世上泰平に驕りて深く考慮を爲さず、吾人の時に苦言を吐く、嗚呼豈止む可けんや



時代の謳歌

竹越與三郎

（一）

希臘の哲人の言葉に『人が宇宙萬有の中最も知らねばならものは何であるかと云へば、即ち人彼れ自身である』と云ふことがある、余は一轉して『總ての歴史の中、人の最も知らねばならぬ事は何であるかと云へば、即ち現代夫れ自身である』と云ふ事を言ひたい。凡そ歴史は必要であるが、歴史夫れ自身が吾々に何等の利益がある譯ではない。現代が如何にして生じて來たかを知る爲に歴史を知るの必要がある。即ち明治の今日は如何にして出て來たかを知る爲に維新の歴史を知り。維新は如何にして出て來たかを知る爲に、幕府の歴史を知る必要がある。幕府は如何にして出て來たかを知るが爲に應仁の歴史を知るの必要がある。故に神武天皇が如何なる船に乘つて來たかと云ふやうな事を知る事は、歴史上の知識として何等の必要もない。即ち現代と相聯した點より之を知るの必要があるのである。故に余は歴史の教育法も一變して、先づ現代を教へ、次に維新史を教へ、次に幕府歴史を教へ、斯くの如くして中古に遡り、斯くの如くして上古に遡る必要があると思ふ。

扨て今日の政治家、識者、論客と言はれる人々が、果して幾何か現代を知つて居るかと云ふことは疑問である。東京は大都會であつて、之に住する者は何百萬人であるが、併し此何百萬の人間が知つて居る所の東京は果してどの位であると云はゞ、實は東京ほど馬鹿な人間の多い所は少なく、多くは皆な向ふ三軒兩隣を

知るに過ぎぬ。

然るに其見る所此の如く狹隘なるを顧みず、容易に現代を非難して、澆季であるとか、末世であるとか腐敗したとか、救ふべからずとか云ふものの多いのは、實に井蛙の管見であつて、一笑に附たりと云ふべしてある。中には現代を非難するにあらずんば、自から偉なりとするの道がなきかの如く思ふものあるに至つては、唯驚くの外はない。

然るに余は此現代に生活して此現代ほど豪い時代はなく、我國の歷史二千五百年間は扨て措いて、歐羅巴の歷史を通覽しても今日の如き立派な時代は少ないと思つて居るのであるから、此時代に對して非難する者があるならば余は辯護しなければならぬと思ふ、否余は現代を負ふて起たんとするものである。無論現代とて缺點はある。併ながら余は同時に長所を認めるのであるから、此美い所を擧げて説明したいと思ふ。所が我國は兎角古を尊んで今を卑むの弊があつて、今日を非難することを以て甚だ善い事と思へる者が少くない。昔から人心是れ微に道心是れ殆しと云ふやうな事を言ふ者がある。それは何時かと云へば支那の書經に始まつたのであるが其後には世は最早澆季になつたと云ふ聲が出て來て。斯くの如く始終己れの接して居る時代を非難する聲がある。然るに此聲を日本でも眞似をして、あゝモウ末世である、世は末であると云ふやうな事を頻りに言ふものがあるが、此聲が唱へられて以來最早一千年以上である、けれどもなか〳〵日本は惡くならざるのみならず、益々良くなつて、今日の如き大日本が出來たのである。故に古を尊んで今を卑むと云ふは口癖であるが、實は如何なる時代に於ても時々此聲が出ることがある。と云ふのは或る時代に働いた人々は必ず相當の年をとれば死ぬ。死なんとする時には必ず此聲を出すのである。即ち元龜天正時代の武士は風餐雨宿して大功業を立てたが、是が三代將軍頃になると、百萬の大敵に屈せざる人々も、寄る年波に抵抗が出來ず白髮の老翁となつて、將に世を辭せんとする時、其時代を見ると驚くべき變化がある。全く

自分の想像しなかつた所の時代が現はれて來たのである、是に於て乎此老翁等は世を去らんとするに臨んで其時代を非難するのである。元龜天正頃の武士は――自分の若い時には綿など丶云ふものはなく、袷の中に蒲の穗を入れてそれで暖かいとして居つたのである。然るに今の若い者は綿の這入つた着物を着るとは言語道斷だ輕薄物だと言つて居る。又『おあん物語』などを見て見ると十三の年に着た帷子を十七の年まで着て、丈が脛の所までしかなかつた、どうか足の下まである長い着物を一枚欲しいと思つて居つた、然るに今の若い者は長い着物を着てゾロゾロ歩いて居るが、實に不思議だと云ふやうな事を言つて居る。又元龜天正頃は晝飯もなにもなかつた、一日二食しかなかつた、然るに今では三度々々美しい物を喰べる、實に贅澤になつて世の中は末だと云ふやうな事を言ふ。所が此元龜天正時代の者に非難せられた三代將軍頃の武士は享保頃になると、又其時代を又非難する。どうも時代がモウ末になつて仕舞つた吾々の若い時は足袋などはなく、皆な素足で歩いたものである。實に立派なものであつた、然るに今の若い奴は足袋を穿き、足袋屋はどの町にも出來た、世の中はモウ輕薄になつていかぬ、吾々の若い時は頭の毛に着ける鬢付油と云ふやうな物はなかつた、蠟燭の油で固めて居つた、然るに今の奴等は香のする鬢付油を着ける、モウ世の中は末になつて仕舞つた、又吾々の若い時には元結と云ふやうな物はなかつたが紙捻を自分で拵へてそれで髮を結んで居つた、所が今は紙捻なんと云ふ物は使はぬやうになつた、どうも輕薄極まると、斯う云ふやうに嘗て前人の非難を受けた時代の人が、又其次の時代を非難して居る。それと同じ事で明治の社會を作り、若くは明治の始めを見た人々が、今日の社會を見るも、其想像以外の社會が出來て來たのであるから嘆息に堪えぬ、恰も元龜天正の武士が三代將軍時代を非難するが如く、享保時代の武士が天明寬正時代を非難するが如く、明治の始めに功績を擧げた人々は今日の社會を非難する、是は彼等の去らんとする時の聲である、昔の言葉に群犬怪んで吠ゆ、其怪

しむ所を吠ゆるなりと云ふことがある、明治の時代を見て分らぬて之を吠ゆる老人の聲もまた此くの如しであるから、敢て非難するにも當らぬ。誠に人の死せんとする其言や善しと云ふことがある、併し自分はさうは思はぬ、人の將さに死せんとするや其言甚だ悪い。

（二）

近時井上侯と云ふ人があつて、國家の元老である、而して其危篤の時に當つて汽車が其別莊の前で止まると云ふやうな騒ぎになつて、大勢力のある人である。國家の元老であるとすればさう云ふ事も宜いてあらう。然るに、此井上侯と云ふ人はどう云ふ人であるかと云ふと財政家と云ふとてあるが、此人の經濟とはどなんものであるか。即ち日露戰爭中に此人は金が外國へ出てはならぬと云ふので、成るべく外國の物を買はせないと云ふので正金銀行へ命令して外國爲替をやらせないと云ふことになつた。是に於て乎正金銀行は餘儀なく外國爲替を組まないやうにして居た。併ながら正金銀行が外國爲替を組まなくとも、此外に香港上海バンクと云ふやうな物が澤山ある、故に外國から品物を買ふとする者は是等の外國銀行に頼んで爲替を組んで品物を買ふから、品は來る、金は出る、而して外國銀行がコンミッションを取つて、正金銀行は儲からなかつたと云ふ結果に過ぎなかつた。それでも井上侯は安心をして居たと云ふのである。井上侯の財政策とはこんなものであるが、是も一種の財政策として宜いと云ふならそれて宜い。然るに此人が病氣て死にかゝつた時に、友人が何だか知らぬが財政の事を言ふやうであるから、其言葉を書留めて國を救ふの策としやうとしたと云ふことてあつたが、何だか譯の分らぬ夢中で言ふ事を書留めて國を救ふと云ふ、若し事實となつたならば救はれる國民こそ甚だ迷惑である、實は此の今日を非難する聲は、此老人の夢中で言ふ聲と同じことである。老人が斯くの如き聲を出す必ずしも不可ならず、若い者が之に和せんとするに至つては驚くべき事と云はねばならぬ。

偖て現代に對する非難の中に第一今日は忠義の心、

愛國の心が薄いと云ふやうな事を言ふ者がないではないが、併し今日の如く愛國忠義の心の發達した時代は何時にあるか。歷史を見れば平民なる者は極めて憐むべき者であつて。歷史に於ける平民の位地は多くは奴隷であつて、無論公民もないではないが多くは或る大きなフアミリー、源、平、藤、橘と云ふやうな大きな族黨があつて、其族黨が人民を私有財產として有つて居つたので、平民の多くは田地、田畑、鋤鍬と同じく豪族の私有財產であつた。我國の歷史に奴隷の文字がないが、西洋の奴隷と同じやうな取扱を受けて居つたのである。此時代に當つて天子は直接に平民を支配することは出來ないで、源、平、藤、橘の如き大族が有つて、其上に天皇がある。吾々は直接に天皇に隷屬することが出來なかつたのである。斯くの如き時代にあつては、平民は國政に參與しやうと思つても出來ぬ。又同時に國を愛すると云ふことも出來ぬ。即ち此時代の武士は天皇の名に依て行はれる事は如何なる事でも抵抗は出來ぬ。例へば紀貫之の娘が自分の庭に梅を植ゑて居つた、此梅の花が甚だ美しいと云ふので使者が來てお上のお入用であると言うて其梅を拔去らんとした。此時に當つては紀貫之の娘があゝ慘酷な事とは思つたが、併し陛下の仰とあれば抵抗は出來ぬからと歌に依て之を諫めた、即ち

　勅なればいとも畏し鶯の
　　宿はと問はゞ如何に答へん

此歌の爲に陛下も心を取直して梅を返したと云ふことである、當時は己れの意思をさへ發表することも出來なかつたのである。然るに今日はどうである。源、平、藤、橘何處にかある、陛下は國民に君臨して政治上の太陽となつて、其恩光は均しく五千萬人に及ぶのである。吾々は此國政にさへ參與することが出來る時代である。斯くの如き時代にあつては國家は既に自分の物である。吾々は此國家に對して責任を持ち、天皇と共に此國を有するものである。日露戰爭に於ても、日清戰爭に於ても、此心が即ち勝利を得た基である。兵卒が銃劍を揮ふ時我が國家の運命は此銃劍の尖にある

と考へ。兵卒が彈丸を放つ時、此一發に依て國家の運命は定まると思つた。戰爭に於て我國の勝つた所以は其處にある。之を以て豪族の財產に過ぎざりし昔の時代と比したならば、如何に忠義愛國の念が厚く且つ強いかと云ふことは說明するまでもない事である。之を以て忠義愛國の念が薄いなどゝは、如何なる時代に於て是れより強い時代があつたのであるか。

第二に少年が墮落する、風儀が惡いと言ふ、余は墮落大に可なりと思ふ。凡そ慶應義塾にせよ帝國大學にせよ其始めて出來た頃、田舍から出て學校に這入らうと云ふ者は大抵村に在つては素養のある、人格のある、家庭の整つた家の者であつて、誰が壓迫するともなく學問の必要を感ずる位であるから、それ自身立派な種である。此種が學校に這入つて、而して百人が百人まで悉く成功すると云ふことは當然である。然るに是等の人々が成功して教育は驚くべき効能のあるものであると云ふので、教育の功果を天下に示したが爲に、今日に於ては村に於ても第二流、第三流の人々までも皆な學問しなければならぬと云ふことになつて、自ら好まざるも、父兄の爲に鞭撻せられて東京に出て學問すると云ふ人が多くなつた、是等の徒が百人が百人まで成功しないて、幾分か墮落生となると云ふことは當然の事である。此等の少年は二三十年前であつたならば、村の鎭守の相撲で大に勝誇つて村中を騷がしていがみの權太でもやつて居る位の人々である。然るに是が學校へ這入つて來ると云ふ事であつて、即ち教育普及の効能である。其いがみの權太の中には學者となり學士となるのも澤山ある、新華族となり勅任官となる者もあらう、其中に幾分の墮落生があつて新聞に出たからと云つて驚くことはない。當然の事である。所がいがみの權太であるべき者が官吏にでもなるのは、即ち教育普及の現象であつて賀すべきことである。

また女學生も惡いと云ふが同じ事である、若し昔の儘だつたら餡屋のおさとのやうな事をして赤前垂で村の風俗を害して居るべき者が學校へ這入らなければならぬやうになつて來た、然るに其中には亞米利加へ行

つて女學士となつて、さうして道德を說くやうになるものもある。誠に賀すべき事であつて、其中二人や三人の墮落生が出て新聞に出たと云つても怪むに足らぬのである。墮落益結構である。墮落生が出るのは聖代の有難い證據である。是等の譯を知らず、割合をも考へずして、一部の人が新聞に載つたからと云つて大に嘆て、やれ風俗が紊れたとか、女子が墮落したとか、云ふに至つては談何ぞ容易なる、實に狼狽者の議論と言はざるを得ぬ。

第三に今の青年は無氣力で慷慨する者が少い、政治に志す者が少いと云ふ人があるが、余も願はくは今の學生がモ少し政治に力を入れて貰ひたいと云ふ點に就ては同感であるが、併し之を以て今日の學生の無氣力であるが爲めであると言ふに至つては、故なき非難と言はねばならぬ。凡そ學生と雖も時代に背くことは出來ぬ。然るに今日は如何なる時代であるか、秩序が立つて仕舞つて居る。文官任用令と云ふものがあつて、試驗を受けて何年經つて奏任官となり、何年經つて勅任官となり、何年經たねば大臣となれぬと云ふことであつて、喙の黃色なる時から頭の白くなるまで勉強しなければ大臣になれぬと云ふのである。此時代の少年に玄關番でなければ、即ち大臣であると云ふやうに、一足飛の事を考へて居つた時のやうな事をせよと云ふのは無理なのである。今日は秩序が出來た、階級が定つた、秩序、階級と云ふもので縛つて置いて、縛らざる以前の如く政治に志を起せと云ふは、人の足を縛つて尙ほ走れと云ふが如きもので、無理な註文と云はなければならぬ。若し青年をして慷慨せしめ政治に志を寄せさせようとするならば、時代を革命時代に返さなければならぬ。時代は其儘にして秩序が立つた、階級が定まつたと云ふて喜んで、一方には書生ばかりは階級以外秩序以外に生活をせよと云ふは甚だ慘酷なる議論と云はなければならぬ。

且又今日は試驗と云ふものがある。試驗は余は大嫌ひであつて、試驗がなかつたならばもつと國が良くなると思つて居るけれども、此試驗が實は人を縛つて仕

舞ふものである。昔秦の始皇は儒者を殺し本を燒いたと云ふとであるが、併し本を燒いたり儒者を殺しても四百人か五百人である。科擧制度と云ふものは何千萬かの人を殺しつゝあると云ふ事を言ふても宜しい。是と同じ事で今日の我國の試驗制度、學校の試驗のみならず、文官試驗と云ふものも大に人材を殺して居るのである。斯う云ふやうな事をしながら、尙ほ其試驗なき時代のやうにせよと云ふのは、無理な註文と云はなければならぬ。故に若し今日の書生を非難する人は、第一に今日の斯くの如き書生を作らなければならぬと云ふ時代を、非難しなければならぬのである。

第四に今日の風俗は薄弱だと云ふものがあるが、是れ又無理な話である。昔封建時代の社會は家族が基礎である。家族本位であるが故に、總ての人は家族本位から割出された生活をして居るのである。而して家族本位の時には士族は內に常祿がある。さうして皆な寄つて集つて喰べて居つたのである。さう云ふ時代には競爭がない。靜かに生活が出來る。斯くの如き時代に於ては互ひに相救ふと云ふやうな事は容易い事である。併し今日の時代になつてはなか〳〵さうはいかぬ。祿もなければ、田地もない、人民が生活する第一の術は競爭である。個人を本位として競爭しなければならぬ。既に憲法、刑法、總ての法律が皆な個人を本位として割出してある。此時世に當つて尙ほ昔の封建時代の如くせよと云ふことは無理な話である。

余は昨年支那に行つた時に或親王の家に五百人の家族があると云ふことで驚いた、之を革めて必要な人だけにしたらどうかと言つたら、イヤ昔から斯う云ふ譯なんでどうもさうはいかぬ、自分の國の風だから仕方がない、我國も貴國のやうな個人本位になりたいと言つたが、所が個人本位と言はれる我國は、尙ほ昔の風が遺つて居つて甚だ面白くないのであるが、要するに國は最早競爭の時代になり、個人本位の時代になつて而して尙ほ封建時代の如き生活をせよと云ふことは出來ぬ事である。けれども凡そ同情の念の多い、コスモポリタンの精神の盛んなること、今日の如き時代はない。

決して薄弱ではない今日の如きコスモポリタンの同情の多い時代があつとすれば、如何なる時代であるか説明を煩はしたいのである。

　第五に今日は賄賂が盛んである、甚だ腐敗して居ると云ふやうな事を聞くが、成るほど餘り此點に就てはないと云ふことは言へぬ。併ながら今日の如く黄金を以て賄賂にすると云ふは、實は今日に始まつたことでないので、昔からある。歴史には書いてないが、表門から兵力で責めて裏門から黄金で攻落すと云ふことは、昔から使つた術である、是等の術を大に使つたのは秀吉である、さふ云ふ古い事は止しとして、明治の時代となつて所謂元老と云ふやうな人々も、丁髷を切つて役人になつた時からの給金を、一文も使はずに、喰はずに蓄めて置いて、之を鼠算で勘定しても、百萬圓にはならぬのである。然るに實際は數百萬圓の財産を持つて居る者がある。是等は腐敗にあらずして何であるか。斯う云ふ事が政治上の中心に行はれた時代があつたのである。然るに今はどうであるか、僅かの物を取つても、直ぐ八ヶ間敷なる、斯う云ふやうな事あつて、僅かの賄賂を取つても直ぐ問題となる。故に昔より惡くなつたと云ふことは決してないのである、益々良くなりつゝあるのであるから、此點も亦安心して宜しいのである。

（三）

　要するに是等の非難が教育問題に止まるならば是亦可なりである。併ながら是等古を尊んで今を卑む議論が實際の政治となつたならば、吾々の頭の上に直ぐかゝつて居るのであるから之を講究しなければならぬ。近頃内務大臣平田男は今日の風俗が惡いから之を純朴にしなければならぬ、どうも華奢であるから勤儉にしなければならぬと云ふやうな訓令を出したが、抑も朴とは磨かざる玉である、削らざる木である。純朴の風にせよとは即ち竹の柱に茅の屋根と云ふ堯舜三代の如き時代に引返さうと云ふのであるが、我々は電話電信自動車を用ゐて居る人民であるから堯舜三代の時代に引返されては甚だ迷惑をするのである。

而して如何にするかと云ふに二宮尊德を摸範として昔に返さうと云ふのであるが、二宮尊德では誠に困る。二宮尊德の時代は封建時代で、只今申したるが如く士族は常祿があり、而して百姓には田地があり、此百姓の田地も國家の田地を百姓が借りて居るので、此時代の士族は儉約をして行けば生活して行けたのである、百姓も進んで取る必要がなかつた、此時代に於て儉約と云ふは生存の第一の武器である、又士族は常祿があつたから常祿を失はぬと云ふことは何よりの必要である。即ち何か家事不取締と云ふやうな事があれば直ぐ自殺した。自殺すると云ふことは自分が死んでも遺族は尚ほ其祿を受けることが出來るからであつて、即ち自殺と云ふことは其人から云へば生存問題であつて、或意味から云へば經濟問題であつた。斯くの如き時代に於ては儉約が第一義であつたが、今日は政府は吾々に幾何の祿を與へて居るや否や、何の田地を與へて居るや否や、祿を與へないで、田地を與へないで、而して生活は封建時代の勤儉でやれと云つても、それは無理と云ふものである。否な寧ろ積極的に生活しなければならぬ。二宮尊德は決して惡い事はない。是は村に行つたら宜いかも知らぬ。併し是は田舍の政治であつて、天下の大局は之では料理する事が出來ぬのである。昔王安石は縣令であつた時に靑苗助役の法を行つた、是て官吏の監督は能く行はれたから縣令として成功した。是に於て乎大宰相となつた時に直ちに之を天下に行つたが、其結果はどうであつたか。人心惶惑、秩序破壞て、宋の社稷は是が爲に弱はつたと云ふ位である。田舍政治が天下に行はれぬと云ふ是が證據である。

のみならず故なく儉約をすると云ふとは會々贅澤にすると云ふ事を知らねばならぬ。近頃華族女學校抔で學校へ出る時は木綿の着物を着よと云ふ事を奬勵しゝあるが、何とか婦人會と云ふも亦た同樣であるさてある。所が是等の人々が學校へ出たり集會へ出たりする時は、木綿の衣服を着るが、家へ歸れば木綿の衣服を脱いで、絹物を着ると云ふ譯であるから、木綿の衣服丈は餘計に拵へられて、即それだけ贅澤になる譯てあ

る、近頃私が或人にどうも贅澤だ〳〵だと言ふけれども、何でそんなことを言ふかと云つたら、それは君が新聞を見るからいかぬ、新聞によれば東京の婦人は爭つて寶石入の半襟を使ふと云ふが、ア、云ふとては大變だと答られた、私は其人に向つて御安心なさい、寶石入の半襟と云ふけれども、一個二三百金のダイヤモンドも、一個二十錢のサフイヤも同じく寶石である、一個二十錢のサフイヤを襟に飾つたからと云つて國の經濟に何の關係があるか、そんな事は安心するが宜しい、又ダイヤモンドであつたらどうする、ダイヤモンドは唯は買らない、ダイヤモンドを買ふだけの力のある者が之を用ふるのに一向差支ない、大ひに可なりであると言つたが、實は寶石入の半襟が流行ると云ふことが新聞に出るのは、流行らぬから新聞に出して貰つて、さうして流行らせやうとして居るのであつて、新聞に流行ると言ふは會々以て流行らぬと云ふことを現はすのてある。斯の如く新聞の讀み方をも知らぬ人間が政治をすると云ふのは笑ふべき次第である。

斯う云ふやうな譯であつて勤儉論なるものは無用なるものであるが、併し内務大臣の訓令を聞いた地方官はどうするであらうか、彼等は大臣の心中を忖度してあゝは言ふけれども實は此時代が嫌なのだ、勤儉だの純朴だのと云ふが、其實今日の立憲政體が嫌なのだ、人民の強いのが嫌なのだ、競爭の強いのが嫌なのだと推測して之を地方に歸つて行ふと云ふことにしたならば世の中はどうなる。昔松平樂翁とか水野越前などが隨分消極政治、節儉政治をしたものである。能の裝束は金箔を使ふことはならぬ、頭髮に手柄縮緬を使ふことは出來ぬ、煙草入に金銀を使ふことはならぬ、と云ふやうな事を頻りに言つたものであるが、其實長くは行はれないで仕舞つた。また煙草が流行ると云ふので、煙草禁止の法令が出た事がある、其時或る人が日本橋を通つたら、橋の下に乞食が煙草を吸つて居るのを見た、乞食は人類悲慘の極であるけれども、尙ほ煙草を止めることが出來ぬとするならば此煙草は飲食の如き慾てある、人類必然の慾である、人類に必然の慾に背いた法

分は決して行はれる氣遣がないと云ふので煙草を吸ふ道具を買つて置いたが、果して後に至つて法令が緩んで煙草を再び用ゐるやうになつたので大に儲かつたと云ふ話である。要するに時世に背いて居る事の行はれ難きは之で分る。吾々は飽くまで時世の謳歌者であるが故に、此聖代に生れたる事を樂み、人類自然の慾望に從ひ我國民をして悠々としてコセツカヌ人民たらしめねばならぬと思つて居るのである。

(四)

然らば即ち今日は如何なる時代であるかと云ふに、余は英雄時代であると云ふ事を世人が承知せんことを願ふのである。プルタークの英雄傳、史記、漢書と云ふやうなものは誠に英雄の記事に富んで居るが、實は今日はそれ以上の時代であつて、四五十年の後の人をして今日の時代を見せしめたならば、我は不幸にして明治に生れなかつたが、若し我をして明治に生れしめたならばと思はしむべき大有爲の時代である。吾々は斯かる時代に生れたのを幸とするものである。然れども我國民は日淸戰爭、日露戰爭と云ふやうな、酒に譬へて見れば非常に強い酒を飲みつけて仕舞つたのである、故に其後葡萄酒と云ふやうな柔い酒を飲んで醉はぬのであるが實は今日ほど豪い時代はないのである。曾て吾々の日本は地理的の存在に過ぎぬ時代があつた、或人がグラッドストンに會つて話をした時にお前の國は何處だと云ふから、日本だと云つた。日本は何處かと云ふから支那の隣りであると云つた。支那の隣りと云つても見へぬから、地圖に點を打つて呉れと笑はれた位の時代があつたのである。然るに今はどうである。大日本は實に絶東の大國民である。明治十七年、日本が朝鮮事件で支那と爭ひ、佛國がアンナム事件で支那と爭つて居つた事がある。此時佛蘭西から日本へ同盟を申込んで來た事があつたが、日本は駭然として驚いた。果して佛蘭西は眞意を以て斯の如き事を申込んだるや否やに驚いた。併し羽翼未だ成らず飛ぶ時にあらず、未だ同盟の時にあらずと言つて拒絶したのである。今日はどうであるか。日英同盟は出來、日佛協約、日露協約が出來、凡そ世界の外交上より日英同盟、日佛協商

と云ふ者を除いては考が立たぬのである。世界の外交は是等のものから成立つて居るのであつて、英露の協商も是が爲に出來、亞弗利加問題に就て佛蘭西が獨逸に立派に對抗すると云ふことも是が爲に出來るゝと云ふことであつて、即ち世界の平和のトラストが成立つて居る。而して其トラストの仲間で日本は最も有力なる發言者の一人である。是等の事を考へて見れば、實に隔世の思がある。

又吾々は朝鮮に於て保護國を有つて居る。滿洲に於てチャータードコンパニーを有つて居る、各國殖民の歴史の中でチャータードコンパニーと云ふものは最も古い制度である、保護國は最も新らしい制度である、各國が永い年月の間かゝつて拵へた最新最舊の制度を日本は十年間に併せて之を得たのである。又我兵隊は小兒の兵だと言て笑はれた時代があつた、其兵隊は今日如何である、列國目を欹てる即ち常勝軍になつた。又明治元年の輸出入は合はせて二千六百萬圓であつた、然るに明治四十年となれば九億二千萬圓となつて、殆んど四十年間に四十倍となつて居ると云ふ譯である。人口は三千萬人であつたのが、殆んど五千萬人に近く、面積は十五萬方里であつたのが四十五萬方里となつた。斯くの如く列國が百年も掛つて拵へた大業は、我國に於ては十年二十年にして成つた、是ぞ實に英雄時代と云はねばならぬ。英雄時代に於ては大言壯語が直ぐ行はれるのである。吾々が支那は儒教の本國であるから、之を征伐して儒教國を平げれば、我國に於ける保守黨を退治することが出來ると思つて支那征伐論を稱へたが、期月ならずして支那征伐論は行はれて日清戰爭となつた。吾々は直ぐ又支那より償金を取つて金貨本位としなければならぬと大言をしたが、それも事實となつて金貨本位となつた。吾々は日露戰爭は好まぬ方であつたが、是も又少數なる人々によりて起された。吾々は東印度會社の如く南滿鐵道もチャタアドコムパニーにやらせよと云つたが皆な世に行はれたのである。其他我將軍が凱歌を歌つて戰へば勝つと云ふ勢ひである。是れ何故であるか。時代が英雄時代である

からである。

英雄時代には英雄はない。何となれば國民皆な英雄であるからである。今の時代は斯くの如き時代である。此の如き時代に生れたる青年は空しく死すべからずである。物質は石や砂に於ては死し、草木に於ては萎み、人に於ては醒むと云ふことがある。吾々は幸ひに石にあらず、木にあらず、人に生まれて來たのである。而して英雄時代に生れたのである、空しく草亡木卒すべからず、余は世上の青年が英雄的に考へ、而して英雄的に生活して貰いたいのである。

實に今日は斯の如き英雄時代であるが、併し英雄時代にも暗黒はないてはない。如何なる時代にも暗黒はある。今日の英雄時代は戀と黄金と云ふ事が暗黒である。併ながら余は或る程度まで黄金を望むと云ふことは毫も非難はせぬ。其方法が良ければ之を求むると云ふ事はよい事である。然ども黄金の効能も略々限りがある。亞米利加などては最も黄金が尊ばれて居るが、亞米利加に於て黄金は如何なる効能を爲して居るか。皆な黄金の力は萬能てあり、何者をも支配すると云つて居るが、黄金の力に依ては大きな家も出來、立派な生活が出來、又立派な細君も得られるが、其結果はどうであるか、ピストル自殺位が終りてある。故に亞米利加ては近來ブラッセーと云ふ言葉が流行つて居る。ブラッセーは佛蘭西語て、英語の病氣と云ふ言葉てある。それは即歡樂極つて哀情多しと云ふやうな病氣をブラッセーと云ふのである。何故にかく云ふかと云ふと黄金を積んが爲に心血を注いて白髮となつた、而して白髮まて力めて取つた黄金も餘り力のあるものてないと云ふことを發見した時は歡樂極つて哀情多しとなるのである。

余も決して黄金は望まぬてはない、若し能ふべくんば黄金を欲しいと思ふ。人を動かすの勢力あるは戀と功名と、黄金てある。余も若し能ふべくんば三者共に欲しいと思つて居るが、此三つの物は極めて嫉妬深い神てあつて、二君に仕へることは許さぬのてある全力を注ぎて其一に仕へなければ其事は許されぬのてあ

る。故に余は唯だ功名のみを求めて居るのである。併し余も黄金の與へる快樂は知らぬことはないが、甚だ詰らぬものであると云ふ事を知つて居る。それのみならず黄金と云ふものが却て害を爲すと云ふ事を知つて居る。斯く言へば余が黄金がない黨派に屬するが爲に貧乏仲間を擁へると言ふ人があるかも知れぬが、若しさう云ふ事を言はれる人があれば、其人の前に有力なる證據がある、羅馬のアブダラマン帝の言に『黄金の與ふる快樂を試むること四十年である、此四十年の内に最も幸福と思つたのは十四日である』と云ふ事がある。四十年間に十四日とすれば一年に六時間しかないのである、然らば黄金も亦甚だ羨むべきものでないと云ふ事は分ると思ふ。若し之を古い話だと云ふならば、現代に事實がある、即ち黄金を吾吾の友人が積んで居るが、其人の存する間は幸福であるが其人死したる後は子孫は却つて黄金がある爲めに腐敗するものが多い。是が黄金の與へる賜と云ふに至つては黄金甚だ尊むべきものでないと思ふ。

又戀であるが、戀も亦宜しい。昔の人は戀を知らぬ者は玉の杯底なしと言ふが、余は戀を知る者もまた玉の杯底なしと云たいと思ふ。戀は必ず人間遭遇する問題である。併ながら余は青年が之と出會はしたならば潔く戰つて克たんことを望む。予は青年に戀をするなとは云はぬ。余は青年が僞善者であれとは言はぬ。余はシーザルの如く、『少年の杯より泡も澱みも共に飲乾したり』と言ふ人があつても宜しいと思ふ、唯速に此境を脱却しなければならぬと思ふ。予は今日の青年に對して無限の同情を有つて居る、今日は戀と、黄金とは、非常な光を以て彼等を眩惑して居る。而して彼等は之を捕ふることは出來ぬ。恰も餓鬼の面前に食物を置いて食べてはならぬと云ふが如き狀態である。

然らば則ち如何にして戀に鬪つてよいか。ピットの如く我は既に國に嫁せりと云つて戀を脱却するも亦一法である、カブールが全力を政治に注いで戀をしなかつたと云ふも一つの方法である。セシルローズの如く南亞弗利加に新帝國を建てると云ふ大勇猛心の爲に戀

しなかつたのも一策である。ヌコベルフの如く戰場に出て、戀の苦しみを忘るゝも又一策である、更に黄金と戀に捕はれざるの途は、即ち功名の一面に走るにありだ。功名は實に男子の事業である、コルトンは「吾が友は消え、我黄金は消え、我親戚は消え、我愛する者は消へん、然れども墓の彼方まで我に伴ふ者は我功名である」と言つて居る、余は今の青年が此言葉の如く功名を以て志とせられんことを希ふのである。

人生朝露の如し、實に其短かきに苦しむ。青年は尙ほ未だ、歲月の速かなる事を感ぜぬであらう、併し感じた時は最早遲いのである、余は既に四十歲月のスピ丿ドを感じて居るのである、「百金美人を買ひ、千金良馬を買ひ、萬金青春を買ふべからず、」萬金を以ても青春は買ひ得ないのである。どうか願はくば今の青年が青春の時に於て功名を志して貰ひたいのである。余は玆に今の青年に呈するにジスレーリの言葉を以てしたい。ジスレーリ曰く「予は少年は總て天才であるとは言はぬ、然ども少年の天才なるものに至つては殆んどデバインである」と凡そ少年にして眼前の利害を顧みず自分の希望の如く、自分の志に從つて勇猛心を發揮して進んだならば天才ならざる者は殆んど稀れであると思ふ。今や內に於ては立憲政體を完成すると云ふ大事業は尙ほ青年の力を待つて居る、南亞米利加、中央亞米利加は日本人の爲めに功名の地を開いて待つて居るのである、支那に於ても、波斯に於ても土耳古に於ても爲すべきの事業は山の如くに殘つて居るのである。（完）

優勝民族と其素質

鎌田榮吉

今を去ること百有餘年前佛人ドトクヴイユが著名なる其北米民治論に、亞米利加合乘國に共住する、三人種消長の理由を論じて、白色、黑色、赤色の三種即ち歐羅巴から行つた白人、其れに從つて行つた亞弗利加黑奴、並に亞米利加生えぬきの銅色土人、此三人種が亞米利加發見以來共住して、生存競爭の結果は、無論

白人種の優勢を占むる事となつた、尤も黒奴は益々繁殖して人口上には大なる部分を占めて居るが、矢張從屬人種たるを免れない、又此赤人種は益々減少して、段々に山の中へ山の中へと退去しつゝ殆んど、消滅しつゝある、何故にかゝる趨勢を來したるやと云ふに、先づ黒赤二蠻族の特殊點を見ると、赤色の亞米利加土人は天性倨傲にして人に下ることを好まず、戰ふこととを知つて耕すことを知らず、又狩することを知つて織することを知らず、武勇一偏の……蠻族、戰爭、狩獵のみを重じて農工の業を以て武士の顧みざる賤業と考へ、自ら尊んで白人に下らないのみか、彼等を劣等の人種と見做し、度々合衆國に仇をなす、其度每に敗北を重ねて山奥へ山奥へと逐込められた、一方の黒人種は、全然反對の氣風を有する蠻民で能く働らき能く從ふもの、凡そ農工業の如き文明の事は、能く久しきに堪えて規則正しくやる外はない、所がそれは一切土人には出來ぬが黒奴には能く出來る、勞働を厭はない、而して主人たる白人種に對しては、只命是れ從つて、少しも之に抵抗しない、一方からと言ふと威張ることとは少しも知らぬ奴、意氣地のない奴、只牛馬の如く使役されて、それに甘じて居る、土人とはまるで反對の性質を有つて居る、一方は威張ることを好み農工業を顧みない人種、他の一方は從順で働く事は働くが、自分の權利を主張することはまるで知らない。此二つの蠻族は、其性質は全く正反對であるが、文明の進步に適しないと云ふ一點に於ては同一である、然るに獨り白人種は能く戰ふことも知り、又能く耕すことも知る、即ち實業と武勇の二つを兼ね、又自己の權利を主張すると同時に他人の命令にも服從すると云ふ人種であるが爲めに、即ち此亞米利加の土地に於て、白黒赤の三人種共住の中に優勢を占め今後益々盛になつて行くは、全く之が爲めであると書いた。

これは至極面白い說である、尤も此外、今の亞米利加には此上にモンゴリヤ人種も段々混つて來て居るが、最早ドトクヴィユが此說を書てから百年にもなるが、其百年後の亞米利加は人口に於て幾何の增加をし

たか、又實業に於て政治に於て學問に於てどの位進歩したか、實に十九世紀間に於ける米國の進歩は偉大なるものであつた、此の元をなしたのは白人種、此白人中でも重なるものはアングロサクソン人種て、他の國々から移住したものも、皆アングロサクソンに同化され、此氣風の下に統一されて、米國の文明を進めると云ふ事に成りて居る、乃ちドトクヴイユの所論に依て、米國に共住せる三人種の運命は相違を生じた事は明白てあるが、併し是は三人種競爭と云ふよりも、黑赤二人種の白人種の如く同化するを得ざる理由を論じたものと云つた方が宜しい。

全體初めより白人と他二人種の懸隔は甚しいので、迚も互角の相撲にはならぬから、競爭と云ふ程でもないが、玆に私の自ら目擊したる地方て、數人種の混交したる最も面白い人種競爭の活劇を演じつゝある所は、土耳古國てある、此國には種々雜多なる人種が集まつて居て、コンスタチノーブル市に萬國橋と云ふ橋がある、此橋の上には世界中の人種が歩るくと云ふ位、それは兎に角此國を組織する重もなるものは土耳古人、アルメニヤ人、希臘人の三人種と見なければならぬ。勿論主權者は土耳古人てあるが、アルメニヤ人もコンスタンチノーブル陷落の時に小亞細亞から土耳古人と共に這入り込んだもの、又希臘人は所謂希臘帝國の住人として素より此邊に住んで居つた所を、土耳古人に征服せられたものである。

先づ此土耳古人なるものは武勇一偏て亞細亞、歐羅巴、阿弗利加に亘る大帝國を打立てゝ亡國の人民を虐待しつゝ今日に至つたが、歐洲日新の文明は、此暴威の永續を許す筈はない、さしもの武國も次第〳〵と衰微に赴いたが、元來此人種は勇武にして威嚴あり、眞率にして純潔の氣風に富める上に、忠君敬神の念厚く、戰爭臨んで死を惜しまない、卑怯未練の心を絕たんが爲めに妻妾を縊殺したる上、神明に誓つて出陣すると云ふ程てあるが、しかし學問商工行政財政等の點に於ては最も拙劣を極めて、とても進歩の望みはない、之れに反してアルメニヤ人は商賣の方には頗る機敏て、

その上學問もある、土耳古政府の收斂したる米穀の如きはアルメニヤ商人の手に懸りて勝手次第な儲け方をされて居る、併し此のアルメニヤ人は只金だけが目的で、何等の高尚な思想を持て居らぬ。學問教育も隨分共に遣ることは遣るが、是も金儲けの爲め生計の爲めにしようと云ふばかりで、それ以上學問の爲めに學問し研究すると云ふ考などは毛頭ない、又之を以て人を利し世を益しやうと云ふ念慮もない、そこで金は持て居るが、依然土耳古人の下風に立て頭を上げ得ないのみか、折々彼の慘酷な虐待を受けると云ふ有樣、それでも只内々不平を鳴らし怨言を放つのみで、斷然たる決心を持つて自由を得よう獨立しやうと云ふ樣な謀もない、然るに此の兩人種に拔んで、將來有望なものは希臘人の一族である、彼等は數百年間、土耳古人壓制の下に呻吟したが爲めに、古代希臘の美風を失ひ、近代歐洲の文明を吸收することも出來なかつた、現に兒童青年の輩は土耳古兵の卑猥なる暴行を恐れて白晝道路を步行せず、夜間竊かに假裝して耶蘇教堂に近き地下の學校に至り、僧侶に就て僅に初步の教科を受くる有樣であつたと云ふ位だから、決してコンスタンチノープルの希臘人を以て大した進んだ者とは見做せない、只彼等の獨立建國の首府たる雅典府に至ると、其盛況驚く計り、又今後大に發展の望みは明かに見える、學校病院博物館等を建立し又古代舊造物を修理し、夫から地方に至ると道路の開築、港灣の築造、又小なりと雖も海陸軍の設置等、彼等が土耳古の羈絆を脫し、故國を再興してより僅かに半世紀餘にして、最早舊主人たる土耳古を後へに瞠着たらしめたのは、全く此人種には愛國心が強くして氣慨ある上に、智力も優れ商工の思想にも富んで居る爲めに外ならぬ、商業の才能と膽力ある證據にはコンスタンチノープル、スミルナ、ダアクス等の港は勿論、埃及のアレキサンドリヤ、カイロー等に於ても、商店は大小共に希臘人のものである、此の如く土領の各地に散亂せる希臘人は、祖國の教育慈善の爲めに金圓を寄附することは夥しいもので、夫れも匿名で多額の金を寄附するものもなか〳〵多い、

と云ふ話、千八百三十六年の夙き既に義務教育を全國に布きて、歐洲文明國に率先し、殊に最も面白い事は各地何れの村落の小學校でも古代希臘史を讀ませて懷舊の念を起さしめんことを勉め、其れ以上中學大學の敎育も行屆て、辻馬車の御者にも大學卒業證書を持つ者があるに至つては、少し社會の程度に比して進み過ぎた嫌がある、兎に角此國人こそ三人種中の尤物で他二人種の長所、即ち土耳古人の士魂とアルメニヤ人の商才とを一身に結び付けた者らしい、そこで、將來土耳古人をボスポラスのあなたに追ひ出して再びコンスタンチノープルの主人公となるものは此希臘人であるべき筈だが、如何せん、彼の强大なる露國南下の趨勢は、到底此歴史的興味ある出來事を許すまい、許さぬ所か、希臘自身迄が此露國の大風呂敷の內に包まれてしまうであらうと恐懼の念をさへ抱いて居つたが露國今度の大敗では又大に形勢が變るであらう、若しも希臘が、此大志を達する事もあらば、夫こそ士魂商才兼備の結果と云ふ事は明白である。

これは即ち人種と人種との間、國民と國民との間の論であるが、階級と階級との間も同樣かと思はれる、近くは日本に就て考へて見ると、まづ維新前の日本では即ち士農工商、其の內の士と云ふものはなか〳〵立派なもので、先づ其本職は戰ふことである、樂しみと云ふても狩をすると云ふやうなことで、名譽を重ずる權利を重んずる、決して人に下らぬと云ふ所の特長を持つた階級である、一方の百姓町人と云ふものになると働くこと、儲けることは、得意であるけれども、獨立を重んじ權利を主張し、自己及び自己の階級、自己の國を重んぜしめやう、と云ふ氣風には甚だ乏しかつた、丁度米國の三人種又は土耳古に共住する三國民の特異性を此日本從來の士族平民の階級に配合して見ることが出來る、尤も文野の懸隔は別論として、只其流義を分類すると丁度さういふ筋になるかと思はれる、併ながら是は只概括した所の話で、士族の中にも町人流の人あり、町人百姓の內にも士族流の人もあるが、類別すると階級と階級で類別すると、此の如き相違は明か

にあつたに違ひない、そこで維新後になつて、此の士農工商の區別を廢して四民平等、隨つて農商工業も必ずしも平民に限つたことではない、又戰爭も決して士族に限つたことではない、と云ふ事になつて封建時代の階級を一つ混ぜにしてしまつた、所で此競爭場裡にどう云ふ人種が大に首を揚げたかと云ふに、先づ士族にして商賣の考へを持つて居つた人、或は平民にして學問及政治の考を持つて居つた人、詰り士族の特長と平民の特長とを兼備して居つた人が、此の維新の新社會に於て成功し、世の中に立つて勢力を占めて居る、兎に角大數の人間を自分の手下にして政治をして見やうとか、外國人をして相手にして大きく商賣をして見やうとか、兎に角此の新日本の文明社會に身を投じて、それがやり切れると云ふ人はどんな人であるかと云ふと、士族にして平民流の考を兼ねて居り、平民にして士族流の思想を有つて居ると云ふやうな人が其れをやつて居る、さうして見ると矢張り白人種が亞米利加に於て黑人種赤人種を抑えてしまつて、優勢の地位を占め、又希臘人が土耳古人及アルメニヤ人を拔いて成功しつゝあるのと丁度同じやうな關係である、士族でも只劍術が上手で御馬前討死より外何も知らぬと云ふ老翁は、不遇を嘆じて朽ち果てゝしまい、又平民の方でも唯鍬や、算盤を取る外は何にも知らぬ、昔流の農業、昔流の商賣を其まゝにやつて、泣く子と地頭には叶はぬの諺を守つて唯だ役人には御辭儀をする、自己の權利を伸ばす事を知らず、又世の變遷に伴れて家業の改進を計り、家產の處理法を改むることを知らぬものは、段々滅ぶる方の人種に屬して居る、成程其仕事に大小の區別はあるが、兎に角新しい社會に向つて進み、新らしい境遇に順合することの出來ると云ふ人は、今の此士族流の思想と平民流の手腕とを幾らか兼備して居つた人で、大に兼備して居つた人は大に進み、少しく兼備して居つた人は少しく進むと云ふやうに、全く此二つを兼ねて居つたことが功の要件になつたやうに思ふ。

そこで此階級なり、國民なり、人種なり、之を組織

して居る者は個人であるから、其個人と個人との間の事も、矢張り同一でなければならぬ、唯肩を怒らせて威張つたり、大言吐語して居ると云ふだけでは、どうしても此複雜なる社會に成功雄飛することは出來ぬ、さればと云つて專門の事なり商賣なりをコツ〳〵やる丈けて、それ以上の考がなくては、矢張頭を揚げる事が出來ぬ、そこて諸君の中にも色々の方がありますけれども、隨分高尙な學問をする人と思はれる、高尙な學問をし、高尙な思想を抱くと云ふことは、これは非常に大切な事、併し若し高尙なる思想を養つて、志を遠大にしたと云ふ丈けて、一方に於て實業を尊び、職務に忠實にして、如何なる卑職でも己の職務となつた以上は、充分それに盡すと云ふ心がなかつたならば、折角の學問も無益の冗物であるのみか、却つて身を害ふ種となる、苟も職業を持つた以上は、專心一意それに從事すると云ふことは頗る大切な事であるが、併しながら夫れより他に少しも國家とか世界とか同胞とかの思想もなく、政治思想もなければ、博愛の思想もなく、大きな事廣い事深い事の考が無と云ふやうな人は只一個の職人に過ぎない、決して貴ぶに足りない、是が即ち福澤先生の魂は元祿武士の如く、手足は素町人小役人の如くなるべしと言はれたる如く、文明の紳士には所謂士魂商才こそ大切である、此一義は今の世界に於て個人としても國家としても踐まなければならぬ道である。

勤儉貯蓄の說

文學博士 建部遯吾

日露戰役戰勝の勢に驅られて盲目的に勃發したる投機熱の反動として、財界一時不景氣の悲境に沈淪したる以來、勤儉貯蓄てふ四文字は一の警語として朝野の間に響き渡れり。殊に現內相平田男の如き熱心なる之が提唱者たるものに似たり。然るに近時又之に對して異議を挾むものなきにあらず。其說に曰く、我邦今や

文物興隆の時運に際會し、萬般の施設經營皆總て積極的ならざるべからず。何事ぞ、一時の反動に畏れて勤儉貯蓄などいふ消極的方針を掲げ來るとは。入るを量りて出づるを制するとは古人の言なれども、今日の我等は出づるを算して入るを造らざるを得ず、多く集めて多く散ず。多く散じて益々多く集め。益々多く集めて愈々益々多く散ず。消極的なる勤儉貯蓄の如きは現下の我國運を沮礙する愚昧なる方策也と。

我輩之に對して些か説あり、乞ふ之を述べん。

勤儉貯蓄が果して國運の發展に相應しきや否やの問題に關しては、我輩は矢張り現今の狀勢に於ては、大體に於て相應しきものなりと認む。然れども勤儉貯蓄の四文字、之を一息に讀下して、單一なる觀念の下に拉し去らんとするは世人の動もすれば陷る誤謬にして識者の取らざる所也。抑々貯蓄といふは國運の發展に至る間の一階段にして、いはゞ目指す大道に通ずる小徑の如く、道行の順序上止むを得ず之を通らざるべからざるのみ。貯蓄夫自身に於ては全く無意味なるもの、若し之を目的と思惟する者あらんか、そは由々しき誤謬也。譬へば猶外科に於ける切開の如し。治療は目的なれども其手段としては切開をなさゞるべからず。切開は身體を毀傷するもの、治療とは却て反對の形式を取るものなるが、外に之に勝る手段なき故止むを得ず此階級を通過して治療てふ目的に達する也。一國、一家、若くは一個人が其經濟的活動をなすに當りて貯蓄なる一階級を經過せざるべからざる全く之を同じ。貯蓄は手段として有効なれども、夫自身に於ては寧ろ經濟的方針に反する現象也。即ち貯蓄が反經濟的なる一個の手段なること、切開が反治療的なる一個の手段たるが如し。孰れも實に止むを得ざるに出でたるものなるを忘るべからず。

勤儉が國運の發展に資することの大なる、言を俟たざる也。經濟上は固より、其他總ての點より見て國運の發展は多く勤儉の二字より來る。然れども世人復た勤と儉とを二つの獨立したる經濟的道徳と考ふるは誤謬也。勤は夫自身に價値あれども儉は勤と合して價

値あるのみにして夫自身には價値なし。若し勤に伴はざる儉ならば、諺に所謂坐して食へば山も空しにて、今日假令百萬の富を擁するとも早晩乞食の境涯に墮つるの已むべからざるもの。然れども勤は積極的なる獨立の價値を有し、總ての生產總ての事業、皆此勤の一字より胚胎せざるなし。

斯く論じ來れば此事端なくも今日の經濟學の根本問題と接觸す。今日の經濟學の根本問題とは何ぞや。資本と勞力の生產に於ける參與如何の問題是れ也。何派の經濟學に於ても此二つを以て生產の二大要素と認めざるものなしと雖も、此二つの何れに重きを置くかは學派によつて多少の差異なきにあらず。然れども資本は本と、勞力の積集にして勞力なければ資本あるべからず。勞力は本源にして資本は其產みの子なれども、資本又更らに翻て勞力の効果をして益々顯著擴大ならしむ。勞力は勤の發現にして資本は儉の搖籠の裏に長ず。經濟上の勞力と資本との關係は是に於て又道德上の勤と儉との提携を豫想せしめずんばあらず。然らば儉が經濟的方面以外、道德的、倫理的、心理的關係に於ても又勤を助くる効力如何。古より省事養心といふ教あり。吾輩は學徒を率ゐて共に道を究め學を修むるの際、嚴に戒むるに、學生の物好きなるなからんことを以てす。學生にして物好きなれば其修養を害し心術を妨ぐ。例へば小遣錢に不自由なき學生が或は繪葉書を集め、ヴエナスの塑像を飾り、水彩畫の額面を掛けて室內の裝飾等に心を用ふるに至れば、已に夫れ丈け彼をして學業を荒さましむることゝなる。即ち心を約かにして儉の德を守るは、一面に於て學業の消極的助力ともなる。一家を經營し一國を經營するも其理は同じ。所謂成上者が相當の勢望を得れば忽ちに書畵骨董の蒐集に腐心するが如きは此れ已に家運興隆の勢の止りたる時也。一國に於ても國力が充分に發展せる上に於て少し許りの文學美術の興隆あるは敢て悲むべきにあらざるも、國力未だ十分の發展をなさゞる中に早くも文學美術の興隆を見るは、國民の氣魄小規模にして遠大の抱負なき確證なりといはざるべからず。故に儉

の一字も只外面的に止めずして內面的に心を約かにするに用ふるは一個人にとりても一家にとりても一國にとりても極めて大切なる事也。

然れども修養は、いふまでもなく修養夫自身の爲めにあらずして、大事をなさんが爲めの準備なれば、何處までも補助的也、獨立的にあらず。吾輩は常に勤を通じて儉の德の徒爾に了らざるを期せんとする者也。

然るに世の中には單に貯蓄のみを以て能事畢れりと思惟する者あり、是れ非常なる誤謬也。先般大阪の砲兵工廠に於ける一職工が二十餘年間貯蓄したる二千五百圓を國家に獻納したる事あり。是れ疑もなく美談也。是れ靈鷹が高千穗艦の檣上に止りたるなどいふ事とは反對に眞正の意味に於ける國家の祥瑞也。然し此職工某氏は此二千五百金を獻納するについて一條件を呈出したり。四百年間貯金として利子を產ましめ而して後國家に有要なる費途に使用せんことを以てしたり。其計算によれば若干の利率に於いて四百年間の元利を合算すれば實に百億圓の巨額に上るといふ。（吾輩の計算によれば一ヶ年五朱として一圓の元金にて四百年の末には元利總計二億九千餘萬圓なり）而して世人は嘖々職工某氏の忠と共に其智を賞して措かず。然れども職工某氏にせよ、之を謳歌する人にせよ、若し此職工が百億圓の獻金をなしたりと思はゞ是れ非常なる間違也。職工某氏は僅に二千五百圓を獻納したり。殘りの九十九億九千九百九十九萬七千五百圓は又同じく此職工の如き立派なる人民が四百年間に於ける勤勞の賜物なるを忘るべからず。單に貯へたる金は勤勞の之に加はるなからむか依然として貯へたる時の儘なるべし。之が利子を生ずるは、之を運轉して生產事業をなす勤勞の結果に俟たざるべからず。此事明白の理義にして而かも彼の所謂貯蓄主義者の動もすれば看過する所のもの經濟上由々しき間違といはざるべからず。今銀行に預金をなせば一定の利子を得、又郵便貯金をなすも一定の利子を得べし。是れ貯金が資本として使用せらるゝの結果なること前述の如し。今日利率の高低あるは經濟界に於ける資本需要の緩急によるものにして

若し貯蓄を要せずして、右より左に直ちに資本を運轉するの方法あらば夫れほど結構なる事なし。只左樣に結構なる方法なき故、止むを得ず零碎なる金錢を貯蓄して運轉し得べき大資金となるを俟つのみ。其止むを得ざるに出づるは、猶外科の切開の如し。

貯蓄主義と同一の誤解よりして、或は動產、不動產の形に於ける資產を持し、一定の利益を得て、己れは何等の勤勞をなさずして生活する者あるが、斯の如きは社會制度の上よりしても批評攻究すべき餘地あるのみならず、先づ以て天に對して相濟まざることゝいはざるべからず。

巳に勤勞を以て國運の發展に最も須要なるものとし、而して大仕掛の生產業には大資本を須要とする今日の狀勢に於て、我邦の現在如何と顧るに、獨り大資本に乏しきのみならず、又有効なる勤勞に於ても頗る乏しきを嘆せずんばあらず。勤勞の數(ナムバー)に於て乏しく又功程(エッフィセンシー)に於て乏し。吾々學者社會に就て見るも、或は遊樂に時間を費やし、又研究の名の下に下らぬ事に時間を費やす。我社會の有する勤勞の總高(トータル、アマウンド)は歐米の夫れに比して頗る乏し。此點は悲觀せざらんと欲するも得ず。此弊を矯正するには勤儉の必要を感ぜしめ、而して其道行には貯蓄も亦止むべからざることを知らしめざるべからず。只何處までも勤を第一に押立て、國運の發展に資する第一の要素は勤にして儉は之れが消極的助力者たり、而して貯蓄更らに此勤儉の補助的一手段たることを、深く〳〵國民に知らしめざるべからず。此意味の勤儉貯蓄論ならば、吾輩雙手を擧げて贊成す。勤儉も貯蓄も五分々々の勤儉貯蓄論ならば眞平御免を蒙りたし。

此勤儉貯蓄論に關聯して吾輩は現今の學生に對して一の「煩悶救治策」を說き得るを悅ぶ。今の所謂「學生の煩悶病」なるもの、其七分通りは此「勤儉」によりて救治し得べし。而して其殘りの三分通りは社會と個人との關係を指示する純正社會學の研修によりて體得し得べし。一面に於て自己の能力(アビリチー)を極度まで發現するに勤め、一面に於て自己生存の意義と社會との關係を

知悉すれば煩悶は決してあり得べからず。若し其上ありとすればそは全く精神上の病的現象也。人生の意義が分らぬならば分ぬなりに活動せよ。借問す煩悶とは如何なる活動なるか。人生の意義に對する煩悶は頭腦の片隅に於ける活動也。其れを以て全身の全活動を杜絶するが如きは實に狂にあらざれば大愚也。今若し左手のみを動かせば右手は倦くなりて枯死し、右足のみを動かせば左足亦同一の運命に陥る。今日の煩悶者は頭腦の一部のみを活動せしめて自ら片輪になるの工夫に專念す。一部の活動のみをせずして全身を活動せしめよ、煩悶何時の間にか消え去らん。是れ實に唯一絶好の煩悶救治策也。

謹んで十月十三日の　聖詔を拜し奉るに、畏れ多くも吾輩は不肖ながら些か得意の情なきにあらず、吾輩曾て自個の小論文小著作を輯め之を「自彊錄」と題するシーリースとして、隨時刊行せり。「自彊」の二字は易經乾の卦象に、天行健、君子以自彊不息に取りしものなるが、此古き文字を新らしき明治思想界に呼び起して、之に活動的支配的思想たるの意味を與へたる、吾輩の寡聞なる、吾輩以前未だ其人あるを知らず。爾來其實行に於て常に古人に恥づる所あるも、今回の　聖詔に於て此自彊不息の四字が我國是に關する一個重要なる位置を占むることを拜讀せるは、不肖身に取りて極めて快心の事也。且つ此二字が　聖詔前大段の結語たるに見ても、　聖旨の存する所拜察するに餘りあり。而して此自彊の二字や、世人の誤解するが如き勤儉の意味にあらずして、吾輩の前述せるが如き眞正の勤儉を意味するものたるは尤も注意を要す。乃ち此勤儉貯蓄の説一篇、文辭蕪雜也と雖も蓋し最も穩當なる解釋にして、且つ畏れ多くも、　聖旨の存する所に協へるものなることを確信することを妨げざらん。(完)



現在に於ける海外一切の狀勢殊に我國と緊密の關係ある歐米諸國の消息を最近の新聞雜誌等によ、若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し敢て江湖の參考に供せんと欲す

滯歐所感

上田敏

○今回歐米を歷遊した目的は、景色を見たり二三の詩人に會つたりする爲めであつた。成るべく多くの風光に接しやうとして行程を急いだ爲め人情風俗の奧の奧まで探り知るといふ樣な事はとても出來なかつた。それにはせめて五年十年と心長く足を止めなくてはならぬ。それで伊太利亞獨逸等も旅行したが、最も永く滯在したのは倫敦と巴里である。

大陸の文明は決して所謂アングロ・サクソンの文明に劣つては居ない。一體日本では、單に文藝のみでなく、政治、經濟、外交、宗教その他のものを、多く英語を通じて知ることになつて居る。是等の知識は英語が媒介となつて居て英語の新聞雜誌等が實に智識の源泉をなして居る。所が何處でも同じ事、自分の國の缺點弱點等は兎角新聞雜誌に於て語らぬ傾のあるものだから、勢ひ我國は英若くは米に都合の宜いことのみを知つて、その惡いことを知らぬ樣になつて居る。成る程專門技藝の事であると佛語獨語等の書に據る事もあるがさて一般の事情となると重に英語に賴るが、之が抑も誤の本である。

英米を惡く言ふのではないがアングロ・サクソンの國にばかり日は照らぬ。ドウヴァ海峽を渡れば一般の樣子がガラリと違つて別に燦爛たる文化は榮えてゐる。私は英文學を專攻して居て、英國の詩文が必ずしも他國の文學に劣らぬことは確信して居るが、その爲に英米の文明のみが他國の文明に優るとは決して思つて居ない。かねて此意見を持つてゐたが此度の旅行によつて此信念を一層確實にした。例へば普通知識の點に於ては佛獨人の方が平均英米人よりは頗る進んで居る、英國が此一二世紀間續いて順境に居て、大陸諸國

よりも一歩進んで居たが、此頃は商工業に於て獨逸に追ひ付かれて、文明の或部分、即ち藝術一般では之まで佛國に、如何しても敵はぬものがある。

○特に文藝の如きに至つては、佛人獨人は、英人よりも多くの趣味と知識とを有して居る、佛人ならば、左程教育を受けぬ人でもラマルチイヌや、ミユツセエの詩の二三篇は諳んじて居り、モリエユルやラシイヌ等の劇ぐらゐは見物して居る。獨人ならば、ゲエテ・シルレルの作の一つ二つは學んでも居る。處が英人は左樣ではない、特別の趣味ある人の外は近代の詩や劇を知つて居るものはない。

元來英人は左る無趣味の民ではなかつた。エリザベス時代の人間はもつと快活で自己の感情を憚無く現はしたものであつたが、其後色々の事情からして現代の樣になつたのである。百年前のトラフアルガア海戰當時迄はまだ斯うでは無かつたが、十九世紀になつて、商工業の發達又は一種の宗教觀の爲に氣風が一變してしまつた。又それのみではなく、更に封建の遺風なるものが未だに殘存して居る。封建の遺風があるからとて必ずしも門閥上の區別を嚴守して居るといふてはないが、地位上の昇降が猶ほ嚴せられぬ。て詩歌の如きは偏に精神上に於ける貴族ともいふべき少數者の鑑賞するものとなつて、その他の一般人は與らぬといふ觀を呈して居る。近世の詩人は、大概斯かる社會の氣風に反抗して歌つてゐる。又劇の發達は國民一般の趣味が高上した時又一致した時にあるものだが今英國で沒趣味俗惡のもののみ多く行はれる。これは余りに英國を貶して大陸をのみ揚げる樣で、普通の人の見たよりも違ふ樣であるが、獨り文藝のみではなく、更に繪畫音樂等にも十分に適用される事と信ずる。

○またこれは歐洲全體に就いての事であるが、歐洲は始終新陳代謝する樣であるけれども、古來のトラヂシヨンは全然滅亡せず、文化には革命といふ事がなく進化がある。即ちレヴリウシヨンでなくエヴリウシヨンであるやうに想はれる、例へば、新樣の詩が行はれても、古詩は矢張味はれて全然無意味の事ともして居らぬ。文明の連續といふものがある所。日本とは全然違ふ。維新以後暫く精神上の事を疎かにしたので、その爲に今日では猶ほ宙宇に迷つて居るのである、斯かる場合であるから此際突飛な說を與へる事は多くの間違を生ずる事と思ふ、西洋の方は之に反して、トラヂシヨンを重んずるから、如何なる突飛な說が出ても、そ

の美點だけは採り用ひて然らざる點は捨てゝ顧みぬ、私は進歩といふ事を無論愛して居る、が漫に人騒がせに突飛な言動をなすべきではないと思つて居る、言動もよい、十分の確信が伴つてならば宜い、けれども左様ではなく、今日は斯う思ふが明日は左様でないも知れぬといふ様な突飛論は、十分謹んで然るべきだと思ふ。

今日本に歸つて見ると文學側の人とそれ以外の人とは考が今だに全然違う様である。此際文學側に立つ人の主張は十分沈着なものである、堅實なものであつて、一歩たりとも枉ぐるを得ぬといふ程の意氣込で欲しい、そしてそれ以外の人には、差當り政府の方面で、古今文藝の研究とか若くは海外文藝の研究とかいふものを取扱ふ一種の機關を起し、一般に文藝趣味を普及させるが宜いと思ふ。斯くすれば一面文藝側の人も昔からの趣味の連絡を心得て來、他面にはそれ以外の人も新しき智識を知る事となり、双方より歩み寄りて間に緩和が出來様と思ふ、今日の弊は文敎の事を司る人が文藝の事を蔑にすることとなつた點に存する。

私の洋行前に起つた議論であるが、彼の自然主義なるものの意味が、今歸國して見ると妙な具合に、一種陋劣なる事に取られて居るのは慨はしい。とにかく自然主義は藝術上立派な一主張として見らるべきものである。それが然らずしてかの淺猿しき意味に取られるのは世人が文藝の意義を能く解して居らぬからである、て前に述べた様に、何か勢力のある機關が出來、政府にも此文藝の價値を十分に認むることゝしたならば、歐洲の如くに何等の弊害のないこととなるのである。

○之を要するに歐米へ行つて直に感ずる事は人生そのものが今の日本に於けるよりも豐富であることである。擧國一致と日本ではいふけれど、同じ様なもののみの擧國一致は何にもならぬ、異つたものゝ一致で始めて價値が生ずるのである。日本の擧國一致は例へば單音の音樂である。幾つ集つても同じ音のほか出ない。異つた音が幾つか集つて一つの音調を生ずるのでなくては音樂にも趣味はない、即ち諸音でなくてはならぬ。複音の音樂、即ち異種異様の音が多く集まる處に自らの一致が保たれるのである。それ故文學、内政、外交、宗教、人各々その志すところ好むところに赴いても、それが一體に集りて一の文明をなすのである、日本も段々には左様なるべきである、それには個人の思想を

十分自由にし、個人の發達を十分に圖ることが必要てある、今日の如く少しく自我を立てるものがあると寄つてたかつて迫害を試みる樣なことでは、意味ある生活は到底營むことが出來ぬ。今日の教育が余り統一のみを重んじて個人の價値を認めないのは宜くない、統一は宜い、宜いがその統一たるや異種異樣なものゝ爲せる統一でなければならぬ。然るに今の日本の文明なるものは、同じ「ハ」ならば「ハ」の音のみを集めて之を統一と名けたり、然らざるも唯ハ音だけの差のある「ハ」を鳴らして統一と名けて居る。之では眞の諧音とはならぬ。

「ハ」「ニ」「ト」といふが如き音を同時に鳴らせば其處に面白い諧音が出來て我々に快感を與へるのだ。どうか我國の統一なるものも斯かる諧音にして行きたいものである。それに就いて勉むべき處は先づ個人の自由である、これを十分に主張せなければならぬ。決してそれが爲に國家の基礎が薄弱になるといふ憂はなく、それありて却つて社會一般が進み行くものである。

○豐富なる人生といふ事を言つたのに就いて思ひ付いたが、それは歐洲の學者の學問の仕方である。西洋の學者は學問上の常識に富んで居る、即ち自己の專門學科に多少の關係ある學問、或は人生に多少の交渉あるものに對して相應の知識を有して居る。日本の學者は之に反し、余りに早く專門家となつて了う、例へば西洋ならば刑法の專門家でも民法の大要を能く了得して居る、外觀甚だ分業的になつて居るけれどもその實專門家なるものは專門の外に又普通の知識をも有して居るのである、日本の如きは左樣でなく、專門以外の事は知らざるも不可なしと心得て居る、之ではその學問たるや眞の學問ではない、特に無形の學問になれば尙ほ左樣である。斯かる態度から到底大發見大發明などは出來ぬ。日本の學者の如き遣り方では、大發見大發明が出來た後の細かな研究は出來るけれども、最初の根本主義に着眼するといふとは難い。

それだから彼地では、直接に用に立たぬとも、即ち一時は實際生活に何等の交涉のない樣な學問でも。何時かは何かに功があらうといふ程の考から、その種の研究の機關に隨分莫大な金をも掛けて行くのである。即ち一圖に眞理を求めるといふ事に留意して居るのである、之てこそ始めて面白き應用も出來て大發見大發明も起るのてある。それだから大學といつても教員官吏の養成所となつては居らぬ、大學出身者は教員官吏

も多いけれど、それを目的に建てたものでないから、それに適する樣にと組織を更へぬ。一見迂なる如く、實は智なりと謂つべきてある。（談話筆記）

海外消息

如楓

●バルカン半島の風雲

歐洲渦亂の中心として東亞に於ける清國と共に世界外交界の最難物と稱せらるゝバルカン半島の風雲は去る十月に入り勃牙利の獨立宣言と墺國の野心とに依りて再び大亂調を來したり。勃牙利の獨立は三十年來勃牙利人が夢寐だも忘れやらざる無念の宿題にして今日之を宣するも其由來する遠く伯林條約以前に遡らざるべからず。其裏には土耳古政府が勃牙利を保護國とせん苦心慘澹たる歷史ありて其事件の進行は極めて面白きとなるも今は之を略して其大要を云はんに、一八八一年土國は別格地方局なる者を設け其管下に勃牙利を編入せんとして失敗し一八八六年には兩國對等の資格を以て攻守同盟條約を組織せる事あり其後一八九九年の第一平和會議に於ては勃國の全權委員は議場に於て獨立の表決權を有し昨年の第二平和會議に於ては國名のＡＢＣ順に依て土耳古全權大使の上座に坐するを得たりしが土耳古は之に抗議を申込みしも聞かれず續いて列國常設仲裁々判所へ正副判官各一名を派遣する事を認承せられたり而して今日まで列國に列國大公使と同等官の地位を有する外交事務官なる者を駐劄せしめ事實上獨立公國たるに相違なきも猶土耳古の羈絆を脫せざるが如き傾きあるより勃國人民は機あらば名實ともに獨立公國たる事を的確に認承せしめんと待構ひつゝありしに遂に機會は意外の處に於て見出されたり

▲九月十二日土耳古皇帝の天長節をトし君府に於て一大夜會を其外相官邸に催せるが、此時獨り勃牙利の君府駐劄外交事務官ゲショフ氏を招待せず、ゲショフ氏は之を其本國政府に訴え本國政府は直に土國政府に交涉じて其理由を問ひしに土國政府は勃牙利は獨立國にあらざるが故に之を招待せずと答へたり。茲に於てか勃牙利人は大に激昂し既に列國が勃國を獨立國と見做し其外交事務官を大公使同等に待遇し居る今日土國獨り猶其屬國たるが如く取扱ふは奇怪なりとて君府駐劄のゲショフ氏をして即座に土國を引拂はしめたり

▲是より先き勃牙利を通過してコンスタンチンノープルに到る東方鐵道に一大ストライキあり交通遮斷せられて不便一方ならず勃國は一朝異變ある時に對する準備として自國領內及東ルーメニアを通過する約三百キロメートルを占領し軍隊をして之を運轉せしめたり。鐵道會社は之を見て勃國に迫り其線路の返附を請ひしも勃國應ぜず反て其買收を提出せしかば土耳古政府は更に其返附の通諜を發せしに勃國は之れ鐵道會社との關係なれば土耳古政府の干涉を許さざる事なりとて斷然之を拒絕せり

▲獨立の宣言　斯如く土勃間の關係は益々危殆に瀕するに當り十月一日

勃國公フェールヂナンド公は墺匈國公式訪問を終りて本國に歸來せり。公の墺帝訪問は非常なる熱誠を以て迎ひられ諸國の通信員等又意味ありげに之を傳へたるが、勃國の獨立宣言と墺匈國の「ボスニア」及び「ヘルツエゴヴイナ」二州合併は此時に默約成りたるものの如くなりと云ふ。勃國公の意圖より獨立宣言にあるは論なきも此時突如として之を宣するは稍早きに失すと思惟せられたりされど勃國上下の獨立熱は最早沸騰點以上に達して之を抑ゆべからず徒に遷延する時は公自身の位置に影響すべき恐れあるより斷然玆に意を決して獨立を宣する事とし、十月五日古都チルノブヴオに於て獨立王國の宣言式を擧行し公は同國が三十年來の苦心克く獨立の實を擧ぐるまでに發達する事を得たるを感謝し祖宗の靈前に於て君臣の和衷協同を盟誓せり。此の飛報は土耳古及び他の關係列國に傳へられて世界の人心を激動したり

▲墺國の二州合併　以上勃國の獨立宣言と同時に墺國は愈々年來の野心たるボスニヤ、ヘルツエゴビナ二州併合を布告せり。即ち十月六日コンスタンチノープル駐箚の墺國大使を以て土耳古政府に「墺國は附今其主權をボスニア及びヘルセゴヒナに及ぼす事之に關する總ての問題を極めて穩かに解決せん希望なる事」を聲明し其翌七日右兩州の人民に向つては大要左の如き詔勅を下したり。

「ボスニヤ」及び「ヘルセゴヒナ」政治狀態を改善せんが爲め朕は兩國に立憲政を許與する事に決せり。且つ兩國の公法上に於ける進歩を判然確定し以て憲政の施行なからしむるは憲法の創立に必要なるを以て朕は玆に朕が統治の大權をボスニヤ及びヘルセゴヒナに布及し朕が皇室に有効なる帝位の繼承は此兩國に對しても有効なるを冀ふ。兩國の住民は此合併を永遠に確保するに於て一切の利澤を享受すべし

之れ實に澳國が二州を合併し鐵路地中海に出でんとする野心を果したる者にして、二州の人民中には近頃土國憲法政治の布告を見て憲政布かるれば總ての税金は無税となるべしなど途方もなき流説に迷はされ居る者あるより澳國は此の機に乘じて憲政布告二州の併合を宣言したる譯なり。之れ實に伯林條約を無視せる近東に於ける重大事件なるを以て之に對する列國の態度は最も注意を要すべき者なりと「スペクテーター」は述べたり

▲獨逸新聞の論調　墺國と最も深き關係を有し今回の事件に就ては墺國の影武者なりとさい云はるゝ獨逸政府は頗る不得要領なる態度を取り居るものの如くなるが、例の「ケルニシエ、ツアイツング」は墺國の行動は全然伯林條約を無視せるものにして之に對する一切の批難は墺國自ら之を處理せざるべからず。されど獨逸は該條約の存續に對し直接の利害關係を有せざるが故に桁力同盟國たる墺國を援助すると同時に又世界平和の維持に努めざるべからずと述べたるが、勃國の獨立宣言に關しては其行動を以て歐洲の平和を攪亂すべき專横の行爲なりとし極力之を批難したり

▲露國の態度　露都來電に依れば露國は列國に對して伯林條約に由る

二州に對する土耳古の權利を認めたる該條約を修正せんが爲め列國會議を提議すべく且つ露國は土耳古の爲にも公平なる措置を取るべく而して列國會議が是認するまでは勃國の獨立及び墺國の二州合併を承認せざるべしと云ふ露國の輿論は一般に勃國の獨立に同情を表し墺國の二州合併に對しては獨逸と反對の意見を有するものの如し。即ち「スラヴオ」は勃牙利の獨立發表は墺國が二州併合に必要なる事件にして是れスラヴ民族に對する大打擊なり勃牙利の獨立には固より同情を表すべきも之が發表は未だ其時機に到らざりしなり吾人はボスニヤ併合に反對す云々」と述べ「ビルジビヤ、ヴエドモスチ」は墺國は一方に於ては土耳古をして勃牙利と戰はしめんとし一方に於ては二州を合併せん意志にして、之と同時に獨逸民族は近東に南下し來るべし、若し墺國が伯林條約を無視するとせば露國も又必要の場合には自由に之が規定を無視すべしと論じ「スヴヰット」は勃國公の獨立决心は時機を得たり土耳古が弱き間は勃牙利が其配下に在るも危險なりしと雖も土耳古が改革せられたる今日勃牙利は危險なるべしと說きたり

▲英國の態度　之に對する英國の態度は獨り甚だ明確なり英國政府は勃國の獨立、二州の併合何れにも反對なる意見を有し、外相グレー氏及び前相アスキス氏は以上兩國の所爲を以て條約違叛なりとし列國の意向が明瞭となる迄は之を承認せざるべしと云ひ殊に「グレー」氏は極力土耳古を援助すべしと演說せり、又英國の新聞紙は筆を揃へて土耳古に同情を表し「凡そ何れの國たるを問はず國際條約を他の加盟國の同意なくして變更するの權利ありと云ふが如きは英國の認容する能はざる處なり、從て露國の唱道に係ると傳へらるゝ歐洲列國會議に基く伯林條約の改正に關し他の關係諸國殊に土耳古の意向を諒知するまでは英國は今後の事態を認めざるべしと云ふに一致せるものの如し、十月六日の「タイムス」は其社說に於て之を論じて曰く「若し墺國をして其意に適せざる伯林條約の一部を破棄せんことを固執するに於ては露國も又自國に不利なる條項殊に「ダルダネス」に關する規定を破棄せんことを主張すべし然るにダルダネス問題たるや其波及する處極めて廣汎にして且危險なる分子を含む殊に本件の列國會議に提出せらるゝは吾人の固く反對せざるを得ざる處なり云々」と、以て其世論一般を諒知するに足るべし

▲土耳古の態度　土耳古政府は六日以後連日大臣會議を開き二問題に關し討議しつゝありしが、其意向は極めて穩和にして飽までも列國の裁斷を仰がんとするものの如し而して鐵道會社にては即時勃兵が擅に占領せる鐵道を返付せざれば一日一萬五千フランの賠償金を要求すべしと勃政府に通告せり、されど勃國の决心甚だ固く墺國又容易に列國反對意見を聽き得べくもあらず、事態益々容易ならざる形勢となり竟に[illegible]と境を接せる「セルヴイヤ」古來幾萬の老若男女が其國の獨立の爲に血淚を濺ぎたりし「セルヴイヤ」國の人心不穩となるに至れり

▲セルヴイヤ人の憤怨　墺國の二州併合を耳にするや「セルヴイヤ」は他

の關係列國よりも驚きたり、倫敦駐剳セルヴイヤ大使はロイテル社員に向て、ボスニヤ人の多數は先きに墺太利が一時的占領を行ひたる時絕對に反抗したる「セルヴイヴ」人にしてセルヤイヤ國も又彼等の爲には二回までも血を流したる事は皆人の能く知る處殊に今回の同地合併は墺太利がサロニカ占領の終極目的に一大步趨を進むる所以、而してサロニカ占領は政治上商業上セルヴイヤを壓殺するものたり云々と語られしが、セルヴイヤ政府は首府ベルグレードに於て列國に對しセルヴイヤを保護せん事を訴へボスニアの現狀維持を要求し、若し此事ならずんば同國の獨立的存在に必要なる賠償を與へんことを望みたる布告文を發したり。民心の激昂は意外の邊にまで影響せん有樣なるより政府は一方には戰鬪準備をなし一方には國民議會を召集せしが議會は滿場異議なく政府の信任案を決議し特別軍事費として一千六百萬法(フラン)の支出を可決したり、市民大會は首府到る處に開かれ戰爭は遂避くべからずなどゝ宣言する者あるに至れり

▲列國會議の難題　露國政府は同問題の容易ならざるを見遁早く列國會議を主唱せるが外相イズオルスキー氏はグレー氏と協議し英露佛三國協定案なる者を妥協せりと傳へられしが十六日のロイテル電報は之を報じて曰く「英佛露は伯林條約」の舊條項を改變して墺地利のボスニア及びヘルツエゴヴイナ合併希臘のクリート合併、勃牙利の獨立、ルーメニア鐵道の占領及びクリート合併に關し土耳古に對する勃牙利及希臘の賠償議書を決定せる新條項を加へ猶モンテネグロに關する舊條項を改變して從來同國に課せられざる總ての制限を撤廢しダニユウブ沿岸諸國の權利擴張を認むる一項を加へ又其宣言には憲政改革の實施せられたる曉には土耳其に於て列强郵便局の事務取扱を廢する事等を議する爲列國會議開催の議に同意せり又ダーダネルス海峽問題は啻に露國軍艦の航行を許可するのみならず露國の對戰國にも亦之を許可すること原則として其交涉を露兩土兩國の間に保留することとなれり英國外務省の公報は前記の報道を確認し更に進んで英露外相は俄英露協約に關して生ずる所の問題を協議したるがこは兩國對等の見地より中央亞細亞問題の解決に付從前通り調和的なる協同の綱緞を約せるものなりと報ぜり」と之に對する獨逸政府の意向は頗る冷膽にして底氣味惡るく是等の諸問題を等閑過眼視しつゝあるものゝ如くなるが十七日發のロイテル電報は更に興味ある者にあらずや即ち「列國會議開會の相談は行惱みを生ぜり勃牙利は土耳其に對して償金支拂を否認し土耳其は英露佛三國の協定せる條件を受理せずと聲言し勃牙利を除く他の巴爾幹諸國にては墺地利に對するボイコツト熱擴がり墺國商人は啻に商業上の打擊を被れるのみならず種々住家を破壞され居れり又一方に於て獨逸皇帝は三國協定案に不滿の色あり巴里に在る塞爾比外交代表者は公然條件の不滿足を唱へ墺地利亞の協定案中に承諾し得べからざる條項ありと公言せり

▲土勃墺土直接の交涉開始　土勃兩國は列國會議の有無に拘はらず先づ兩國間の鐵道問題を協定せんとし各委員を派して窃かに協商せんことを發議し兩國之を容れ墺國又二州の併合を土耳古との直接談判に依りて解

決せんことを申込みたるが何れも常に行悩み居るものの如く容易に解決せられざるべき模様なり、バルカン問題が將今如何に發展し行くべきか未だ遽かに斷言し難しと雖も、土耳古が頗る平和に戀々たる態度を示しつゝあれば此後意外なる出來事さへなくんば干戈に訴ふと云ふが如き事には成り行くまじと思はる猶之に關して次號に記載すべし

●獨逸皇帝の失言　獨逸皇帝が彼の三國同盟說の唱へらるゝに至りし以來屢々大膽なる失言をなしては物議を起しつゝある事は誠に苦々しき限りなるが今又一場の談話より國際上の古疵をあばき出したるは沙汰の限りなりと某有力なる外紙は憤慨しつゝあり、其談話の內容は獨逸は南阿戰爭の際露佛兩國の排英同盟に加はる事を拒みたり又獨逸は太平洋に於ける日本の勢力と清國の覺醒とに鑑み強大の海軍を有せざるべからずと云ふにあり、更にロイテル電報を掲げて其要領を記さんに二十日發のロイテル電報に曰く「デイリー、テレグラフは一點の疑念を容る可らざる筋より出てたるものとして獨逸皇帝の驚く可き談話を掲載したり獨逸皇帝は一部英人の議論が朕を侮辱し且其間斷なく英國に友情を表せるに對し常に曲解を加へ恰も目するに仇敵を以てするの狀あるは憤懣の至りなり抑も先に歐洲をして英杜戰爭に干渉せしめんとするボア人の計畫が失敗に歸したるは朕がボア人代表者引見を拒みたる爲めに外ならず朕は又戰爭酣なるの時協力干渉を試み英國の體面を損せしめんとする佛露兩國の勸告を拒絕したり殊に一千八百九十九年事態危かりし週間に於て朕は英國女皇陛下の痛心極まれる書簡に同情を以て返答し且つ將校の一名に命じ在南阿英軍の兵數及地位の確定なる記錄を提供せしめ參謀部に諮問の上戰鬪計畫を作り之を英國に送りたり然るに奇怪に一致せる事件とも言ふ可きはロバーツ元帥が採用せる戰鬪計畫も頗る同一なる徑路を執れること是なりと說き次に強大なる獨逸海軍が益伸張しつゝある世界商業の爲め必要なる所以を辯じ抑も或人々が信ずる如く遼遠ならざる將來に於て如何なる事件が極東に惹起す可きか何人も之を豫想することを得ざる可し而して太平洋の將來を解決するに當り其言論を尊重傾聽せしめ得るものは獨り強大なる海軍を有する邦國ならざる可からず將來の大論爭に於て英獨共に同一の側に立ち主張する場合に到らば英國は恐らく獨逸が艦隊を有するを喜ぶならんと結論したり

▲英國新聞の論調　タイムスを始め其他の有力なる英紙は之に對し殊勝にも頗る愼重なる態度を取り過去の事は過去に葬らしめよと云ひつゝあり獨帝の不謹愼なる言動は獨逸の官民をさへ失望せしめ一般の世論は寧ろ獨帝に與みせざるものの如くなり獨帝は其宮內官をして日本に關する事項の如きは全く曲解せられたるものなりとて極力之を辯解せしも事實は事實として取扱ふ外道なし獨帝が過去の言動に徵するも今後此の事るは敢て奇怪なる事にあらずと某佛國外交官は匿名の下に大攻擊を獨に加へたり



現代人物評論（十一）

三宅雪嶺論

△三宅雪嶺翁

文學博士　建部遯吾

人を評論し、殊に生きた人を評論し、殊に生きた先輩を評論することは極めて困難なることとてあるが、三宅雪嶺翁について自分の感じて居る處をお話すれば先づ

第一に、如何なる傑出の人、有用の材と雖も名節の何たるを知らず、大義名分を辨へざる人、若くは之を知り之を辨ふと雖も甚だ之に重きを措かざるの人は見るに足らず、少くとも予は斯くの如き人を先輩として仰ぐを屑しとせない。而して雪嶺翁は予の先輩の一人として仰ぐ人たることを公言する。

第二に、其人誠に見るに足り、其風誠に仰ぐに足ると雖も、之を當世に施して世を濟ふことなく、之を事業に役して用に充つるに足らずんば所謂樗櫟の材、性命を亂世に全うして自ら免るゝあるのみて、必ずしも三度び之を草廬に顧みて與に漢室の興隆を策するに足らず、而して予をして若し漢皇ならしめば赤阪新坂町の邸に三度び翁を訪ふの勞を辭せざるものてある。

第三に、公人として功德天下に布き、哲人として風格一世に高き人と雖も、人に對して温厚親愛の情に缺くるが如きもの或は之れ無しとせず、曾子の三省、人の爲めに計て忠なる、此事は社會協同生活の義を全うする根本にして而して眼識材力の遠く且つ大なるものに或は却て忽諸に附せらるゝ弊なしとせぬが、翁の如きは此點に於ても略ぼ缺なきに庶幾しといふべきてある。

若し夫れ陋巷に窮居して厭はず、布衣にして居然天

下の驚きを以て自ら任ずるが如きは、翁にあつては尋常一樣の事にして、何等の奇とすべきなく、何等の誇りとすべきなかるべきも、滔々たる天下、苟も名利のある所毫末の微と雖も趨て之に就かざるなく、朋友尙且つ相陷し相擠し、時に或は御馳走政策により、時に或は醜構の政策を以て猖々腐肉を相爭ふの陋態が上下に瀰蔓する時にあつて、翁にあつて尋常一樣の事も、以て奇とすべく、又以て誇りとなすべきである。之れ蓋し翁の爲めに祝すべきを見ずして天下の爲めに悲しむべきを思ふのである。

翁と雖も初めは翁にあらずして少年時代、青年時代もありしことなれば、時に或は顯脫して世と抵觸するが如きこと廿年前にはありしならんと思ふ。近き記臆に存することとては翁が文學博士の學位を受けられた時に、「文學博士といふ號は辭退する程の價値のない」といはれたと噂せられて居るが、此事固より翁の德を累はすに足らざれども、何となく齷齪として翁の氣局の小なるを思はしむるの弊なきかと考へる。思ふに其及門の徒、翁の氣魄大なるを示さんとし、其一言一句を誇大にして世に傳へたるが基となつて斯くは喧傳せられたるならん。予を以ていはしむれば――否考へしむれば、「博士といふ學位は辭退する程の價値もないといふて受ける程の價値はない」と思ふ。予の氣局の小なるを以てして猶然り、況んや翁に於てをやである。

予は嘗て外山博士に伴はれて京都に修學旅行をしたる事あり、時に某學士あり、博士に其旅館に伺候して盛んに京都學士社會の腐敗を罵つた。其人去るの後博士は「某君は硬派也」といはれた。今此事を例にとつて人物を見るに予は人物に三段あると思ふ。京都に入て滔々たる墮落の仲間入をするものは實に其下に屬するもの也。外山博士の入洛を時として直ちに京都學士の墮落を罵倒するものは其中なるもの也。而して其上たるものは、所謂敎育界に有力なる外山博士の前に（勿論自己は充分品行端嚴にして毫も墮落の風に染まざれども）之を罵倒するには餘りに自尊自重の念の高きもの即ち之れである。

前項は甚だ餘談に亘れるの嫌あるが、翁の博士學位論として傳へらるゝが如きは翁を以て上格の人物たらしめずして却て中格の人物たらしむるものたるを明かならしめんが爲めてある。淺慮の人往々人を揚げんとして却て其人物を小ならしむることを知らず。余が切に此等の擔禪漢等の猛省を促す所以てある。

予が此事を特にいふは世に翁の逸事として傳はる事にして、予が翁に接して直接に見聞する處に比しては此意味に於る翁の人格の低下を意味するが如き事過半也と思ふが故てある。蓋し日本新聞の豪傑連などが現今の狀勢に平かならず、世と睽き時と離れて幾分奇矯の弊を犯しても一世を振作する爲めに態々誇張して以て江湖に喧傳せるものにはあらざるか、若し果して然りとすれば予は其動機を嘉して其方法に與せざるものてある。人は左まで高き能力を自分は備へずとも、人を許するの眼識は頗る高きものなれば、かゝる逸事、かゝる實例を以て世を戒めんとせば、之に反するハイカラ者流よりは却て此方を冷笑するの好餌柄とせらるゝの虞あり、濟民經世の力却て薄し、注意すべき事てある。

予は全體逸事を以て世に傳へらるゝ人を好まぬ。其人の一生を通觀して體系を具ふるこそ大人豪傑といふべきてあるが、或は二三、或は七八、或は十百の逸事を補綴して以て僅かに傳ふべきが如き人物は、之を文章に譬ふれば或は「龍躍り」、「虎嘯き」、「風雲亂れ」、「波浪涌く」、「天地震動」、「日月晦冥」等の煽動的語句のみを以て素人を眛かす底の嘗て世に存在せし『活世界』一流の文章か、若くは彼の「あくがれ」、「憧憬」、「そよ吹く」、「煩悶」、「くちつけ」、「恍惚」等の殺し文句を並べて兒女の歡心を買はんとするそんじよそこらの藝術皷吹文士一流の文章の如きものにして、此兩者はスタイルに於て剛柔陰陽の別はあるが、詞を以て傳ふべきの外總體の文としては何等の見るべきものがない。彼のマコーレーの如き、ギボンの如き大規模なる文章を見れば、其詞に於て必らずしも巧緻を極むるにあらざるも、其總體に於て千軍萬馬涿鹿の野に馳騁するが

如く、若くはヘデン博士に從て西藏の高山大澤を跋渉し、時に山間幽寂の湖を掠めて吹き來る清風に嘯くの慨あり、予は人の一生以て大いなる美術と心得るが(偶牛一流の美的生活と誤解する勿れ)文章も亦壯大なる美術也、故に之を以て人の一生に比するは、決して類推式論法に陷れるに非ず。世には大人豪傑の一生に接しても、結構雄大、規模恢宏なる大文章に接しても其眞髓及び特色を看破するの能力なく、僅かに二三語句の絢爛なるに眩惑して全體を見得ざるものあり。彼の逸事を以て大人豪傑を傳へんとするが如きは蓋し此類てある。

事は益々餘談に亘るやうだが、雪嶺翁は其門下三千の徒よりして逸事を以て世に紹介せらるゝの危險なる地位にある。かるが故に余は今唯逸事と人物との一般論に及んて翁の人物の逸事以上なることを明かにしたのてある。

勿論かくいへばとて翁の逸事が翁の暗黒を意味するといふのてはない。所謂過を見て仁を知るといふ事すらあるから、逸事を以て人物の眞面目を見ること、深き人物鑑識眼ある人には實に容易の事てある。翁の逸事は、凡庸の徒ならば勉强して之を行はんとするも得べからざる尊いものが大多數てある。されど予の殊にいひ度きは翁は眞に逸事以上の人物てあるといふとてある。逸事を以て傳へらるゝ翁は中格の人也とするも眞の翁は上格の人也といふことてある。

近頃人を評論するに其家庭を言ふのが流行らしい。成程家庭にして殊にいふべき程のものならばいふもよろしい。國亂れて忠臣顯はれ家貧くして孝子出づといふやうな場合に、其家庭をいふのもよろしい。例へば先年某博士の母堂甚だ道を失へることをした、然るに博士の之に事ふる恭敬親愛至れり盡せりといふとがあるが此等は傳ふべき事てあらう、又舜が瞽瞍に使へて孝悌の道を盡し、烝々乂不レ格レ姦といふやうな事は傳ふべきてあらう。然し尋常一樣の家庭の尋常一樣の事は殊更らに傳ふるの必要がない。彼れは其妻に對して親切なりし、彼は其子に對して慈愛なりしなどいふ

ことは評論として實に膚淺極るものにして通辯的飜譯的習氣を脫せざる者といはざるを得ない。予は翁の一家より最も大なる恩德を受けつゝあるものだが、此談話に於て「翁の家庭」を麗々しく世に紹介する丈けの通辯的勇氣を有て居らぬ。元來堂々たる大丈夫が內助なくして事業が出來ぬなどいふことは實に意氣地のない話である。而し妻も亦サムシングなれば妻賢なれば夫れ丈け何かに結果あるはいふまでもないけれども、妻が賢でなければ丈夫世に處し事を成すを得ずといふが如きは丈夫の口にすべき事でない。吾々經世の學を講ずるものは國家教育の立場よりして賢母良妻の養成を極力主張する次第であるが、大人傑士を評論するに當て其功は半ば妻の力たるといふが如きは偉人傑士を侮辱するものである。

余の親友に某なる者あり、之が他家に養子を勸められた。所が好んで大人偉人の傳記を讀みし快活なる某は、男子生れて他姓を冐さずというて之に應じなかつた。然るに吉田松陰も亦他姓を冐した人だといふことを聞いて意を飜して養子に行た。讀者は赤阪新坂町を過ぎる時、翁の標札と並んで今一つの標札の掛けられてあることを見出すであらう。翁は吉田松陰の如く養子には行かなかつたが而かも夫人の家族と同棲して居らるゝ。讀者は記臆せるならん、十月十七日發行の「日本及び日本人」の臨時號「吉田松陰號」に於て「吉田松陰先生と父との會合」と題する雪嶺夫人花圃女史の一文章を。此父といふ人が現に此今一の標札の主人公田邊蓮舟氏である。

廿年前に予は早稻田專門學校に於て翁の授業を受けし時、翁の訥辯に閉口したるものゝ一人である。翁の辯に訥なる今尙古に減ぜずであるが、然しながら今や翁の雄辯なる、實に天下罕に見る所である。之は予の耳の進んだ爲めであらうか、又或は翁の活動の進んだ爲めであらうか。今の學生は多く教室に於てペンを以て講義を筆記する。其れが爲めに漸次筆蹟を下落せしめ、如何なる能手も遂に拙惡見るに堪へざる文字をなすに至る。筆記よりする學生筆蹟の損失も左ることな

から教授の辯論上に蒙る損害も亦之と全じ。人生見臺叩きとなること勿れ、假令ソイリッピックスの辯士デモスセニスをしてても、學校の講壇に立つこと三年ならしめば恐らくは平板凡庸なる辯論家となり了はりしならん。是に於てか知る、雪嶺翁の昔訥辯なりしは講壇に立ちしが爲めにして、今の雄辯なるは講壇を去て立つ所の地位を得たるが爲めなることを。

石川縣は由來緻密なる思想の人を出し、數物天文に深き學者を出すと聞くが、予の數學物理學の師に數ふる北條時敬、櫻井房記の二先生の如きも實に非凡なる能力を有せられて居る。日本晩近の學風は、殊に文學哲學史學等に於て殊に其然るを見るが、次第〳〵に漢學塾の學風に近いて行く。學者といふものも所謂古人の糟粕を甞むるを名譽と心得るもの多く、六經を以て我註脚とはせずして、我を以て六經の註脚とするもの比々として皆然りである。此風は語學の偏重、普通學の偏輕に於て最も多くあらはれて居る。かるが故に明治學界に哲學なきや久し。其之れあるは之を先きにしては、雪嶺翁の「我觀小景」、之を後にしては翁の「宇宙」(一名「原生界と副生界」六十三號に亘りて日本及日本人に連載せられたるもの)である。漢學者流は有形學に通ぜざるを以て有名である、翁は石川縣人として其哲學思想の根底が最も進める宇宙科學に存するを其特色とする。近頃黒岩周六といふ男あり、彼亦奇特にも「天人論」の一書を著はせり、之にも甚だ感心すべきは「一體」、即ち渾一の思想を體得せるにあるが、翁の近業に於ては之が非常なる特色として出て居る。然るに漢學的哲學研究者は今日に在りて尚且此思想にも觸るゝ能はざるものあるを往々見受ける。予は自ら一箇の哲學書をも著はすことをせぬが、予の專門とする社會學の根底として一個の哲學系統を立つることを必要とし、世界の學界に後れざる丈けの覺悟はなして居る。予のこゝにいふ世界といふは勿論東洋西洋を總て含む大いなる世界を指していふのである。予の大觀する處によれば哲學は古今東西學問の粹である。あらゆる學問の最も進歩せざるものが哲學である。然し哲學と雖

も雪嶺翁の「宇宙」などを得ば又以て些か學界の一隅を要求するに足る。大人豪傑の一生にとりては哲學思想の如きは又其生活の滓である。彼の煩悶を以て得意とするが如き世人殊に青年諸氏は予の言を以て或は奇矯に失する者となすものあらんか、胸に手を置きて靜かに考へ見よ、予の言の極めて理あるを見ん、予は少年時代に矢野龍溪氏の經國美談を愛讀した、齊武（セーブス）第一流の士以斯明が國事の爲めに獄に投ぜられたる時に哲學を研究した、とある。「賢士獄中に理學を修む」、經國美談の當時は哲學の事を理學といつたが、此一章ありしことを今でも記臆する。吾々も牢屋にても入る時は哲學でも研究すべきであらう、吉田松陰が三餘の説を書いて、三餘讀書七生滅賊之本也といふて居る、三餘は雨日、病中、及入牢である、佐久間象山の所謂日暑一移、千載無二再來之今一て此貴重なる青年の歳月を投じて宇宙不可解に憂身を窶すが如きは予の甚だ取らざる處である――、又話が横道に外れた、本題に戻らう、かるが故に翁にとつては哲學のあるとなしとは翁を輕重するものではない。が翁の「宇宙」の如きは必ずしも翁の價値を下げるものにあらざることを附言して置く。

翁は「宇宙」即ち原生界と副生界の第三四回目に於て東西の大儒の學問の分類について評論を試みられた時に、拙著「普通社會學」に於て予がなせる科學の分類が古往今來最も進歩せるものといふ推賞を賜はつた。予の先進と仰ぐ雪嶺翁の推賞なるが故に特に茲に御話して置く。（完）

△三宅雪領博士

松井柏軒

哲學者としての三宅博士は、余之を評する資格なし依て茲にエヂタアとしての博士を品隲すべし。

博士等が國粹主義を標榜して、『日本人』を刊行せし以來二十有餘年、同人たりし志賀重昂氏は去れり、今外三郎氏は死せり、其他多くは方途を替て榮達し（？）

若くは落托して聞えず、獨り博士留まつて其の眼彌よ明かに、其の識益々高し、節を守るの堅き其の匹儔洵に少しとす。

德富蘇峯氏は博士と倶に我が文壇の老將軍也、他多くは代議士其の他に向て顯はれんとするも、二士獨り文筆を生命として幾んど替らず、蘇峯氏が一び官に仕へしは、博士の如く純ならざるも、氏は爾來一生を文壇に捧ぐる精神なるに似たり、試みに此の二士を比較するに、蘇峯氏は廣けれども淺く、博士は狹けれど深し、蘇峯氏は書畫骨董の鑑識あり、詩を善くし、交際に長じ、之くとして可ならざるなく、才筆流るゝが如し、博士歌を善くし、また書に一見識あり、然かも蘇峯氏に比すれば、才情兩つながら多く譲らざるを得ず

蘇峯氏に病む所は其の求むる所あるにあり、氏が平民主義より一轉して國家主義となり、淸敎徒的氣習を鼓吹して平民の友たりし地位を捨てゝ、薩長の元老に悦ばれ、驕泰なる富豪に近くに至れる徑路は、自然に理由あり、氏が其の自在なる文才を以てして曾て明白地に之を辨明する所なかりしは、是れ世間をして甚だしく氏を誤解せしめ、此の誤解の今に至て釋けざる所以なるも、氏は竟に成功を尙ぶ人也、大に求むる所ある人也、求むるがためには、其の率ゆる國民新聞をして、甚だしくアメリカナイズするを敢てして平然たる也、之を博士が恬淡にして求むる所なく、假令一人の購讀者なきも、自個の生命の存して其筆を揮ふに堪ゆる間は、必らず『日本及び日本人』の刊行を持續すといひ、苟くも世に容れらるゝを求めざるに比すれば、幾んど氷炭の差も啻ならず。

求むる所なき者は強し、強きものは公平也、如何なる場合に於ても安んじて信頼すべきは斯の如き士人也

博士エヂタアとして立つと二十有餘年、政界の情僞幾んど通ぜざるなし、況んや坦懷にして常に世事の眞相を知るに努め、之を玲瓏明晰なる哲學的頭腦に藏め、由て以て推理し判斷することを怠らざるをや、博士の時事を論ずるに穩當周密にして、常に心あるものをして推服せしむる洵に其の所なりと謂べし、余は此の點に

於て、博士を以て當今第一の人と傚すに躊躇せず。

世のエヂタアなるものには多くの暗黑面あり、呉服商美術商の奴僕となりて其の爲めに機關となる片々たる小記者は素よりいふに足らず、堂々論壇上に濶歩して、常に骨鯁の稱ある記者にして、富豪大會社又は政府の爪牙となるもの多きの事實は、深く暗黑面を覗く人をして阿然たらしむ、假令毎月、又は一年兩期、又は不定期に金錢の給與を受けざるものも、尙ほ別に求むる所あり、迎へて以て文を舞はさゞるは少し、眞個に獨立の骨頭あるエヂタアなるもの今の時果して幾人ありや、唯だ博士は淡然として寸分も求むる所あらず窮乏に處して晏然たり、是れ博士のエヂタアとして最も崇高なる所以にして、余の推稱を禁ぜざる所とす、博士の議論の當今第一たるは、其のエヂタアとしての人格に於て實に當今第一たるが爲め也。

燈火を其の四方に點じて、一の陰影だもなからしめ之を赤裸々として其の心中までも照破せば、今の我が記者にして、眞に良心に耻ぢず、俯仰して天地に愧ぢざるもの恐らくば唯だ我が博士のみならん、余は遺憾ながら敢て斯く斷言せざるを得ず、後進の士、若し眞に堂々たる大記者たらんと欲せば、少くも其の人格に於て博士たるとを期せよ。

△類の無い人

黑山生

●三宅雪嶺博士は、或意味の二重人格と云ふ事の無い人である、又た出來ぬ人である。凡そ昔でも今でも、文章の士、言論の士ほど、二重人格のある人種は無い、行ふ人格と言ふ人格、或は思ふ人格と言ふ人格は、恐ろしい程飛び離れて居た。所詮文章と言論とが巧みなれば巧みな程、益々我を僞らしむる唯一の誘惑となつたものである。斯て桂月氏一手販賣の人格即文章論も、あはや半錢の權威も無からうとする。此時に當つて、我が雪嶺博士は、桂月氏唯一の見證かのやうに、白皙の面偉大の軀幹、巍然として文壇論壇の上に突立つて

居る。若し我を僞らず、我れを復現するが自然主義作物の眞髓であらば、雪嶺博士の言論と文章とは、又た之を純眞自然主義の文章と言論と云ふに、何の差支へがある。

●餘り早い頃の事は知らぬ、自分等が知る頃になつて、博士は國士として一世に尊敬を拂はれたものだ、然し國士など云ふ言葉の意味は、今ま時の青年には少しく耳遠くなつた。今日の博士が、今日の青年及び一般から、受取る名稱は、學者——哲學者、「日本及び日本人」の主筆——異なつた雜誌記者、演說家——最も異彩ある演說家、文章家、思想家、特殊の眼識と頭腦を持つて居る文明批評家、諷刺家——直言して憚らぬ……、時流に卓越した性格と人格の所有者——、花圃女史と共に文學に携はる、暖い家庭の文學者——と、大抵這麼ところかと思ふ。

●誰れからも尊敬されて、少しも罵評の無い人間は、一向詰らぬ人間だと昔の王者は言つた。處が我が周圍には、唯だ博士に對する、感嘆、贊嘆の聲を聞く許りである、博士は果して「詰らぬ人間」であらうか。

●いや〳〵、博士に反抗した評も一つ二つはある。今は死んだ、名は忘れたが一寸名士だつたと思ふ。三宅は俗人だと言つたと聞いて居る。人を評するのは素より其人の勝手であるが、博士を俗人だと評する程、見當の違つた評論も先づ餘り有るまい。惜い事其人が長生せずに、粗鑛の金か鐵滓か、最後の判斷を見ずに了つた。

●黒岩周六氏は、雪嶺博士は少しも得體の分らん人だ、不得要領だ、あゝ云ふ人は我輩には分らんと言つた相だ。之は面白い、其の態度、容貌、仕事、文章、恐らく周六氏ほど要領ばかりで出來た人もあるまい。其の全要領居士と、所謂不得要領居士では、全くの極端と極端だ、解らぬと言ふ方が寧ろ本當であらう。

●渡邊無邊氏は、雪嶺博士の「現生界副生界」を熟讀して「斯う科學に囚はれて居ても困る」と言つたさうだ。因に云ふ無邊氏は、畢生の事業として、目下世界哲學大系の大著述に潜心して居る。其の所謂科學に囚はれ

ざる哲學の正體は、果して如何なるものであるか、又た雪嶺博士が、何の邊まで科學に囚はれて居るかは、其の大哲學が出た上で無ければ分明せぬ。

●尤も博士は科學にも非常な趣味を有して居る。

●死んだ宗教界の名士清澤滿之氏は。學界の豪い人三人を數へて、其一人に博士を擧げた、犬養木堂氏は、博士を國士と銘を打つたさうだ。

●嘗て帝國大學の總長が問題となつた折に、博士を夫れにと推選した人々もあつた。而して其の人は、平生博士を餘り能く思ひさうは無い、博士某々諸氏であつたと云ふ。京都大學總長としても勸められた事もあつたが、博士は遂に承諾しなかつたさうだ。博士の平生と文章上に主張する處に依つて、密に推察して見ると博士は何處までも民間の一處士として、官途の束縛を被むらずに終りたいと云ふ考へらしい。或はさうだと斷言する人もある。

●然り、博士の立場、心事、主義としては、恐らく之が懸値の無い値打てあらう。博士は徹頭徹尾自由の一布衣てある。主義にも縛られず、金錢、名譽には素より縛られぬ。博士の天地は頂天立地、棒を振廻さうが、三間槍を振舞さうが少しも差障りの無い平民の天地てある。博士は此の自由の天地を樂む爲には、在らゆるものを犧牲とするを厭はぬ人である。かゝるが故に先年靑年會館て、外國の一僧侶が演説中に、日本國民の非を鳴らした折に、來賓席から立上つて、堂々と之を論駁した、雪嶺博士を見る事が出來たのである。孔子祭には澁澤男を揶揄し、圖書館の演説では、末松男の日本國民無公德論を反駁する事が出來たのである。而かも其の如何なる時にも、博士は外國に比して、日本を賤しめた事は無い、必ず我日本の狀態を樂觀して、我日本の美點――人の氣の付かぬ美點を穿ち出す態度は、曩日の國粹保存主義と相對して、主義一貫せる博士を見る事が出來るのであらう。

●社會の人としてのアベリー卿やアクトン卿の、科學其他の學者たるは奇とするも、政論と哲學に相平均した雪嶺博士は、更に面白い對照が見られぬてあらうか。

哲學科の出身で、嘗「日本新聞」の政論の記者であつた、政海の觀測者であると共に、思想界の先覺者である、哲學者たると共に、哲人の境界にまで踏み込んで居る。

●豪い人にも二種の模型がある。天稟の才や人格を、時勢に適應せねば、自己の存在を廓大にする事の出來ぬ人と、如何なる時勢にあつても、我は我れだ、何者にも依頼せず、我れ其のものを何時でも凡衆の上に抽き出す事の出來る人と、二つある。博士は實に後者の型である。

●前者として時勢の成功見たるも好いが、夫れには我れを加減し、伸縮する手加減、不自然な手管が要る。寧ろ後者の天眞爛熳、徹頭徹尾自由の天地に發展する、自然の姿に及ばぬ事遠いのである。修養した人格は、尾崎行雄氏にも、竹越三叉氏にも見る、博士に至つては、自然が拵へた天成の人格である。

●天才と云へば、必ず常識を缺いて居る者と思つて。或は博士を贊嘆せんが爲に、博士を以て常識の無い、奇矯自ら喜ぶ奇人と獨斷して居る人もある。然し自分の見る處は違ふ。博士は立派な常識の具つた學者である。其文章までも無い、注意して其談話を聞き玉へ、博士が、如何に世間の細かい俗事にまでも通曉して居るか、所謂二上り三下りまでも通じて居る。唯だ違ふ所は、其の常識の上に築き上げた、思想、識見其ものが、他の凡々人と規を異にするものが多いのである。

●然し、博士には一面奇矯な分子が確かにある、文章にも、平　にも、

●精神の剛健、肉體の剛健、之は博士の博士たる一面を作る要素であらう。其の文學博士となつた時、「別に有難い事は無いが、圖書館へ往つて見られる丈けが好い」と云つた短い一句には、如何に剛健な、名利を物とせぬ博士の見識が含まつて居るか。

●肉體の剛健に對する、博士の努力や又た到つたものである。博士は徒歩主義を以て名高い、雨がどし／＼降る中を恐ろしく、無細工な大きな蝙蝠傘を差して、どん／＼濶歩する、目の荒い蝙蝠傘の切れ地を透して、

し吹きが顔に掛るのを、「南洋で雨に遭つた心地がする、涼しくつて心持が好い」と喜んで居る中に、着物が悉く濕れて了ふのを苦にせなんだと言ふ。晴れた日は其の蝙蝠傘を杖に、電車の一隅に、腰を掛けて居る、日和下駄の博士を見る。朝、起きて冷水を浴び、鐵亞鈴を揮ひ、健啖する、博士は着物の疎末は少しも意とせぬが食物の材料には注意を拂ふと云ふ。日に何時間と廣尾邊まで散歩する其の色の白い面に鮮紅の血色美はしく現る、博士の健剛な身體も、又た依て來る所がある。博士は決して腕車に乘らぬ、徒歩主義である、唯だ國語調査委員として、文部省に出る折に、一々門番に斷はるのが面倒と云ふので、其の時だけは腕車を用ゐたと云ふ。博士の風采は之に依つても伺はれるのである。

●博士には、正當の意味に於ける門下と云ふものが無い、之は然る可き筈である。博士の人格、思想は、他人が之を模するには、餘りに飛離れて居る、全くの獨創である、模されるものでは無い、模す可きもので無い。又た同じき意味から、同主義、同志の人と云ふものは無い、全く獨立した人である。

●博士の大學時代が亂暴極まつた青年であつた事は、何時かの「讀賣」にも出て居つた。博士は大學卒業後一年間、門を杜ぢて熱心に讀書した、博士の今日の造詣は、皆な此一年から來たと自ら言つたと聞いた。而して博士は此の經驗を基礎として、「人間は一年間戸を閉ぢて熱心に勉强したら、大概豪くなれぬ事は無い」と云つたさうだ。然し之れは博士にして始めて出來ることて、他の人の模し得られぬ事は、其人格、思想の模し得られぬと同一であらう。

●自分等のやうな時代に生れて、弱い情け無い性格を持つた者は、兎角生活の苦みと云ふものに一身を左右され、煩悶せざるを得ぬ。博士を見て斷死すべきは此處てある。博士の眼中には貧富が無い、唯だ意氣がある、正義がある。公憤がある。博士は清廉高潔の結晶てある。

●博士の文章を多く讀めば、萬人足の火中に身を投ずる、悲壯な犧牲的精神を賞賛する處が極めて多い。又

た博士の最も好む人物は西郷南洲で、一身を諸生のために擲つた其意氣は、博士の最も激稱する處である。又幡随院長兵衞を好んで、井上聞多や星亨に、唯一義俠的精神の採るべきものあるを論じた處。又た度々板垣伯が、意氣の人たるべくして、意氣と終始し得ぬ後半生を悲む處が多い。博士は哲學者である、哲人である。然し一面に此の意氣がある、意氣の存する處、又た溢るる許りの情熱の存する所である、此の情熱は、やがて憂世の信念となつて、一世の腐敗を救ひ、道義を矯め直さうとする。博士が哲學者として政論家たるは、此の熱情の、冷靜たる學者たる態度のみに止まらしめぬのである。いや、哲人プラトーンも、ソクラテースも、皆な一面に憂世愛國の國士であつた。是に至つて博士の矛盾氣に見えた態度は、立派に解決されたと云ふものである。

●博士は決して藏書家では無い、寧ろ藏書は乏しい方である。用のある時は大抵大學圖書館に赴くさうであるが、驚く可きは博士の明晰な頭腦である、其の記臆力である、博士の頭腦裏には一の圖書館がある。其の文章に顯はれた、科學、歷史、美術、傳記其の引證は、該博を極むるに關らず、特別に調査した事は少ない、多分は其の無盡藏な記臆の藏から惹き出さるるのである。

●其の邸を訪ふ者は、其客間の楣上に英の文豪カーライルの肖像が掲げられて居るのを知るであらう、博士もある程度まで、カーライルを賞めて居る事は、其の文章の中にもあつた。權貴を者ともせず、自由に一世を罵殺した憂世者カーライルの風丰は、多少博士にも見える處はある。

●「男らしい事」は其の尤も愛する所である、セシル、ローヅを好むなども其の一例であらう。

●博士は如何なる時にも悲觀論者では無い。現時の青年は決して墮落せぬと云ふ、日本は進歩しつゝあると云ふ。博士が國粹保存論者であつた意味から、今でも博士を保守論者と思つて居る者もあるが、博士は眞の愛國者である、決して憂國者では無い。

●博士の文章を以て、佶屈聱牙の六づかしいものと思つて居る人が多い、是の説は今日の博士の文章を見ぬ人から、能く聞く所の不平である。博士の文章は、或は意味の高遠に過ぎる處がある、或は紆餘屈曲、春蛇の叢間を走るやうで、一寸歸趣の握めぬ處がある。要するに元氣の能い、底の淺い、明晰な方とは云へぬかも知れぬが頗る深い。其の文字たるや極めて平易なるを力めて居る、殊に近來になつて、出來るだけ解り易からん樣にと力めて居るとは、博士自らの談話であると言ふ。

●博士は又た、詰らぬ新刊物すらも、必ず目を通して居る、常に時勢の新潮に注意するを懈らぬ、從つて博士の頭腦は、流れる水のやうに何時も新らしく、何時までも老いぬ。一方活動の方面の社會の事實趨勢にも、絶えず親んで居る、博士はハーミットでは無い、公會にも、私會にも、好んで能く出る、他人の談話に能く注意を拂ひ之を腦中に消化して、其の精髓を保留する能力は驚くべきものである。博士の談話中に、十年前十五年前に言つた人の言葉でも、造作なく記臆から拙き出すことには、驚嘆せざる者はあるまい。

●博士との對談は、最も對話者を刺激し、驚嘆し、レフレッシユさする分子に富んで居る、獨り話材の他と異つて居る許りでは無い、必ずしも悉く理路の妥當を得たとは云へぬ、然し一言一句我等の及びも付かぬ、奇警な着意の人を覺醒するものでないものは無い。

●博士の演説は、此の會談の長い連續である。奇警な哲言高遠な理趣の外に、其の熱誠は確かに人をして襟を正すに値せしむる。拳!拳!、拳は男兒の精力の籠もる處である、博士の演説で、咄々たる言葉の、將に口を衝いて出でんとするに當つて、博士は先づ拳を高く擧げる、拳!、見よ其の拳に籠つた熱誠の力を。

●博士は文章を草するのが早い、そして毎日でも新聞論説欄の一段を埋める丈の材料は持つて居る、然し文章には頗る苦心するさうだ。活字になつたものにも、幾度か朱を入れねば滿足せぬと云ふに依つても、其の程度は解せられるが、其の文の理路周匝を極めて、且

つ其の意見が每々他人の云ふ上に、一歩高く踏み出さねば止まぬ處は、博士の文章の價値、權威が一に掛つて是に存するのてある。技巧としての缺點は前に云つた。貫目ある言說としては、思想界に獨步すべき價値は是にあると思ふ。

●得られぬものは博士の筆蹟てあらう。嘗て博士の風丹を畏敬する某小說大家が、創作の代りに博士の筆蹟を獲やうとしたが、遂に獲られなかつた、其代り博士の止むを得ぬ書簡は、花圃女史が代つて書くと云ふに至つては、實に文壇の一美話と云ふべきてあらう。

●「日本及日本人」は、博士の專ら力を盡す所てあるが、其細心は、表紙の文字、雜誌の體裁口繪の末にまでも行屆いて居て獨創と奇拔な妙案に社員を驚かすさうな、博士は決して非常識の學者ては無い。

●博士は現代に超越して居る人格の人、識見の人てある。

●氣節と意氣とを最も多く尊び、信念の前には何物も無い。而して飽までも出處進退を重んずる士人てある。

●日常生活の博士は讀書に凝り固まる人ては無い、つまり一の書物を、十の區域に發展さする創造、適用、工夫の能力の優れた人なのてある。

●博士の舊著の幾多は、もう書店でも到底探されぬやうになつた。其の半生の研究の最初の成績たる「宇宙」は、優に數百頁の大著述となつて近く現はれやうとする。學者として老いざる博士の功績は、學界の等しく感謝すべき處てあらう。

●家庭に於ける博士は、和氣藹々として其の淸福掬すべきものがある。夫人には貞節て賢明な花圃女史があり、岳父としては幕末の名士田邊蓮舟翁がある、而して多い子女の諸氏は、何れも博士と女史に似て、文藻に富んて學問も優れて居る、繪畫に巧みて和歌を詠ずる、博士の甥君は理學士て昆蟲研究專門の恒方氏てある。一門の淸福羨むべきの至りてある。

●博士の酒量は極めて多いが、誰人も博士の酒席に在つて、博士の亂れた事を見た事は無いと云ふ。亂と亂

れざるとは精神に在る。

●博士は其の容量を測る事の出來ぬ人である、高と大が凡を抽いて居るからである。唯だ博士は人に對して、胸壁を設くる人では無い。舊「日本新聞」の新年會や、紀念宴會の酒席には、社員が博士を蝟集して談笑する博士も亦た小兒の如く、微笑を浮べ乍ら話し合ふ、編輯局でも亦た其の通りで、話者は充分の敬意は拂ふが、腹藏の必要は少しも感ぜぬ、後進を遇するに、極めて親切で、少しも傲慢な態度が無い。

●博士は又た包容の大なる人で、大抵の人は擇り嫌ひせぬ。

●博士は獨り思想界と、政治界にのみ注意を拂はぬ、常に注意して如何なる細微なる事件も意見がある、そして其の意見が常に新らしく、常に一貫し、常に進步する。

●と云つても自分等は、博士の言論文章は、徹頭徹尾感服すべきものとは云はぬ、殊に其の青年に對する意見には、我々若い者には、もう一步を進んだら、もう一と皮脫いて我々の世界に密接して呉れたならと云ふ不滿足の考へが時々浮ぶ。結局は生れた時代の相違であらう。

●思想家としての博士は教訓する方の型では無い、サッゼストする方の型である。

●博士は又た人物の評論家として、歷史の批判者として、多く類の無い才力と、觀察力を備へて居る。

△三宅先生

戸川秋骨

●僕は三宅先生には少しも感服して居なかつた。否、先生の議論には少しも感服して居なかつたのである。五分刈の頭の毛にまだチョン髷の癖が殘つて居るやうて、時々は奇拔な意見もないではないが、先生の評論は大抵見當違の御說のやうに考へられた。先生は評論の人ではない、勿論政治文藝の人ではない。只その見當違や不得要領の内に、何物か尋常でない趣のある處

は、全く教育家たる所以であらうと思つた。學校の校長にでもなられたなら、申分ない人であらうと思つて居た。三宅先生を拜せずして、只先生の文章を讀み先生を想像した僕の考はそれ丈けであつた。

處がこの夏和强學堂の文藝講演會で先生と一處になつた。その時の僕の感は如何にも先生が愛嬌のある可愛らしい人――先生を指して可愛らしいといふのは、失禮かも知れず、又一寸變であるかも知れぬが、實際さう感じたのである。それから先生の演説を聞て居ると、先生はその力ある訥辯を以て僕の攻擊を始められた。先生の熱のある剛健なまた眞率な辯と態度とを以て演られるので、その勢は中々痛烈であつた。併し僕はそれを聞て非常に良い心持がした。先生の僕を攻擊せられたその主意は例の見當違であつたが、その調子その樣子態度、一言にして蔽へば先生の凡てに感服し、その愛嬌のある可愛らしい處に少なからず心を惹かれた。夏の暑い午後に夕立と雷とに遇つたやうな心持がしたのであつた。少し位着物が濡れても心持は非常に良くなつたのである。これ以來先生が好きになつた。書かれたものにはそれ程感服しなかつたが、その人にはチャームされたのであらう。筆は立派でも人間のいやな場合もあるが、先生に於ける僕の經驗は反對であつた。もつとも更らに良く先生に接したら如何な感を得るか、それは解からぬが、今の處では即ち夕立神鳴りの感である。

それから後先生の書かれたものでは、中央公論に出た「亨と聞多」などは至極面白いと思つた。丁酉倫理會で横井氏を揶揄はれた樣子も聞いたが、此れなども中々痛快であつたらしい。併し僕は矢張先生を以て政治の人とも文筆の人とも思はぬ、今でも教育家と思つて居る。誰れかゞ先生を以て京都帝國大學總長にしたいと言つたが、京大に限らず東京帝國大學に擬しても、先生は好個の總長であらうと思ふ。

△三宅雪嶺翁

田岡嶺雲

◎明治に於ける西洋數學即ち所謂洋算の草分は恐らく金澤、次ては德島であらう、吾等が幼年時代に於ける數學の著者は皆加賀の人てあつた。

◎此の如く加賀が早く數學家を出したのは、流石に百萬石の大藩、固より西洋の學問を採り入れる設備が早く整つてゐた故でもあらうが、又同地の人の頭腦が、諸他の地方に比し、緻密で明確てある事が、此て立證され得ると思ふ。

◎同じく早く數學の開けた德島の人も、四國中ては比較的緻密な頭腦を持つてゐる、吾等が中學校時代の數學の敎師は皆阿波の人てあつた、併し德島の人の數學の才は、其利害の打算に鋭敏な素質から來てゐるらしい、即ち德島の人は商人的に算勘に長けてゐるので、何事にも算盤の桁を外れ得ない傾がある、冷やかて而して小さい。

◎此に比べると金澤の人は、其頭腦の緻密が大用せられてゐる樣に思はれる、假りにいへば德島人のは實行方面に用ひられて、從て實用的世俗的てあるが、金澤人は重に之を思索的方面に用ひて、從て研究的の學者の出て居ることが多い樣だ、德島人の脚は決して地を離れぬが、金澤出身の士には漠として大きい、一種の仙骨を帶びたのを見ることが往々てある、但此は德島が南方的輕俊の氣風を禀け、金澤が北方的遲重の風氣に影響せられてゐる故もあらう。

◎然らば金澤人は世間離れがした迂濶な方かといふと強ち左樣ても無い、數學といふものが一面純思索て一面又實用に繫つてゐるが如く、金澤人は一寸見に迂濶な樣て其實常識に富んでゐる、漠然としてゐる樣て其實能く細かい所に氣がつく、鈍い樣て中々鋭い、不得要領な樣て大に要領を得てゐる、之を要するに金澤人は非凡な大きい處があつて、夫てゐて小廻りが利くといふ長處を有してゐる樣に想はれる。

◎雪嶺翁の如きも一方よりいへば哲學者てある、然し

超塵越俗的の哲學者では無い、其着眼は實際の世間を離れない、即ち其哲學的眼孔を以て世態人事を觀察し評論する一種の批評家たる所以であらうと思ふ。

◎其風采よりいふも、其性行よりいふも、雪嶺翁は天成の哲學者である、矯めず飾らず天眞其まゝに高き所がある、而して其深き洞察力と、强き記憶力とは、該博の學と卓邁の識見と相待ちて、十分に哲學者たるの資を具備してゐる、而し翁は研究的思索的の哲學者たることを以て滿足しない、毎に實世間の裡に其觀察を進めてあらゆる實際問題に手を觸るゝことを勉める、是れ翁が純然たる學究的態度を採らず、半哲學者半政論家として二十年一日の如く『日本人』誌上に筆を執て倦まざる所以であらう。

◎翁は如何なる集會にでも出席する、大學の文科學生の運動會にも往けば、非增租同盟の大會にも出る、紅葉館の宴會にも往けば、植物園に開かるゝ宴席へも出る、翁は決して高踏的出世間的の人でない、寧ろ進んで實世間の交渉を求める傾がある、翁は實世間のあらゆる物に趣味を感ずる、實世間のあらゆる物は皆翁が批評の對象となるのである。

◎神戸の櫻井一久氏も一種飄逸の奇人を以て目されてゐる人である、氏の性行風采酷だ雪嶺翁に肖てゐる、同じく金澤の人である、併し氏も亦此度代議士となつた處を見れば、決して世俗の煩累を厭離して自らを淸うせんとするが如き人でない事が譯る、一面高踏的のやうで一面世俗的の常識を缺かざる所に金澤人士の特徴があるといふことは此よりも推すことが出來るやうにおもふ。

◎雪嶺翁は學者である、達人である、夫て學者を氣取らない、達人を氣取らない、凡て人は誰も皆幾分の衒氣あるを免れない、翁には此衒氣といふ事が微塵もない、翁の渾身唯樸である、從て誠である、翁は渾然たる誠の權化である、翁の一行一動は皆翁の天眞より直に發露したる自然である、翁が世俗中に入つて而して世俗の汚す所とならざる其高き所は實に此に在りと信ずる、翁の人格の如きは今の世に於て最も有り難きも

のなりとおもふ。

◎嘗て政教社の畑山呂泣が死んだ時翁は病院より其柩を守つて徒歩して歸つたことがある、是も決して世間體の爲めてした事でもなく、氣取り氣があつてした事でもない、翁の上からいへば、自然のまゝに行つたのであらう、又或宴會の席で翁が姉崎嘲風君と議論の末に組打をした事がある此を見ても如何に翁に氣取るといふ氣味の微塵もない事が譯るとおもふ。

△雪嶺論

白雨生

◎雪嶺は文章家にあらず。世人現在の論文家を數ふれば必らず指を蘇峯、雪嶺、愛山、三叉、鐵崑崙等に屈す。然れども若し文章家として見れば雪嶺は中にあつて最下等の地位を占むるもの、彼の文動もすれば佶屈聱牙、殊に三宅流ともいふべき一種の型に箝り過ぎ、意に隨て文を成すにあらずして、却て往々文の爲めに意を作ることなきにあらざるの弊あり。予は雪嶺を文章家也とする世論には同ずる能はざるものなり。

◎雪嶺の文の癖を數ふれば「の」といふ助詞を無暗に多く用ふる事にして普通の人が「こと」と書くべき所に大抵此「の」の字を用ふ。例へば「見るの稀なれど」「聞くの常なれど」といふが如し。又「なからず」といふ言葉も好んで其の用ふる所たるに似たり。又氏の文の特徴といふべきは殆んど最大級及び絶對的の形容詞、副詞を用ひず、大抵制限的の形容詞、副詞を用ふること也。例へば「甚だ」「頗る」「極めて」「決して」「斷じて」等の言葉を避けて「稍々」「些か」「概して」「恐らく」等の言葉を選ぶが如し。加之氏は之等の制限的なる詞を用ひたる上、更らに「なし」又は「あり」「多し」等の正面の斷定的言語を避けて「なからん」「なきにあらず」「多からずとせず」等の裏を廻つた非斷定的言葉を用ふ。故に氏の文を讀んで「甚だ偉也」「斷じてなし」等の句に逢ふこと極めて稀にして、常に「稍々偉ならずとせず」「恐らくなからん」等の語句を見る。何となく鷹揚

にして悠々迫らざる趣はあれど形式上鋭利痛切の感を渉うするの憾あり。氏の文に痛快なるあり、或は豪宕なるあるは氏の意氣及び精神の蘊めども顯はるゝものにして、文章の形式は寧ろ痛快、豪宕などいふ内容にふさはしからぬもの也。

○雪嶺は思想家にあらず。予は未だ氏の近著「宇宙」を讀まず。或は此書に於て氏が初めて其思想家たる本領を發揮したるやも知るべからず。然れども氏の舊著「哲學涓滴」「我觀小景」の如きは必らずしも氏をして思想家として重きをなさしむるものにあらず。其思想所謂東洋的にして疎放濶達なる所に面白味はあるも深遠又は精緻等の研究に於ては缺くる所あるものに似たり。氏が十年又は百年の後明治の思想家として世に傳へらるゝが如き事は恐らくはなかるべきを思ふ。

○雪嶺は政論家に變らず。現代の日本は實に目まぐるしき程の急激なる變化をなしつゝあるもの也。殊に政治には秘密多くして局に當れるものにあらざれば容易に裏面の消息を知り難し。氏の如く超然たる人は決して事實問題の渦中に捲き込まれざる故、時として靜かに潮流の方向を知悉し得ることあれども、多くの場合に於て現今の時事問題なるものは自ら其渦中に跳り入るものにあらざれば其潮の行末をトし難き狀態にあり。されば氏の言時に時人の知らざることを喝破することなきにあらざれども、多くの場合に於て迂にして時事に切ならざるを見る。

○雪嶺は反動兒也。雪嶺の本領は反動兒也。歐化主義、ハイカラ主義の一世を風靡する時に當つて國粹主義、東洋主義、バンカラ主義を持し、常に極端に流れ易き風尙を支持するに盡し、忠告し、敎訓し警戒して成るべく中正の途を逸せざらしむるに勸む。氏は或意味に於て狹量ならざる代り熱烈ならざるカーライル也。ヒガミ根性ならざる代り痛切ならざる内村鑑三也。一代の人の好んで食はんとする所砂糖也とすれば氏の勸むる所はビツトル也、胃散也。氏の言、氏の想、時代の病を治する功能なしとせず、然れども天下の萬人悉く從て進むべきの道にはあらず。

○雪嶺は何處までも自己の立場を動かず。是れ氏の最も偉なる所也。氏の人格。氏の見識。氏の議論の價値皆此自己の立場を動かざるの一點より來る。氏は何處までも三宅雪嶺也。何人の前に出るも何事に遭遇するも依然として三宅雪嶺也。氏は恐らく天下に恐るゝものなからん。氏にとつては震天動地、驚神駭魄のことなし。氏は大山後に崩るゝも大海前に飜るもビクともする人にあらず、平靜なる態度を保て自己の立場を動かざる人也。世人皆一小些事あればワイ／＼と惶てふためく。之れが氏にとつて馬鹿／＼しくも思はれ、又哀にも感ぜらる。そこで氏は演說をなし又は文章を書いて、其痴愚を諭し、又は狂態を戒むる也。之れ氏の最も大なる使命にして予は此れ以外に氏の天職若くは價値を餘り認めざるもの也。一例をいへば日露戰役戰捷後青山の練兵場に於て大觀兵式の行はるゝや總ての新聞は皆畏れかしこみて「百萬の貔貅」云々とかいひて形式的文字を並べたり。然るに氏は獨り戰捷後の觀兵式として其規模の小なるをいひ、東京灣頭に於ける觀艦式に遙かに劣ることをいひたるが如き、又井上侯の重患に罹りしや總ての新聞皆ワイ／＼書き立てしを笑て「聞多と亨」を公けにせしが如き、皆時人熱に浮かされて氣附かざる處に一服の清涼劑を與ふるもの、予は氏の價値は氏が盃く時人と一步立場を異にせる所に立ち萬人常に動けども氏一人決して動かず、終始同じ位置より、終始移り動く時人の動作を批判し警醒する所に存するものと確信す。（完）

△三宅君について

文學博士　井上哲次郎

○生きて居る人の評論といふものは誠に仕にくいものですから、三宅君についても評論がましきことは一切[redacted]何か思ひついた事實丈けをお話致しませう。

○三宅君は學生の時に「老子論」といふものを作られた事がある。其當時の學生の手に成つたものゝ中では出

色のもので、今日の文壇に出しても決して讀まれぬといふものではないやうに思ふ。文章も思想もあの人はずつと昔から三宅流で一貫して居る人で、今日と雖も當時と比して激變はして居らぬやうに思ふ。

○三宅君は在學當時は身扮や何かは一向無頓着な風であつて、別に何といふ道樂もなく、勉强は隨分したやうである。只一つ三宅君の好きらしかつたのは繪を書くことで、餘程熱心にやつたものらしい。畫用紙の上に消護謨のゴミやら、紙のゴミやら一ぱいにためて書いて居た處が。不思議な事には其消護謨のゴミやら紙のゴミやらを吹き拂て見るとなか／＼立派な、趣のある畫が出來上つて居たといふ事である。

○確か明治十七八年頃でもあつたか。大學で編輯所といふものを設けて、東洋に關する纒つた書物を作らうとした事がある。其時に私は東洋哲學史を引受け、三宅君は佛敎史を引受けられた。其後三宅君は日本佛敎史とかいふ名で其一部分を出版されたが、妙な事には何でも神道の事が書いてあつて題目の佛敎の事は薩張り見えなかつたやうである。多分其れは緒論のやうなもので、未だ本題の方に入らぬのであつたらうと思ふ。私なども其時の原稿が未定稿として今に本箱の中に保存してあるのである。

○中村敬宇先生が座談で文章の事を論ぜられた事があるが、私はそれが氣に喰はないから漢文で寄中村敬宇翁書を書いて報知新聞に載せて其說を駁した。處が敬宇先生は答井上巽軒書といふ名文を時事新報に載せて予に答へられたが、當時三宅君も亦與井上巽軒書を明治日報に載せて予の說に質問の矢を放たれた。其文章によつて三宅君の漢文の力のあることが初めて世間に認められたやうである。以上三宅君と私の關係ある事のみをお話して御免を蒙つて置く。

△三宅雪嶺論

匿名氏

私が三宅雪嶺といふ人を初めて見た時には、先づ第

一に其訥辯に驚かされて、凡そ世の中に訥辯家も隨分あるが、此れ位訥辯な人は恐らくあるまい。氏は實に日本有數の訥辯家である。と感じた。之れが雪嶺に對する私の第一の感じ（ファストイムプレッション）であつた。其癖最初私等の見た時の雪嶺は一番六づかしい論理學の講義をやつて居たのである。一寸面白いぢやないか。論理學は學問中でも最も難解なるもの〻一つである。之れを講義するのは餘程の雄辯家でも困難である。其れを最も訥辯なる人が講義するのであるから其對照（コントラスト）が一寸面白い。當時氏の論理學を筆記したものは實は有名な分らないものとされて居た。だから最初は訥辯と共に文章に巧みな人とも思はなかつた。其れから同人の書いた『馬鹿趙高』といふ本を見たことがあつた。何を書いたものやら、尻穗も頭も判然しない奇天烈極まつたもので、どうも三宅といふ男の思想は分らないことも夥しいと思もつた。處が此先生が志賀重昂氏と共同して「日本人」を發行した。其誌上に於て屢々雪嶺の筆に成つた文章を讀んで初めて彼れの能文なるを知つた譯である。然し雪嶺といふ人は大學哲學科出身でもあり、最初論理學などやつたもの故、矢張り單純なる哲學家と思つたが、「日本人」などを見ると此人は單に書齋の哲學者を以て滿足せず、社會の活問題に注意し、多少の經世的眼識ある人たるを知つた。これが氏に對する第二の感じである。夫れから後に日刊新聞の「日本」に屢々論說を出し、終に陸實に代つて社說を擔當し、殆んど哲學者より新聞記者といふ位置に一轉して了つたので、益々先生が時事問題に對して興味を持つ人たるを信ずるやうになつた。又今一つ此人に對して不思議に感じたのは哲學科出身でありながら、又縱から見ても橫から見ても哲學家らしい人であるに拘らず、單に筆を以て論ずるばかりでなく、即ち批評家たる許りでなく、實際の仕事に關係する意志ある事を見た事である。其れは大同團結の起つた時に先生は其一人となつて實地の運動の役目をやつた。後藤が大同團結を踏臺として時の內閣に入りし時に、後藤の面前に於て其不都合を詰責した時などは其意氣込はすばらしいものであつた。其

以後餘程實際運動に懲りたと見えて政黨や何かに餘り關係しない。然し其頭から政治といふ事には興味を持ち又餘程研究したらしいと私は見て居る。然しながら政治といつても行政問題とか、豫算問題とかいふものにはまるで頭があるまい、が政治上の大體の方針、大局に關する問題になると、專門政治家に劣らぬ程の穩健な議論もあるやうだ。だから氏は根が哲學者であるが一般の哲學者の如くに思想が餘り偏屈な所のない人である。何だか漠然として人事世事については餘り通じてない風に見えて、而しなか／＼常識に富んだ所もある人である。要するに非常に沒要領な所もあるが、俗に云ふ物の分つた人と私は見て居る。以上は雪嶺に關する大體の觀察である。

此人の今日の立場といふものは所謂ジョーナリスト即ち記者であつて、絶えず時事問題を批評することを本職として居る人て、別に政黨に關係するとかいふ實際運動をやらうといふ考もなからうし、又やつた所で其方て勢力を得るに六つかしからうが、然し此人に最も偉とすべき處は元來哲學出身で學者肌の人であるに拘らず、學究先生を以て甘んずるといふ考がない事である。氏は學校の先生などを隱居と心得て居るらしい。京都大學から交渉があつたが夫れを斷る。依然「日本及日本人」を機關として批評的態度を繼續して居る。學者肌でこういふ風の人は一寸ない。珍とすべきである。

氏が何故かくの如くジョーナリストになつて居るかといふに氏はジョーナリストを以て非常に重大なる職責を有して居るものと考へてゐる。今日ジョーナリストといふものは多くは營業といふ方面から壓迫を受けぬものは極めて少い。例へば現今の新聞はどうであるか。從來は新聞を大新聞小新聞と區別されて、小新聞といふのは營業的新聞て、大新聞といふのは或一個の主張を以て立つものであるとされてゐたが、近來は大新聞と小新聞との區別がなく、殆んど皆營業的新聞と斷言しても過言ではあるまいと思はれる。處が三宅雪嶺に限て其頭には營業といふ考が少しもない。口ではなか／＼立派な事をいふ人が澤山あり、又實際營業の

爲めにのみやらぬ人も少くないだらうが、營業といふ事を全く考へない人は此人一人の外はない。そこで此人が筆を執るや、强ち多數の讀者を得やうとの考がなく、小數でも同趣味の人に讀まれると澤山だと考へてゐる。此人の考では天下を支配する主動者は少數の智者である。この少數の智者を支配するを得れば夫れで澤山である。大多數の人に讀まれても讀まれなくてもよろしいといふ考の人と見える。さういふ事は誰でもいひ得る事で、扨實行するとなるとなか／＼困難な事である。此困難に堪ゆる人は現今の記者社會では少ない。矢張り多く賣りたいといふ事が先きになつて筆を執る人が多い。又左もなくとも其新聞を營業的に經營して居る人の拘束を受けぬ人は少ない。然し此雪嶺といふ人は斷じて營業を目的としたる人の支配を受ける顧がない。其結果が「日本」と別離する事になつた。其れなら故陸實や德富猪一郎などのやうに自分で新聞事業を經營して往くことが出來るかといふに、さういふ事務的能力は無論持て居ない。矢張唯だ書くといふ側の人である。文章を書くと此先生よりも上手に書く人は世間にないでもなからう、又人の好き／＼で雪嶺の文章をよいといふ人もあり、わるいといふ人もあり、世評紛々たるが私の見る所では一種の特色があり又文品も高いと思ふが之に對する批評は茲にはいはぬ。但しちよつと言つて置きたいのは、雪嶺は文章に對しても無論重きを置く人と思ふ。現にあの人は言文一致などは決して書かぬ。又人に話をして、其話を書いたものに自分の名を署することを好まぬ。筆記をさせても、自分の書いたものと同じ様にあらはれてゐなければ好まぬといふ話もある。其樣な話を聞くと文章には餘程忠實であると思ふ。然し私は此人の文章論をする事は餘り好まぬ故に略する。

又此人は現今の所謂記者として他の記者の到底企て及ばざる處を一つ有てゐる。其れは何かといふに、詰り自分の本領とする處の哲學問題――此哲學といふものを非常に興味のある筆で何人にも分り易く說明して而かも通俗に流れぬやうに書く技量を持て居る事であ

る。哲學者の哲學論として讀まるゝのではなく記者の書いた哲學論として充分讀者に面白く讀まるゝやうに書きこなす力を持て居る。此手腕は所謂專門哲學者の間にも無論無いが、記者の間にも亦ない。國民に哲學思想を鼓吹するといふ事は必要の事である。哲學思想を持たぬと頭が淺薄になつていけぬ。之れは記者として國民の頭に吹き込む必要があると思ふ。之れは今の新聞社會に只一人の三宅雪嶺あるのみで他にはないと思ふ。殊に長い間「日本及日本人」で發表したる原生界と副世界とかいふ長文では哲學上嶄新なものもあり、そして誰れが讀んでも非常に面白いやうに書いたもので明治文壇の一大產物といふべきである。あゝいふものを新聞若くは雜誌で見るは例のない事である。それで三宅雪嶺といふ人は日本の記者仲間では獨得の地位を占めてゐる。これは褒めてもオベッカではない。元來三宅といふ人は哲學思想を土臺として頭をつくり、其れから政治なり、社會なりを見る人だから其着目する所は大抵高遠とか深遠とかいふ性質を持て居る。餘り區々たる些細な事に關せず、一國の興亡盛衰、時代思潮の變遷推移、或は政治の大局に亘つた觀察とかに對して最も精神を注いで居るやうに見える。どうも日本の現在の政治家、若くは所謂新聞記者などに缺乏して居るものは此哲學思想である。大抵現實の問題を現實に說く。殆んど明日を考へず、明月を考へず、明年も考へず、況んや十百年の後をやである。普通に記者といふものゝ仕事は其れが本當かも知れないが、然し雪嶺のような變つた記者が一人や二人位ゐあつても宜ろしい、どうも今日主義の議論ばかりていかん。矛盾あらうが撞着あらうが一向頓着せぬようてはいかん。見給へ旗幟變更は獨り進步黨ばかりでなく、何れの政黨も皆一定の主義主張はないやうである。こういふ世の中には三宅雪嶺の如くあまり現在の利害には齷齪せず、將來に亘つて眞面目に考ふる人があつても欲しと思ふ。否な無くてはならぬと思ふ。三宅の意見がどの位人心に入つて居るか私は知らぬ。知らぬがあゝいふ意見も必要と思ふ。こういふ人があつて幾らか人心

を矯正する功能があると思ふ。

　又此三宅といふ人は大變人物に注意する人である。それて人物に對する趣味も持て居る。此人の崇拜する極く好きな人物は西郷隆盛であるらしい、何か書くと西郷がよく引合に出る。西郷が死せずして實は西比利亞に行つたのでやがて日本へ戻るといふ噂のあつた時、誰も信ずるものがなかつたが、此人は眞面目に信じてお迎へに行かうと思ひ立つた程西郷の信者であつた。西郷が生きて居たら日本の形勢が一變するだらうと思てゐたらしい。そんなに常識に缺けた事をするのかと思はるゝ程西郷熱のある人である。又先生もどこか漠然として思想の廣い處、物事にこせつかぬ處、頓着せざる所、眞面目で篤實な所、西郷流の豪傑の型をいくらか持てゐるやうに見える。けれども他の人に對しても人物の觀察は案外公平な人である。世の中には自分の好きな人は無暗に褒め、嫌ひな人は無暗に惡くいふ人があるが先生には其れがない。公平に批評する人で、何處となく大きく忌味がなく、時々皮肉をいふ事もあるが讀む人に餘り嫌やな感じを與へないのは此人の得と私は思ふ。

　一體記者といふ位置は人格によつて高くも又低くもなる。外の政治家や何かでもさうであらうが、其れには位もあり、爵もあり、勳章もあつて外面から位地の高低を表はして居る事が多い。記者はさうではない、つまらぬものがやればいかにもつまらぬものだ。所謂新聞屋などいはれて居るものはそれだ。が人格の高い人物がやれば無官の宰相である。此三宅といふ人は前に述べたやうに記者といふものを非常に高い位置のものと信じて居り、又此人は實際高い記者である。全く彼の人格による事と思ふ。

　凡そ宇宙の森羅萬象及び人間といふものは一つは皆書かれる爲に存在して居るものだ。皆書くべき印象を與ふるものである。之を書くものを記者といふ。記者の眼から見れば太陽を書くも月や星を書くも犬猫を書くも、いろ〳〵の花を書くも、蚯蚓の如き昆虫を書くも、大政治家、大豪傑を書くも或は乞食、掏兒、敗傷

師を書くも是れ皆平等のものである。記者の眼より見れば書く目的物としては皆平等なものである。そこで此點より見れば記者といふ者は人間界は無論の事、宇宙界に於ても超然として高き地歩を占め、超然として總ての物を書くといふ高い思想がなくてはならぬ。所が今の新聞記者などいふものは書く目的物によつて筆を幾様にも使ふ。或は時代に媚びて心にもない事を書き、或は時の勢力家の爲めに奴隷となり、或は利益の爲めに節操を賣り、一向に感心すべき事がない。三宅といふ人は之に反して高い位置から平等に觀察して平等に批判する見識がある。故に總理大臣を書くにも一匹夫を書くにも大いなる區別を置かず、時として大宰相を見る一小兒の如き事がある。此點は記者とし尊敬すべき所と思ふ。

惡口をいへば惡口もない譯てはないが、先づ先生のエライ方面の事をザッとお話して置く。(完)

佐藤信淵翁

新渡戸稲造

佐藤信淵翁の著述は大概一通りは拜見しましたし、殊に十四五年以前でございましたが、或外國の學者の需に應じまして、日本の古い經濟學者の經濟說を書いてはどうだと云ふことでございまして、私はまだ北海道に職を奉じて居る頃でございましたが、成程面白い考である、日本ては今日は言ふ迄もなく立派な大家が大勢居らるゝけれども、概して言ふとまづ西洋の學者の眞似をして居ると云ふのが多い。是は經濟學について言ふので、他の學問は兎に角に、殊に此經濟學は西洋の書物に依て論ぜられて居るやうに思はれる。此時に日本でも苟も國を成した以上は、國經濟及社會經濟といふことに就ては、此の如く考へた人があると云ふことを世に示して、即ち世界に發表するのは、是は面白い事であらうと思ひまして、出來るならやつて見やうと云ふ假受合をして、さうして誰々を書かうと謂つ

て考へて見ました所が、第一に頭に浮んだのは佐藤信淵翁である。それから學説といふ事はどうか知れませぬけれども、例へば二宮尊德翁の如き、又熊澤蕃山の如き、或は太宰春臺の如き、荻生徂來の如き、何でも六人といふ考でありましたけれども、五人か六人此人達はどうであらうと云ふことを考へまして、それで實は調べ始めたのである。デ第一に略々脱稿しましたのは佐藤信淵翁の事である、成べく此事を世界に發表するには日本では斯うだと云ふばかりでは面白くない、西洋では今更珍しさうに言つて居るが、斯う言ふ事も信淵翁がやつて居つた、主張して居つたと云ふ自慢話もしたい。其には西洋の事ももつと調べなくてはならぬと思つて、能く西洋の説を土臺として日本の事を例に引くのはあるが、其の反對に日本の學説を土臺として西洋の例を之に加へて見たらば、一層面白くなりはしないかと云ふ妙な野心を起してから又少し逆にして信淵翁の學説は斯々であるが、近頃西洋で言つて居るのが是ぢやないかと云ふことをする積りで、西洋の書物を參考にしようと思つていろ〳〵やつて居ります中に、一箇人の事を大勢の前でお話する必要もございませぬが、神經衰弱とか云ふ病氣に罹つて、一時は大分惡いが爲に職務を辭し、三年間唯遊んで居つた次第でありまして、其の病氣になる際でございましたから、草稿は其儘にして今日もまだ箱の中に入れて居るやうな事、偖其時です、聊か信淵翁の農政及全體の經濟に關することを窺つたのである。其節に私が、どうして斯う云ふ考を此時代に得られたてあらう、外國の書物を讀まれたのであらうか、和蘭人から何か西洋の説を聽かれたのであらうかと思ふやうに驚くべき事が――當時日本の學者には期待しなかつた説が澤山あつたやうに私は思ふのでございます。そこで殊に面白いと思つたことは、――これは諸君の方が却て御承知でもございませうが、――小さな書物で、獨り佐藤信淵翁のみではなく佐藤家の一家の學説であると云ふことであるが私の讀んで如何にも感心して――佐藤家の學説だと云ふので一層感服致しましたのは、彼の垂統秘錄とか云

ふ小さな書物。是は殆ど今言ふたならば國家社會主義とでも言ふか、それとも講壇社會主義とでも言ふか、何しろ餘程進んだる考であつて、其時であつたならば先づ王道主義とでも謂ふやうなものであらうと思つて讀みました。病院を拵へる事でも、幼稚園を拵へるやうなとでも或は廢兵院のやうな事でも、言葉こそ違つて居れ、又其の設備に於ては今日のやうに澤山擧げてはございませぬけれども、兎に角に今日の文明の機關、殊に慈善の機關、及社會政策の機關が殆ど悉く其中に擧げてある。小さな書物であるけれども能くも斯う云ふとに考が付かれたものであると云ふことを、大に感服したことがあつた。又先生が今の垂徒秘錄に書いてあるやうな、非常に時代より進んだことを言はれたことは、海防論の如きを見ても同じくさう云ふ感を起すのである。農政本論に於ては左程えらく進んだと云ふやうにも思ひませぬでしたけれども、何しろ先生の農政本論に書いてある説の如きは、時勢が時勢であつたてもあらうが、其の論じて居ることの廣きことに於ては、其前に既に唐本で農政全書といふものがあるから、あれに基かれたのであらうかと思ふやうに、範圍の廣いことに於きましても、今から見たならば或は專門外れて甚だ雜駁な書物である、或は雜駁な説であると云つて笑ふ人もあるかも知れませぬが、私は一口に言ふたならば、先生の專門的の智識は、啻に或る狹い問題、今言ふと專門的に研究しないで、大きな割出しからして細かい問題に及んで行つたと云ふことを實に感服するのです。それと同時に大きな法螺じみた事を言ふのが根底がないかと云ふと、頗る細かい所から積上げて行つた如き感を起す。殊に此事に就て私は或理由の爲に土性辨といふ書物を殊更に氣を附けて讀まねばならぬ事があつて、其節に先生の學問は、經濟論とか物價論とか、或は垂徒秘錄とか、或は農政本論とか云ふものを讀んで居ると、法螺じみた事も澤山あるが、えらい細かい處から議論の根底を作つたと思つて感服したことは、他でもないのですが、北海道に泥炭地といふ者がある、ごく惡い土地である。此泥炭地を改良する工

夫がなからうかと云ふことを、其筋の人から頼まれて調査したことがある。其節やはり今風に――先刻ちよつと惡口じみて申上げましたが、まづ西洋の書物を參考にしようと云ふので、恰度獨逸の北方には泥炭地が多いからして、獨逸では政府で試驗所を設けて泥炭の改良に從事して居るから、いろ〳〵の參考にならうと思つて豫て私の求めて居つた泥炭地改良に關する書類を段々開けて調べて見ると、それは恰度十二三年前の事でしたが、獨逸で實行して居る方法は、レンパウ法といふのが一番宜いと云ふのであつた。尤も十二年以來大分其法が違ひましたから、今はレンパウ法は用ゐられて居らぬと云ふことを聞きましたが、十二年前にはまづレンパウ法と云ふのを以て最良の成績を擧げたと云ふ。レンパウとは何かと云ふと、レンパウといふ人がある、此人の發明に係る。それはどうかと云ふと泥炭地と云へば水がジヨブ〳〵、始終濕氣のある土地です、富士の吉原邊などに浮島などゝ云ふ、あれは泥炭地の一つ。第一に排水して水を拔くと土地がずつと低くなつてしまふ。恰度今申上げました富士の裾野の方々にある吉原近所の浮島の如きは、水を取つてしまふとずつと土地が減つてしまふ。排水をしないと土が浮んで居る、浮島と云ふやうに――甚だしは私も態々行つて見たことがございましたが、畑があると、此畑が浮いて居るのであるから、少し雨でも降ると斯う流れてしまふことがある。それで是も實際見たことでしたが、直ぐ傍に大きな松の樹があると、松の樹に畑を繋いである、杭を挿して、繩を付けてからに松の樹に結へてある。さうでないと水が出る、畑がずつと流れてしまふ。斯う云ふのは、泥炭地でも餘程性の惡い泥炭地と謂はなければならぬ。で斯う云ふ泥炭は何處の國でもあるやうです、三十五度以北の國なら何處にてもあると云ふことだが、北海道には大層多い。此泥炭地の改良をしなければ、折角北海道へ移住に來た人も土地がそろ〳〵少くなると云ふので、泥炭改良法は北海道殖民政策上必要な問題であると云ふのでやり出した。當其時に――話が大變順序は狂ひますけれども、

獨逸のレンパウ法を見て、是は面白い法ぢや、併し念の爲に佐藤信淵翁の土性辨といふ書物がある、あれにも先生いろ〳〵な事を書いてあるから、泥炭の事もありはしないかと思つて開けて見ると、泥炭といふ文字はない――尤もあの書物は今日の地質學者と土壤學者が見たらば笑ふとが澤山あるでせう、土地の膏味がどうだとか、味はどうだとか云ふ、今日の學術話に聽かないやうな言葉も大分ある。けれども私の實に感心したとは、やはり泥炭の排水法は無論のこと排水などで驚くにも足らぬ、そればかりぢやない、排水をやつた後で壓沈法を行ふといふ事が書いてある、壓沈法とは何だ、是こそ和蘭の法かと思ふとさうでない、壓つける、壓つけて沈めると云ふ、即ち壓沈法を行へとある壓沈法とは何だらうと思つて說明を段々見ると、獨逸專有の法である、レンパウの是は大發明であると吹聽した所の、レンパウの方法とは違はぬのである。やはり同じく排水した時に、其上に砂を五寸か六寸位撒けば泥炭地といふものは用ゐることが出來ると云ふ。實に簡單にして、獨逸の書物を讀んだ時分には前置が澤山あつて、餘程えらいもの丶やうに、レンパウといふ人は神様であらうか、神様といふものは日本の國ばかしかないと思つた所が、獨逸にも神様があるかと驚いて見て居つたが、佐藤信淵翁の書物には、僅か半枚か一枚の中にちやんと壓沈法で要領を得たことが書いてある、而も自分が試したやうに書いてあるに至つて、是はえらい爺さんであると云ふことを知つた。

又特に私の感服したことを一言で言へば、先生は何事に付けても實地といふ方を離れないで、如何に空論じみたことが有つても、唯紙の上で空論したと思はれないのである、事實に依て確かなる智識、及び調査をして固めて、其議論を立て丶、其議論を段々それからそれと積んで行つて、遂には日本全國の安全に關係する國防論の如き、又もう一歩進んでは唯日本國のみならず、理想の社會と云ふものは此の如きものであると云ふことを垂徒記に述べた所などは、其着眼の仕方が學者として實に活きて居る。世の中で農學者など丶云ふと、初

からごくぼんやりして世間の事は一向分らぬやうに思ふがさうではない、さう云ふ學者も澤山あるけれども佐藤信淵翁の如きは割出しが非常に大きな、偉大な處から割出しをして、高尚なる思想をば實際に行ふと云ふには、一方には小さな研究をば段々積上げて、以て國の用に供しようと云ふ、即ち低きことも高きことも要するに人類及國家の爲に利用しようといふ、其考が悉く現れて居るやうに思ふのであつて、此處が私は實に敬服する所である。唯學問に耽つて、斯う云事を知つて居る、世間の知らぬ事を乃公が研究して居る位のことではない、悉く學術をば利用しよう、一には國の爲に利用しよう、一には人類の爲に利用しようと云ふ精神がある。或は私の讀違ひかも知れませぬけれ共私の拙い眼に映じたのは、先生の學問をするに付ての着眼は其處にあると思つた。お話したいと思ふことは實はもう少しあるが併し聊か自分が直接關係した、一二の例で、先生の着眼が何れの點にあつたか、又吾々が先生の書物を讀むにつけて先生から學ぶき點は何であらうかと云ふ其の學ぶべき點の多い中の唯一端を、自分の感じたことに依て申述べるに過ぎないのでございます。



清國の情勢に對する世論

兩宮の崩殂によつて今后支那が如何なる情勢を呈すべきかは未定の問題にして如何なる人と雖も明言し得るものあらず。然れども外は外國干渉の事實に懲り、又內は內亂蜂起の恐怖に充てる官民は、此際互に事端を發せざることを勉め、遂に大事に至らずして來るべき憲改施行の準備に取かゝるべしといふが一般の世論なるが如し。然れども兩宮崩殂の當時は一時非常の混亂を來せしものと見え、北京にありて現狀を目擊せし石川半山氏の「報知」に揭げたる「恐慌せる北京」といふ文に

「蜚語風說大に起る」

第一説に曰く、先般來革命黨の計畫は着々効を奏し、巧みに宮中迄も入り込んで居た、曩にダライラマの入京せし時、端郡王の配下の有力なる人物て、ラマの部下に身を窶して、窃かに宮中に忍び入つた連中が、玆に大活動を始めたのだ、皇帝と西太后の崩御は、其初幕て、佛國革命以上の慘劇は、之れから起るのだ。

第二説に曰く、西太后が先般來熱病て苦んで居た、太后が病氣危篤と見て取つた一派は、太后の歿後皇帝の勢力の回復を恐るゝ所から、之を殺した者て有る、隠れて西太后の歿後は皇帝は生命がないとは、宮廷に出入する者の均しく唱へた所て有る。

第三説に曰く、皇帝は至て健全て、去十月中旬には動物園へ臨幸せられた位て、日本の伊集院公使が十月謁見した時の如きも皇帝も西太后も例の如くピン〳〵して居られたのて有る、又鍋島、細川兩侯の一行の如きも、入日に謁見と定まり、それが皇帝の病氣の爲めに延期とはなつたが、兎に角一且入日と定つた位だから、今月の初迄は、何とも無かつた者に違ひない、故に皇帝と西太后の死は益々怪しい。

第四説に曰く、西太后は熱病に際して渇を醫せんが爲めに西瓜を喰ひ過ぎて、下痢が起されたとの説も有るが、十三日の午後其の侍醫を叱咤し『汝は我を毒殺したな』と絶叫され又大に怒り鞭を揚げて彼れを亂打されたさうだ。

第五説に曰く、南方の革命軍は、此機會を以て大雄飛を試み、遂に南北の大戰爭は開始さるゝて有らう。

第六説に曰く、義和團以來稀れに見る排外熱は、今や沸騰點に達した特に不景氣は細民を驅て匪徒の群に投ぜしむるの傾向が有るから、今後如何なる珍事を生ずるかも分らない。

第七説に曰く、慶親王は地方の御陵參拜の爲めに旅行して居られたのて、其の不在中に事を擧げたのだ。今朝から又大臣の一人が殺されたと云ふ揣言が行はれ、それは袁世凱て殺されたのではない、毒を仰て死んだのだと云ひ或は侍醫が自殺したとか、或は宮中の大官中自殺した者が有るとか、種々の風説蜚語が飛んで居る。

と報ぜり。而して「國民」の門外漢氏は其「東京だより」に於て

◎淸國の現狀に就ては、否な北京朝廷の現狀に就ては、訛傳百出、市に三虎を出だすのみならず、三百虎を出さんとする景況也。

◎吾人は須らく冷靜、沈重の態度を持し、徐ろに事實の眞相を看取せざる可らず候。若し訛を以て、訛を傳へ、虛を以て、虛を傳へは、吾人も併て淸國時局紛亂の責任を頒たざる可らず、是豈に本志なりと云んや。

◎過去をして、過去を葬らしめよ。兩宮が如何にして、崩殂せられたる乎。そは吾人の關心する所にあらず。關心す可きは、現在及び將來の問題也。吾人は或者の言の如く、卽今に動亂の發生す可き理由を認むる能はず。若し常識にして據る可しとせば、寧ろ其の反對ならむ。卽ち現狀維持是れ也。

◎所謂る革命黨は、此の場合に乘して、一狂言目論見るやも、未だ知る可らず。されど彼等は今日に於て、長髮賊丈の仕事は、とても出來ぬ也。そは不十分ながらも、淸國の統制は、行き届き居りて、蜘賊、一揆の兇焰を逞ふす可き、餘地は殆んど是無し。

◎且夫れ廣く四百餘洲を見渡すに、總督、巡撫等の地方大官連中にて矛を逆まにして、北京に向ふ者とては、一人も是れあらず。さりとて北京の諸親王、諸大官連中には、滿黨もあり、漢黨もあり、袁黨もあ

り、張黨もありとするも。此際互ひに喧嘩をするは、互ひの損たる事、以心傳心に、承知し居る次第なれば。其の爭鬪の結果、大破裂を眼前に來すが如きは、利害の打算に精細なる、彼等に於て、見るべしとも不思候。

◉若し此際一二の外國が、此の變局を奇貨として、或る黨派を教唆し、一山張らんとする者あらば、或は慾に目のなき連中に於ては、之に與みする者も、是れなしとは限られず候得共。今日の列强は、何れも其手が一杯に相成り。此上さる惡戯を事とするが如きは、到底思ひも寄らぬ次第と存候。

◉此の如く列强の態度も、唯だ淸國に對しては、事なかれの一天張りなるに於て。否な出來得可くんば、列强其力を戮せて、淸國の現狀を維持せんとする今日に於て。西太后の一去の爲めに、淸國動亂の機、破裂したり抔と云ふは、大早計も甚だしと存候。◉特に我が帝國の如きは、淸國の不幸に同情を表し、何處迄も其の現狀維持に助力す可きは、友隣たるの第一の義務に候。而して萬一の場合にも、列强步武を調へ、其の秩序の恢復を努む可きが、當然の義に候。

極力現狀維持を希望し主張し、「時事」は又「淸廷の協力一致」に於て、今日事なく治まり相なるは目出度き事なれども他日氣弛めば事を生ぜるやを掛念し、

溥儀殿下を光緒帝の繼嗣と爲すは西太后の以前より決心せられたる所の如くなれば太后御存命の間ならんには此問題の決定敢て難からざりしなる可しと雖も今度の如く淸帝崩御の翌日を以て太后も亦其後を追はれたる場合、繼嗣の問題困難を來さんこと寧ろ自然の成行なりしに然るに事實は正しく其反對に出て溥儀殿下の大統繼承に由り失望の境遇に陷りたる如く想像せらる〻慶親王並に袁世凱等も其行動に何等の異狀なく他の王大臣と協力一致して誠意誠心事に當りつ〻あるは從來の行掛りより見れば先づ案外のことにして是等の人々が私情を棄てゝ公事に殉はんとする其動作の立派なる流石は國の柱石たる身分に耻かざるものと云ふ可く貴重の態度なから實實を害まさる所なれども擧て斯くも立派なる動作の基づく所いづれに在るやを聊か立入りて觀察するに皇位繼承に就て故西太后の御意に背くは臣下の分として忍びざる所、況して此問題の爲め諒闇の間に部內の黨爭を起すは憚多き次第なれば一旦繼承者の決定したる上は飽くまでも之を奉戴して忠節を盡さゞる可からずと云ふ公明正大なる心事こそ重なる原因ならんなれども其一方に兩宮崩殂せられて人心或は動搖を來さんとする場合、之を機會として諸外國の間に一種の竊心を懷くものなしとす可からず即ち外國の竊心こそ此際最も警戒す可きものなれば何は兎もあれ一切鬩牆の爭を休めにして內部の結合を固くし外來の憂患に備ふること肝要なりとて只管協力一致を勉めたるの痕跡なきに非ざる可し最も能く彼事情に通ずる向にても目下淸國當局者の外國に對する神經頗る過敏と爲れるを認むるもの〻如くなれば此一事が今度の如き好成績を呈したる一原因たるや疑ふ可からず是に依りて見るときは彼王大臣等は現在こそ協力一致に餘念なしとするも今後やがて三五箇月を經過する內に外患に對するの掛念は單に一時の疑心暗鬼たりしことを悟り其邊の掛念を一掃せんはに俗に所謂喉元過ぎて熱さを忘れ大に心を緩むるの結果、或は徐々內端喧嘩の支度に取掛るやも知る可からず斯くては當初一致に憂慮せられたる點に逆戾するものにして其影響する所淸國へ[illegible]たらんこと言を待たず固より一旦皇位の決定したる上は之に對して兎角の陰謀ある可しとも思はれず又今日の所、政府の進步的政策に向て反動的守舊的運動を生ずるの憂はなかる可しと雖も此場合に恐る可きは王大臣間の權力爭の爲め協力一致を破るの一事に在り唯是れは萬一を想像したる掛念に外ならざれども現在の當局者は豫め其邊の注意を細かにして將來永遠に今日の心を失はず始ありて終あるの覺悟肝要にして我輩が大體上淸國の前途を樂觀するにも拘はらず尙ほ今日より一片の老婆心を開陳するの止み難き所以なり。

と戒めたり。然れども大體に於ては樂觀說多きを占め、來るべき憲政施行問題こそ淸國に取て最も重大なるものなれと見ること我社論と大差なきが如し。

（星　雲　子）

我が讀書界にトルストイ翁の名を知らざるものヨモヤ無かるべきも翁が一代の大著復活を讀まざるもの猶或は有るべし十九世紀の文明の一大批評たる此一大傑作を見ずして現代思潮を論ずるは富岳の高きに登らずして山の美を說くに等しからん

現代思想界の無冠之帝王



トルストイの大作

復活 前編

内田魯庵譯

正價金壹圓五十錢
郵稅金十八錢

日本未だ現代的なる世界的大作の繙譯あるを見ず、之あるは實に此復活を以て權輿とす

東京、大阪、京都

丸善株式會社

郵便振替貯金口座 東京五番 大阪七四番 京都九八九〇番

之偉觀

之光彩

明治四十二年一月一日發行

首相桂侯論（無名氏、局外人、匿名氏、三宅博士、建部博士、黑頭巾氏、田川氏、池邊氏、柏軒氏、其他政治家諸氏）

小說欄

耽溺　小栗風葉氏

強者　正宗白鳥氏

四十女　德田秋聲氏

田舍道　田山花袋氏

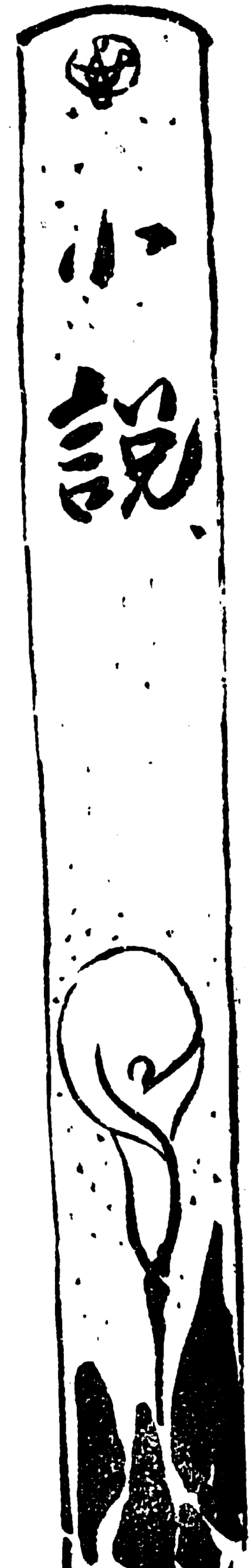
埋立地　眞山青果氏

一夜　島崎藤村氏

本號世に出づるの日如何に讀書界を騷がすかを見よ

中央公論新年號


四季の引風
のぼせ一切
せきに効あり
定價壹貼金五錢
六貼入金廿五錢
十二貼入金五十錢
守田家方
妙振り出し
御求の際は
守田の妙振り出しと
御指名を請ふ
東京上野池之端仲町
寶丹本舗 守田治兵衛



崖

眞山青果

第一

二人の友、右田と關とは久し振りて遇つた。右田が昨夜の酒に疲れて、二度寢の朝晩き枕元へ、關はおゆきと云ふ女中に案內されて入つて來た。明方の寒さに箱根を越えて、十時間の長旅を夜行の汽車に搖られて來たのだ。彼の鄕里は三河國てる。

「とう〳〵出て來たね、怺え切れなくなつたらう。」

右田は白金巾の襟のかゝつた厚い二枚蒲團の中から、寢ぼとりの首だけ擡げた。

「二度も踏出したんだが、追手がかゝつて駄目だつた。」と焦茶の鳥打帽と共にモスリンの風呂敷包を抱えて突立つて居た。六疊の部屋の眞中に長々と寢床を敷いてある。脫棄の着物やら足袋やら毛裏の襯衣やら、其邊中に亂ばつて居た。財布と卷煙草の袋は机の上に載つて居た。

「風呂敷包みだな。」

「あゝまた風呂敷包みだ。」關は蒼黑く見えるほど胎毛の深い顏に笑つた。包を籐製のソファの上に置いた。眉毛だけを書くと、似顏になると云はれる程の太いいかつい眉毛である。唇だけが眞赤であつた。帽子を持つて、未だ立つて居る。

「どれ起きやう。」と跳返すやうに威勢好く蒲團の上に起き直つた。兩肌を脱いでスッポリと頭からシャツを被る。

「僕は直ぐその後へ入れて寢かして貰はう。二時間ばかり。」

「不可ん、不可ん。座敷を掃除さして、一緒に飯にしやう、未だ朝飯前だらう。」と床の上に立つて、冷たい着物に兵古帶を結んだ。

「朝飯も何んだが、僕は昨夜些つとも睡らないんだ。」

「寢るのは何時でも寢られるよ。」

楊子は客用の竹楊子を、ライオンの紙袋に添えて女中が下から持つて來た。二人は笑ひ話りながら梯子を下りて、長い廊下を二度廻つて、叩土の洗面所に顏を洗つた。

「顏の色が大層好くなつたぜ。」右田は大きな姿見の前に薄い髮の毛を丹精して梳けて居る。荒い櫛を遣ふと、頭の地が透いて見えた。

「寢ずに來たから逆せて居るやうだ。」

「然うかな、然うばかりぢやないよ。幾らか肥つたやうだ。」

それには答へず關は、「時に君の『家』ね、あれは面白いね。怖れ乍ら讀んで居る。後が未だ餘程續くのかね、」と手拭の上から大きな沈んだ目だけを見せて此方を向いた。五分苅のやゝ伸びた髮の毛から湯氣がスウと發つた。

「あれは云はない事だ。自分でも持て餘して居るんだ。最う書く氣はない。」

「好かつたがなア。僕ア面白かつたよ。」

二人はそこに立ちながら、作品の話に移つた。誰の何は何うだとか、誰の何は斯うだとか、兩方の思ふところを遠慮なくさらけ出して言つた。何れも今の時代に評判のある作品だけを擧げた。

然し關には關の見やうがあつた。奪ひがたき底の力を持つて居た。昨年までの關に對ふやうに一言にして打挫くやうな暴な態度は右田にも最う取れさうが無かつた。關も變つて來たと右田は心に思つた。

「兎に角大にやるんだね、僕も今年はスッカリ怠けて了つた。この春から旅屋飯を食べ通しだ。一つ大に鎮靜して書いて見やうと思つて居る。」と右田は話に終をつけた。

「相互に踏み出したばかりだものね。」

「然うだとも。相互に大に書かうよ。」

「然うね。」と關は張合なく云つた。

掃除が出來たと女中が知らして來たので、話を切つて二人は座敷へ戻つた。關は黒く光る廊下を素足に踏んだ。

第二

障子は一杯に開擴げられて、明るい秋の朝日は圖の中まで射込んで居た。長火鉢の鐵瓶からは白い湯氣がホツ／＼と立つて、坐蒲團が二枚對向いに敷いてあつた。

手紙が四五通來て居た。大抵は仕事の催促狀てあつた。中に一通、森田と書いた端書があつた。右田は舌打しながら讀んだ。

「何んだね。」足を横にして新聞を拾讀して居た關が尋ねた。

「何んなもんか、借錢の催促さ、去年居た大家に屋賃の滯りよ。煩さい老爺でね、少し許りの事を始終云つて來やがる。厭がらせに何時も端書なんだ。」

「然うかね。」と又新聞を取つた。强い朝晴の光を照返して、新聞紙は寢不足の瞼に涙を滲ませた。

今の所、到底返却の見込なし、御自由になさるべく候と、此方からも棄鉢な文句を端書へ筆太に書いた。それを火鉢の隅に置く。默つて居ても女中がそれを下げて出す事になつて居る。

「あ、然うだ、君の注文物があつた。」

持つて來た風呂敷包みは、途中の停車場で求めた鮎の押鮨であつた。箱を三つ重ねて出した。外には雜記帳らしいのが二三册と、自用の原稿用紙、鷲印百四十號の鉛筆が四五本、それと新らしい紺足袋が一足あつた。關が居處の變はるたびに必ず持つて廻る風呂敷包みはこれてあつた。足先が寒いとて足袋は汽車の中から脫いで來たのだ。

「去年歸る時も買つて送らうと思つたが、夜中ぢやあつたし、それに鹽漬の鮎ださうだから止めて了つたんだよ。尤も手紙には鮨が無いと書いて寄來した筈だがね。」と一つの蓋を取つた。蒼々しい蒲の葉に敷かれて、潔よき魚の形は描いたやうに見えた。

「僕はもう今年はこれを喰飽きちやつた。旅行するたびなんだもの‥‥然し山北のは初めてだから喰べて見やう。」と指の先を汚してその中のなるたけ小さい一つを摘んだ。寢起の口には飯が乾いて居て味は無つた。

關も一つ喰べた。

朝飯の給仕をすまして、女中は二人の前に番茶の焙じたのを注いで引退つた。關は蟲齒が痛むと云つて、顏を顰めて小楊子をせゝつて居た。奥齒がポロ／＼缺落ちるのださうだ。

二人寢轉べば話は又何うしても作品の事になる。關は右田の文章のメキ／＼巧みになつた事を賞め、右田は又關が近頃の努力、魂て書くと云つて居た人が筆で書くやうになつた努力を云つた。相互に激しい心の熱を抑へるやうな口振りで、話の間に自分等にも心付く境を置いて喋つた。然し、これだけでは兩方とも物足りないやうな氣がした。

「然し、君が然うしてセッセと書くのを見て、先生は笑つてたよ。關の奴、偉さうな事を云つて居やがつたが、自分の飯を喰つて見りや然うばかりも云つて居られまいッて。」と笑ふやうな目遣て、友達の方を見た。

「そりや當り前さ、喰はずにや誰だつて居られないもの。」とこれも聲を上げて笑つた。
「君の去年あたりの氣焰ぢや、喰はなくとも好さゝうだッたぜ。」
「そんな事はないよ。僕だッて書きたいのさ。書きたいけど書けなかつたのさ、然うさ、何があるもんか。」
所へ、ある雜誌の訪問記者が來た。芝居か何かに就いての意見を取りに來たのだ。三度も續けて來たが何時も留守、大分御盛んだと見へますと、その記者の青年が笑つた。
「近頃はね……何うも矢張り不可ません。」と右田は天井を見て笑つた。
關が、失敬して、僕は二時間ばかり寢やうと云ふのを、直ぐ一所に先生へ行くからと待たせて置いて、右田は問はれるだけの談話を手短かく話した。手帖を出して記者はその大要だけを書留めた。その間、關は新聞を見たり、机の上のガンチャロフの小說を拈つたり、絕えず落付かなかつた。クハアくと喉の底から出る生欠伸を洩して居た。
話終つて後、「然うく、忘れて居た、これが關君です。」と雜誌記者を紹介はせた。
「僕關です。」と急に勢を直して挨拶した。
「どれ見せ給へ。」とその書取つた手帖を右田が讀む間、關と記者との間に色々の話が取交された。矢張り文學の話を出ない。
記者は豫々關の天分を敬ふ一人であつた。來月號の雜誌に何か十五枚ぐらゐな短篇を一つと依賴して

歸つた。お宿はと聞かれて、何しろ今朝着いたばかりで未だ決りません、決り次第に御通知しませうと云ふ約束であつた。

第三

晝過ぎから早稻田の裏に先生を尋ねた。右田は先生を驚かしてやらうと、今朝着いたばかりの、新調の縞市樂の着物に鐵無地の羽織を着た。「何うだ見て呉れ、似合ふだらう、嬉しくて爲樣がない。」と小兒のやうに肩ムツ／＼させて笑つた。

「相變らず恍けて居るね。」と關も指示して笑つた。

カラリと晴れ上つて、歩くと額際に汗を持つ日であつた。樫のステッキを打揮りながら、景氣付いて話し乍ら行く右田と並んで、關も劣らず話を興ませて歩いた、昨夜の醉が殘つて居るとて、途中の洋食屋へ入つて、サイダアを拔かせた。取つた果物には手を付けなかつた。

先生は家に居た。來客中で、玄關には塵埃まびれのズックの半靴があつた。先生は紺絣の布子に同じ綿入羽織をムク／＼と着膨れて、「丁度好い處に來てくれた。僕一人で閉口して居る處だ。ズッと書齋へ通つてくれ給へ。」と云ふ。關の丁寧な挨拶も好い加減に聞いて居る。

「客つて誰です。」と右田は小聲に尋ねた。

「まア好いから來て坐つて居て呉れ給へ。煩さくつて爲樣が無いんだ。」とサッサと書齋へ引返した。

二人は連立つて狹い三疊の茶屋がゝつた書齋へ通つた。關だけは閾の外の疊の上へ坐つた。

「お客様のやうですから、では今日はこれで失禮を申し上げます。」と洋服の客はモジ〳〵として起掛けた。襟の淺い、舊るい式の背廣を着た、顏色の蒼い、まア何處かの腰辨とでも云つたやうな人であつた。

「ぢや二三日中に此方から御返事申上げる事にしませう。」と先生は如何にも素氣ない口振りであつた。

「何分よろしく御願申上ます。實は私も窮迫の餘りこんな御無理を願ひますので。」と膝株の膨を伸しながら、その人は何度も〳〵辭儀をして歸つた。

先生と云へば、名を云ふまでもなく世に知られて居る名高い小說家である。關はこの人の玄關に十五六の年から養ひ上げられたのだ。

「先生。」と關は改めて丁寧な挨拶をした。

「今朝出て來たのか。矢張り田舍ぢや耐らないだらう。强情を張りやがるもんだから、それ見な。」と端切れるばかり健康さうな肉付の先生は笑ひ乍ら關を見た。

「もう、何んと云はれても爲方ありません。」と關は五分刈の頭をクリ〳〵と撫廻した。先生はアハ〳〵笑つた居た。

「奥樣や坊ッ樣に。」と關は立つて茶の間の方へ行つた。

「少しは自信が出來たと見えるね。」と先生は聲を低めてその後を見た。

「最う大丈夫でせう。去年あたりのやうに、活版の職工になるなんて事はもう云ひますまい。隨分拗ね

ましたからね。」

「然うさ。判りきつてる事を難かしくしやがるんだもの。」

「然しあれが彼の男の貴い所でせう。あの動揺、あの煩悶が無くて、峯岡のやうになつても困ります。」

「峯岡にも困るね。昨日も來たよ。××堂に泣き付いて、あすこの雑誌に口繪の説明など書いて居るんだつてね。」

「そんなになりましたかね。」

「今酒を然う云つた。その間少し外を歩いて見やうぢやないか、秋色今が闌なりだよ。」

二人は庭下駄を引掛けて裏口の方へ出た。稲は最う収穫に近く、落合の田圃は秋風に輝いた。

第四

座敷へ灯の入る頃、先生と右田は外から入つて來た。

關は椽側の柱に凭れ乍ら、民雄と云ふ先生の坊ちやんを膝の間に抱えて、奥樣と何か話して居た。自分の姉の酷たらしい死態であつた。産褥熱で甚く苦んだ揚句、「生きてる〳〵。」と口早に罵り乍ら息を引取つた。幾らか精神に異状もあつたらしく、頭を冷して置た手拭を抱いて離さなかつたと云ふ。

「それが女の一念と云ふものでせうね。」と奥樣は然も〳〵感に耐えたと云ふ風であつた。民雄さんは目を丸るくして關の顔を見上げて居た。

「その話かい、姉さんの幽靈に憑かれて神經を痛めたと云ふ手紙は。」と先生は笑ひ乍ら聞いた。

「へえ、何しろその當坐その顏が目にチラ付いて眠られませんでした。」と關は涙に潤んだ目を上げて夕暮の空を見た。

「本當に見えたか。」

「本當に見ました。」

用意の酒が書齋の次の四疊半に搬ばれた。生憎何も無いとて、奧樣は海苔を卷いてくれた。關の飲むには誰も驚いた、以前から少しは飲んだが、斯うは思掛けなかつた。飲まうと思へば幾らでも飲めると云ふ。

話はその以前、關が東京を見棄てゝ郷里の三河に歸る頃の事に移つた。根本から鑄直すの新しい生涯に入るのと云つて、或は本屋の番頭になるの、或は活版の職工になるのと、その度先生に紹介狀を書かせた。自分も何んの仕事もせず、毎日〳〵那所だ此處だと歩き廻つた。傍が幾ら止めても聞入れないで、隨分人聞きの惡るい人にも頭を下げたものだ。そしてとゞの詰り二進も三進も利かない破目まで落ちた揚句、影寂しく故郷に歸ることゝなつた。あの窮乏て、旅費を何處から拵えたらうと、そんな事まら問題になる位であつた。

その時、靜岡にてと書た手紙があつた。原稿紙にキチンと正しく書いてある處を見ると、何れ發つ前から旣に用意してあつたものと見える。己が靜岡を藝術の惱みとのみ思はるゝは誤りなり。藝術の外、

生活の外、己れには棄て難き煩悶あり。生の缺損あり。この事遂に他に語る可からずと雖も、己れに於ては常に甚しき悩みなり。これわれの破れたる[illegible]を抱きて郷里に退く所以なりと云ふやうな事であつた。先生も右田も色々考へたが、遂に解する事が出來なかつた。

「なアに、理窟だよ。怠けたい以外に何があるもんか。」と先生は笑つた。右田も然う思つた。

その頃の話が初まつたのだ。

「あれ限り、全く小説を止す積りだつたのか。そして坊主にでもなる氣だつたのか。」と先生は尋ねた

「え、あの時は全く然う思ひました。」と畏つて居る。

「おや、近頃は何故ポツ〳〵書出したんだ。譯が判らんぢやないか。」

「ですが、然う思つたつて書ずに居られませんもの。人間何もせずに居ると云ふ事は、餘程苦しい事です。」

「生の缺損たア何んだ。一體お前は旨い事を云ふぜ。」

先生は酒にテラ〳〵光る廣い額を弟子の顔に振り向けた。

「え、まア今は止しませう。話せば乾度笑はれますから。」と闕は何がなしポツと顔を赤くした。

「あれかい。」と先生は妙な目遣ひをして見せた。

「まア止します。」と固くなつた。

それから又飲んだ。家で飲んだゝけては飲足りない。暗い、道端の悪るい街道をフラ〳〵早稲田まで出

て、そこの支那料理店で又飲んだ。こゝでも足りない。何所かで最う一度飲まうと云ふ先生を無理に慰めて十一時頃その家を出た。

歸路は恐ろしく寒むかつた。

第五

途中から談が纏つて、二人は河添の家の廣い坐敷に居た。二度醉ふて二度醒した酒に、右田の醉はあ、くどく來た。唯最う激しい言葉を吐いて、その荒んだ心を興ませて居た。

關も飲むには飲んだが、酒は水のやうに咽を下つた。眞蒼な顔して床柱にもたれながら友の陽氣な樣子を眺めて居た。

「飲まう、久し振りだ。大に飲んで語らうぢやないか。」と關の肘を執つた。

「飲まう。」と關も奮起つて、冷え切つた盃を取上げた。そして、太い聲を張上げて古い昔の「よさ來い」と云ふ小唄を唄つた。同じ唄を二人して何囘も〳〵唄續けた。

三味線を持つた年の多い方の女が、目で笑ひながら、何やら若い方の女に相圖を囁いた。右田の差圖て先刻から一人が來、一人が來て、女が四人も集つたのだ。

「關。」と厠に起ちながら、右田の目が關に語つた。

「第三」。關の答ひてある。そして急にコロリと横になつて、床縁を枕にした。女どもは坐蒲團をその頭から足へ掛けた。

鉢前の所に立つて、右田は年寄つた女を相手に可也話に暇取つた。右田は年寄つた女の手に紙幣を一枚握らせた。女は右田をそこに待たせて、二三度何所かへ走つた。

「萬歳〱」

踊るやうな手付しながら、右田は坐敷に戻つて見ると、女どもは一人も居ない。腕の間から關の待兼ねた目を見付けた。

「さア歸るんだ。萬歳〱。」と激しく手を叩いて勘定を貰つた。關も威勢好く飛び起きた。

二人は大勢の懸聲に送られて門を出た。直ぐ前に鐵道の線路がある。その下の暗いガアドを潜ると、間も無く薄暗らい軒洋燈の出た無業風の家があつた。酔つた人達はそこへ入つた。

そこにも酒があつた。右田は兎に角。關は突返して來さうなのを我慢して飲んだ。そして、燥いだ聲て樣々の話が初まつた。カラコロと妍しい下駄の音が門内の石疊に聞えて、間も無く若い女が二人入つて來た。先の座敷に居た內の二人であつた。

女どもは障子の外に立つて、笑ひながら相互に先を譲つて居たが、突と二人一緒になつて入つた。そして、素知らぬ顏してそこに坐つた。

關と右田は談に氣を奪はれてるやうに見向きもしなかつた。でも兩方の目と目で突き合ふやうに笑つて居た。

翌朝、汽車の地響に右田は朝早く目覺めた。時計を見ると五時。今一睡りして目が覺めると最う日射

は高かつた。

關の寢て居る障子の外から、「關、關。」と呼んだ。誰かガバと跳起きる氣勢が聞えた。顏を洗つて待つて居たが、關の起きた様子もない。行つて見ると、關は頭からスッポリ蒲團を被つて一人クン／＼鼾を搔いて眠つて居た。

搖起すと關はポッカリ目を開いた。起きろよと云へば、う、と云ふ。蒲團の中から手を差伸べて卷煙草に火を付けた。

「最う可也晩いよ。」

「あゝ。」

「起きやう」

「あゝ。」と興の無さゝうな顏して居た。右田の方から笑つて掛つても、關は素氣も無い風であつた。

第六

朝寒の顏を日に曝らして宿に歸つた。宿はそこからツイ鼻の先にある。火の氣のない部屋に火を起さして、不味い朝飯を濟して居る所へ、某社の記者が詰掛けて來た。

約束の日限は三日前てある。印刷所の都合て今日の正午までに出來ねば間に合はないと云ふ。兩方から步び合つた上、午後の五時までは必らず書くと約束した。

「君はあんな事を云つて、晩まで三十枚なんて書けるのかね。」と關は危ぶむやうな顏付てある。

「書かずにや居られないさ。來月のものだもの、今日は二十六日だ。」
「恐ろしい精力だね。僕にや所詮出來ないな」。と驚いて居た。
いかな場合でも、自ら机の上を淨め拭ふのは右田が以前からの癖である。原稿をほゞ紙數だけ擴げてその上に文鎭を置いた。万年筆のインキも換えた。
「おや失敬して、僕はその間寢さして貰はう」。と關は押入からズル／＼と蒲團を取出してもぐり込んだ。そして、床の中から頭を出して、バクリ／＼と煙草を幾服も吹いて居た。
「寢るなら本當に寢ろよ。目に障つて不可ない。」
「あゝ。」とは云つたが、未だ容易に寢さうもない。無精らしく片手を伸して、新聞紙を引寄せて那方此方と拾讀して居た。
「ねえ君、××雜誌ぢや新年ものに僕の小說を取つてくれないだらうかね。」
「何うだかな。新年のものは大抵顏が決つて居るだらうよ。」
「然うかね」。と何か考へて居る。
右田は夢中になつてセッセと書出した。初めの二三枚は書損じもしたが、四五枚目から興が乘つて來て、ドシ／＼ペンを飛ばした。取次いで來た客もあつたが、留守と云つて斷らせた。
晝飯になつた。寢かして置かうと思つたが、念の爲めに聞いて見ると、起きて喰べると云ふので女中に然う命じた。

飯後の茶を啜りながら、關は十一枚も書いたと聞いて甚く喫驚して居た。
「どれ見して呉れ給へ。」
「僕が讀まう」。
右田は原稿紙を取上げて讀初めた。讀みながら些い〳〵語尾の落付かぬところなぞへ筆を入れた。
關は俯向いて、自分の膝を見詰ながら、味はふやうに聞いて居た。
「何うだね。」と批評を聞いた。
「旨いね、ドッシリして重味のある文章だ。旨いね。」
「いやに賞めるぜ、何うせ君に云はせると鳥の目で書いた小說よ。」
「鳥の目でも何んでも好いから、僕もその精力で書きたいな。」
關は又蒲團を引被つた。今度は眠るのでは無つた。ツスリ〳〵涕水を啜り上げながら何か深く考へ込んで居た。
右田は懸命に書きに書いた。
「あゝあ、僕は駄目だな。」と云ふ嘆息が二三度床の中から聞えたが、右田は相手になつて居る暇すら無かつた。
夕方、その雜誌記者が來るまでに、約束の三十枚は出來なかつたが、殆んど二十枚近く書いて居た。記者もそれに安心して、殘りは明日の朝までゞ好いからとの事であつた。

關はその雜誌記者に、「何うてせう貴方の雜誌の正月號に、私の短かいものを擦込(ずり)ませて頂く譯には行きますまいか。」と改まつた調子である。初對面の人か、斯うした人の前に見違えるほど固くなるのが彼の癖の中の癖であつた。

「然うですね、何分顏振が定まつて居ますから、頁(ページ)の都合もありましてね。二月號は何うてせう。二月號なら是非頂戴したいんですがね。」

「では、その時のにお願致しませう。」

「何枚ぐらゐです。」

「二十四五枚てす。」

「その位ならば實に結構てす。何分私のところは紙面がありませんてな。」

記者は歸り際に。原稿料の內金として五圓紙幣を三枚右田に置いてた。

「また飲めるぜ、難有い。」と右田は拾つたものゝやうに喜んだ。

「だけどね右田さん。今晩は飲むのを止して下さい。明日の朝まで原稿が出來ないと大變なのですから。」と煩さく念を押して歸つて行つた。

「何うだ飲みに行かうよ。」

記者が門口まで出るか出ない中に最うこれてあつた。

「何所へ行くんだ。」

「昨夜のところよ。」
「昨夜の所なら止さう。僕にや些つとも感興がない。鰻なら喰べに行つても好い」。
「僕ア然し行くよ。」
「行き給へ。僕ア留守居して仕事でもして居やう。女學界の十五枚を書いて了はなきアならない。」
「ぢや然うしたまへ。十二時までには歸つて來るよ。」と女中が持つて來た晩飯も喰はずに家を飛出した。

關はその後暫くの間、火鉢にもたれて何か考へ込んで居た。
辛つと仕事の机に向ふ氣になつたのは、彼是十時近かつた。

第七

二時頃右田が醉拂つて歸つて見ると、關は毛布に膝を包んで、罫紙帳に鉛筆で切りと書いて居たが、趣向が思ふやうにならぬと、初一枚を七枚も八枚も書損じてあつた。出來たところは辛つと二枚に足らぬ。
「どれ拜見。」と手を出した。
「駄目だよ、駄目だよ。」と手を掉つて見せなかつた。そして、「僕ア不可ない。自分ながら染々心細くなつた。」
「書けないからなのか。又初めやがつた。怠け者だなア。」

「そればかりぢやない。小説と云ふものがどんなものか判らなくなつた。」

「小説と云ふ者はこんなものよ。讀んで聞かせやう」。と先刻自分が書殘した原稿を取つて讀上げやうとする。

「判つた〳〵、後生だから默つて寢てくれ。」

「寢ないとも、―君が寢るなら寢やう。」

「あゝ云ふ男だ。僕は徹夜しても明日の朝までに書上げなきアならん。」

その十五六枚を金に換えて、關は何所か安い下宿屋を探して、そこに落付く積りて居たのだ。

「最う二時過ぎて居ますから。」と女中は寢恍けた顔して入口へ來た。聲が高かゝつたのである。右田はその女中を取捉へて、陽氣さうに何か喋つて居た。浪花節の眞似もあつた。

右田の睡り付いたのを待つて、關は復原稿に向直つた。卷煙草とお茶を交る〳〵貪つて、凝つと趣向を凝らして居たがやがて又初めから書改めた。

翌朝は例の雜誌記者に起された。關は今朝まで起きて居たのだからと、座敷の片隅へズル〳〵と自分て床を引摺つて行つた。そして那方向いて寢た。關に小説はと聞くと、何うも面白くないから、別な趣向を書出して、未だ辛つと三枚にしかならなかつた。

「だたら右田さんにや金を渡せない。何うも怪しいと昨日思ひましたよ」。と記者は正午頃まてと約束して歸つた。

朝飯を飽迄詰込み、茶をゆつくり啜つてから、右田は又机を浄めて續きの原稿を書初め　。書出せば傍目も觸(ふら)ない。サラ〳〵と萬年筆は紙に鳴つた。一時間に四枚或は五枚。彼は必らずそれだけを書いた。

正午前に書終つた。原稿を車夫に持たせて社へ送つた。直ぐ稿料を渡してくれるやうに手紙を書添えた。

「さア關、起きろよ、晝飯だ。」と叱るやうにして起した。

「もう出來たのかね」。と寢衣に着物を引掛けたまゝズル〳〵と出て來て火鉢の縁に膝をかけた。又煙草である。

「早く顔でも洗つたら何うだ。好い天氣だぜ、上野へ展覧會でも見に行かうか。」

「僕は止さう。早く書上げて下宿を見付にやならん。」

「どうて君の仕事は三四日仕事だよ。」

「大丈夫、今日は晩方まで書上げて見せるから見て居給へ。」

右田は着物を着換えてブラリと家を出た。何所と云つて宛(あて)はないが、先刻の原稿料が懐にあつたのだ。

第八

それから二日經つても關の十五枚は出來上らなかつた。一冊の雜誌帳は殆んど書損じて埋つた。齒痒がつて右田が傍(はた)から云へば云ふほど關の手が澁つた。終には何方でも原稿の話をしないやうになつた。

關は三河からの手紙を受取つた。それは上京前まで出養生して居た、或る溫泉場の主人からであつた。何んの用かと聞いても、なアにとばかりて關は何も云はなかつたが、當惑の樣子は顏色にも讀まれた。

「あんな短いものを書いて居たのぢや追付かない。何か五十枚ぐらゐの長いやつを書出さう。」と先の書殘しを棄てゝ了つて、今度は新しい帳面に、先づ題だけを、「塵」と置いた。これは二三年前からある彼が取ッて置きの趣向で、「僕の塵、僕の塵」て通つたものだ。

「君、そんな事ぢや所詮駄目だよ。」

或る晩、床へ入つてから石田は眞面目に云つた。作家の某、作家の某、その努力と精進の心の強さ事を勵ます氣て云つた。

「君は怠けてる〳〵と云ふが、僕ア全く怠けて居るんぢやないよ。全く勉强する積りでも體力が續かないんだよ。」と關の言條である。

「體力が續かんとは云はれまい。あんな弱いS——さんだッてH——君だッて、さア書くとなると一日二十枚ぐらゐは書くぜ。あの遲筆な先生だッて一日に十六七枚書いた事がある。兎に角、月に百枚書かないやうぢや、到底生活は難かしいぜ。」

「何故僕にだけ書けないだらうッてね。自分にも判らない。」

「君は机に坐つてもキチンと眞面に向いちや居ないもの。半分は火鉢にもたれて、半分は机と云つた風だ。あれぢや書ける筈はない。要するに君の筋肉は墮け切つて居るよ。—

關は默つて了つた。右田は何うせ言出したからはと云ふやうな態度で、飽まで〳〵と關の弱點を衝いた。作品の缺點すら遠慮なく云つた。

「考へとき事だね」。と關はその晩、夜深けるまで眠らずに、ツスリ〳〵洟を啜りながら寝返りばかりして居た。

翌日は雨である。

右田は晩くまで寝て居て目を醒して見ると、關は居ない。例の風呂敷包もなかつた。女中に聞くと今朝早く朝飯も喰はずに出て行つたとの事である。傘を上げませうと云つたら要らないと低い下駄をビショ〳〵穿いて行つたと云ふ。

「乾度また先生の所だらう。」と右田は氣にもしなかつた。

二三日は新年もの丶小説で忙しなく日を暮した。

外の用事を兼ねて、或る日の午頃、先生の家へ行くと、丁度起きたところ、關は井戸端で顏を洗つて居た。

「お早う。」と聲を掛ける。

「昨夜は寝なかつたもんでね。」關はその大きな沈んだ目を日向に眩しさうに友人に振向けた。

書齋へ通ると、先生も矢張り新年ものに追れて書いて居た。

「出來ますかね。」と云ふと、

「出來ないたッて書かずに居られるかい。」と元氣さうに笑つて居た。そして、「到頭、關と衝突かつたね。何うせその中にや遣るだらうとは思つて居たが。何んでも今度は房州へ行くとか云つて居たよ。」

「然うですか、好いでせう。山田屋なら快く置いてくれるでせう。」と右田は外の話に移つた。

玄關へ來て見ると、關は日當りの椽側に民雄さんと遊んで居た。繪話の本をドッサリ持出して、飛乘太郎だの風船旅行だのゝ話を親切にして聞かせて居た。

「この頃は關さんに民雄がスッカリ馴れ切つて了ひまして。」と奥樣は話して居られた。

（完）

昔の女

三島霜川

埃深い北向の家である。低い木ッ葉屋根の二軒長屋で、子供の多い老巡査が住み荒して行ッた後だ。四疊半と三疊と並んで、其に椽が付いて南に向ッてゐる。で日は家中に射込むで都て露出し‥‥薄暗い臺所には、皿やら椀やら俎板やらしちりんやらが、だらしなく取ッちらかッてゐるのも見えれば、懕く開ッ放してある押入には、蒲團綿やら襤褸屑やら何んといふこともなくつくね込むであるのも見える。障子は夏、外したまゝで、殘らず破れたなり煤けたなりで便所の傍にたてかけてある。もう朝晩は秋の冷氣が身に沁むほどだといふに、勝見一家の倦怠とやりッぱなしは、老巡査一家の其にも増して、障子を繕ッて入れるだけの面倒も見ない。雨でも降るとスッカリ雨戸を閉切ッて親子四人微暗い裡に何がなしモゾクサしていぢけ込むでゐる。天氣の好い日でも格子戸の方の雨戸だけは閉切ッて、臺所口から出入してゐる。幾ら水を換へて置いても、雨上りには乾度、手水鉢の底に蚯蚓が四五匹づゝウヨ〳〵してゐた。家が古いから尾根から流れ込むのであらう。主人の由三は、卅を越した年を向だ獨身で、萬事母親に面倒を掛けてゐた。

由三は何處に勤めるでもない。何時も何か充らないやうな、物足りぬ顔で大きな古机の前に坐り込むでゐるが、飽きるとゴロリ横になッて、貧乏揺をしながら何時とはなく眠ッて了ふ。何うかすると裏の

田圃に散歩に出掛けることもある。机の上には、いかな日でも原稿用紙と筆とが丁と揃ッてゐないことはないが、それでゐて滅多と原稿の纏ッた例がない。頭がだらけきッて、正體がないからだ。

今日も由三は十一時頃に起きて、其から二三時間もマジリ〳〵してゐて、もう敷島の十二三本も吸ッた。吹殼は火鉢の隅に目立つやうに堆になッて、口が苦くなる、頭もソロ〳〵倦くなッて來て、輕く振ッて見ると、后頭が鉛でも詰めてあるやうに重い。此うなると墨を磨るのさへ懶い、て、妄と生呎だ。

臺所傍の二疊でも母親が長い呎をする……眼鏡越しに由三の方を見て、

「隣りのお婆さん、何うなすッたかナ。」と獨言のやうにいふ。返事がなかッたので、更に押返して「亡くなッたかナ。」

と賴りなげな聲だ。

「何うだッて可いぢやありませんか、他のこと。」

由三はうるさゝうに謂ッて、外を見る。靑い空、輝く日光……其の明い、靜な日和を見ると、由三は何がなし其の身が幽囚でもされてゐるやうな感じがした。

「でも怖いからノ。」と母親は重い口で染々といふ。

「氣を付けてさへゐたら大丈夫です。」

「其は然うだがノ。」と不安らしい。

「大丈夫ですよ。赤痢といふものは、氣を付けてさへゐたら、決して罹りもしなければ、傳染するもの

てはありません。」

「然うかノ。」

と謂ッて母親は默ッて了ッた。隣りの婆さんといふのは、赤痢に罹ッたのを一週間も隱匿してゐて、昨日の午後避病院に擔込まれたのであッた。避病院は、つい近所にある。坐ッてゐても消毒室の煙突だけは見える。

「嫌だノ。」と母親はまた心細さうに、「今年は能く人が死なッしやるナ。氣候の惡い故でもあるかノ。」

と謂ッて小聲で念佛を稱へる。

「そりや死にもすけるれど、生れた家も隨分あるさ。」

と由三はお産のあッた家を六軒ばかり數へた。そして、「此の長屋中にだッて、春から三人も生れたぢやありませんか。」

と言足した。近所から傳染病が出た故でもあることか、其處らに人が住むでゐるとは思はれぬやうに靜だ。其の靜な中に、長屋の隅ッこの方から、トン、トン、カラリ……秋晴の空氣を顫はせて、機を織る音がさも田舍びて聞えて來る。

由三は眼を瞑ッて、「何んといふ意氣地のないことを考出した。此うしてゐて何うなるのだ。」と謂ッたやうな忙しい感じが、直ぐ胸頭を緊付ける。

母親は何やらモゾ〳〵してゐて、「私もナ、ひよッとすると、此の冬あたりは逝くやも知れンてノ。」

と他事のやうに平氣でいふ。

由三は愕ッとして眼を瞠けた。

「え、何うして？……」と詰るやうにいふと、

「理窟はないけれどナ、何んだか其様な氣がしてならんてね。」

「今死んて何うするんてす。」

「何うするッて、壽命なら爲方がないてはないかノ。」

と淋しく笑ふ。成程然ういふ母親は、此の秋口から慢性の腎臓病に罹ッて、がッくり弱込むで來た。顔にも手足にも、むくみが來て、血色も思切ッて惡くなッた。て何事に依らず氣疎くなッて、頭髮も埃に塗れたまゝにそゝけ立ッて、一段と瘦が甚く見える。そして切と故鄕を戀しがッてゐる。國には尙だ七十八にもなる生みの母が活きてゐるのでお互に達者てゐる間に一度顔を合はせて來たいといふのであッた。

別れてから十四年にもなる。母親には故鄕が甚だ遠くなッてゐた。て自分にも彌々と老が迫ッて來るのにつれて、故鄕の老母を思ふ情が痛切になッて、此の四五年北の空をのみ憧れてゐる。由三は能く其の心を了解してゐた。そしてウンと氣張ッて、歸國させるだけの金を作らうと奮發しても見るのであッたが、何時も何か眼前の事情に計畫を崩されて其が成立たずに了ふ。一ッは底疲のしてゐる由三の根氣の足りぬ故もあッたらう。近頃ては、由三はもう、歸國させるといふことを考へるのも懶くなッた。其

を考へたり言出されたりすることが嫌で／＼耐らぬ。して何うかすると母親の顔を見るさへ不快でならぬこともあッた。

話が途断れると、屋根の上をコト／＼と鴉の歩き廻る音がする…由三は鉛のやうな光彩すらない生涯を思浮べながら、フト横に轉がッた。天床、疊、壁、障子、襖、小さな天地ではあるけれども、都て敗頽と衰殘の影が、ハッキリと眼に映る。と氣が激しく燥々して來て凝如としてゐては、何か此う敗頽の氣と埃とに體も心も引ッ括めて了ふかと思はれて、耐らなく家にゐるのが嫌になッて來た。淋しいといふよりは、空乏の感じが針のやうに神經をつゝく。それでも思切ッて家を飛出す踏切もなかッた。

「もう何うすることも出來なくなッて了ッたんぢやないか。」

壓されてゐるやうな心地だ。ドン底に落ちてゐるといふ悲哀が襲ふ。

濕氣のある庭には、秋の日光が零れて、しッとりと閃いてゐた。其處には青い草が短く伸びて、肥料も遣らずに放ッたらかしてある薔薇と宮城野萩の鉢植とが七八つ並んで、薔薇には、小さい花が二三輪淋しく咲いてゐた。隅の方には、葉の細い柿の樹が一本、くの字形にひよろりとしてゐる。實らぬ柿の樹だ。其の下に地を掘ッた向ふの家の芥溜が垣根越しに見える。少し離れて臺所も見える。其れも長屋で、襁褓の干してあるのも見えれば、厠も見えて、此方では向ふの家の暴露された裏を見せつけられてゐるのであッた。向ふの側にも柿の樹があッて、其には先ッぽの黄色になつた柿が枝もたわゝに實ッてゐた。柿の葉は微に戰いて、チラ／＼と日光が動く。

由三は何時かウト／＼してゐた。ホガラ／＼した秋の暖さが體に通ッて、何んだか生溫い湯にでも入ッてゐるやうな心地……、幻から幻へと幻がはてしなく續いて、種々な影が眼前を過ぎる、……只見ると、自分は、ニコライ堂のやうな高い／＼塔の屋根に登ッて躍ッたり跳たりしてゐる。其の下に幾百千とも知れぬ顏がウヨ／＼して其の狂態を見物してゐる。何れも冷笑の顏だ。其に激昂して、いよ／＼躍り狂ふ……、かと思ふと、足を踏滑らして眞ッ逆さまに……、落ちたかと思ふと落ちもしない。翼が生えたやうに宙にフワ／＼して、何か知ら金色の光がキラ／＼と眼の先に煌く。と、其が鋭利な刃物になッて眼の中に突ッ込むで來る。其處で幻が覺めかゝッて、強く腕の痺を感じた。腕を枕にしてゐるからだと氣が付いたが、それでゐて寢返りを打つことも爲なかッた。痺れるだけ痺れさせて置く氣だ。指先から肘にかけて感覺も何もなくなつた頃に、由三は辛而眼を啓けた。

痺れきッた腕を摩りながら、徐ら起上りざま母親はと見れば、二疊に突ッ俯したまゝスウ／＼鼾を立てゝゐる。神棚、佛壇、時計すらない家は荒涼としてゐた。

由三は何がなし小腹が立ッて來て、「阿母さん。」

と慳貪に呼掛けた。そしてツト立起りながら、ドシンと疊を踏鳴らした。別に用もなかッたが、たゞ起きてゐて貰ひたかッたのだ。でフラ／＼と椽に出て見る。明い空、明い空氣、由三は暗い心の底の底まで照らされるやうな感じがした。

「出掛けて見やうかナ。」

と思ッて机の前へ引返すと、母親は鈍い眼光で眩しさうに此方を見ながら、

「何けえ。」とノロ／＼いふ。

「何ッて、もう晝寢をする時節でもないでせう。」と皮肉に謂ッて、「私、些と本郷まで行ッて來ますよ。」

「本郷まで……、何しにノ。」

「肉でも購ッて來やうと思ッて……。」

「肉をナ。」

「え、少時肉の味を忘れてゐますからね。」

由三の眼には今肉屋の切臺の上にある鮮紅な肉の色がハッキリと見えて、渇いた食慾は切に其を思ふ。
て思切ッて家を出ることにしたが、一ッは荒れきッた胸に賑な町の空氣でも呼吸させたらばと思ッたからだ。

少時すると由三は、薄茶のクシャ／＼となッた中折を被ッて、紺絣の單衣の上に、丈も裄も引ッつまッた間に合せ物の羽織を着て、庭の方からコッ／＼と家を出た。何やら氣が退けて、甚く其處らを憚りながら、急足て長屋の通路を通り拔けると：兩側に十軒の長屋が四軒まで空屋になつてゐて、古くなッた貸家札は、風に剝がれて落ちさうになッてゐた。井戸の傍を通ると、釣瓶も釣瓶繩も流しに手繰り上げてあッて、其がガラ／＼と干乾びて、其處らに石灰が薄汚なくこびり付いてゐた。

避病院の横手を通ッて、少し行くと場末の町となる。其處で病院に擔込む釣臺に出會した。石炭酸の

臭がプンと鼻を衝く。由三は何んとも謂はれぬ思をしながら、と、振向いて見ると、薮の下に血の氣を失ッた男の脚が見えた。足の裏は日に照ッて變に白くなッゐてた。少時行くと、路の兩側に墓場がある、××寺第三號墓地と書いた札などが目に付いた。晝でも薄暗い路だ。片側の墓場は大きなペンキ塗の西洋館て切れる。眞言宗中學林の校舍だ。洋服を着た徒弟等が十五六人、運動場に出て盛にテニスをやッてゐた。

間もなく路は明くなッて千駄木町になる。其から一家の冬仕度に就いて考へたり、頭の底の動搖や不安に就いて考へたり、書かうと思ふ題材に就いて考へたりして、何時か高等學校の坡のところまで來た。また墓場と寺がある……、フト、ぐうたらなる生活狀態の危險を思ッて慄然とした。

坡について曲る。少し行くと追分の通だ。都會の響がガヤ〳〵と耳に響いて、卒倒でもしさうな心持になる……何んだか氣がワク〳〵して、妄と人に突當りさうだ。板橋通のがたくり馬車が辻を曲りかけてけたゝましく鈴を鳴らしてゐた。俥、荷車、荷馬車、其が三方から集ッて來て、此處て些と停滯する。由三は此の關門を通り拔けて、森川町から本鄕通りへブラリ〳〵進む。雜蹈の中を些と古本屋の前に立停ッたり、小間物店や吳服店をチラと覗いて見たりして、毎のやうに日影町から春木町に出る。二三軒雜誌屋を素見かして、中央會堂の少し先から本鄕座の方に曲ッた。何んといふことはなかッたがウソ〳〵と本鄕座の廣ッ場に入ッて見た。閉場中だ。がもう三四日で開くといふことて、立看板も出て居れば、木戸のところに來る××日開場といふビラも出てゐた。茶屋の前にはチラ〳〵光ッてゐる俥が十二三臺

も弾んで何んとなく景氣づいてゐた。由三は何か此う別天地の空氣にでも觸れたやうな感じがして、些と氣が浮ついた。またウソ／＼と引返して電車路に出る。ヤンワリと風が吹出した。埃が輕く立つ。

何處といふ的もなく歩いて見る氣で、小さな時計臺の下から大横町に曲ッて、フト思出して、通りから引込むだ肉屋で肉を購ッた。そして其の通を眞ッ直に壹岐殿坂を下ッて砲兵工廠の傍に出た。明い空に渦巻き登る煤煙、スク／＼と立つ煙突、トタン屋根の列車式の工場、黒ずむだ赤煉瓦の建物、埃に塗された白堊、破れた硝子窓、そして時々耳を劈くやうに起る破壊的の大響音……由三は其の音其の物象に、一種謂はれぬ不愉快と威壓を感じながら、崩れかッた長い長い土塀に沿ッて小石川の方に歩いた。眞砂町、田町、川勝前から柳町にかけて、其の通には古道具屋が多い。由三は道具屋さへあると、些と覗いて見たり立停ッて見たりする癖がある。別に購ふ氣もないが、値段づけてもしてあると其も見る。カン／＼日の照付けるのを嫌ッて、由三は何時か日の蔭ッた側を歩いてゐた。

フト小さな古道具屋の前で立停ッた。是と目に付く程の物もない、がらくた物ばかりゴテ／＼並べ立てた店である。前通には皿や鉢や土瓶やドンブリや、何れも疵物の瀬戸類が埃に塗れて白くなつてゐた。漆の剝げた椀も見える。其の薄暗い奥の方に金椽の額が一枚、鈍い光を放ッてゐた。紫の羽織を着た十五六の娘の肖像畫だ。描寫も色彩も舊式の油繪で、紫の色もボケたやうになつて見えたが、何か熟と仰ぎ見てゐるやうな眼だけは活／＼としてゐた。頰、鼻、口元、額、都て能く輪廓が整ッて、何處か何んとかいふ有名な畫者に似て豊艶な顏だ。

「アヽ、那女だ……」と由三の胸は急にさヾめき立つた。

確に昔の女の顏だ。て由三は些と若い息ても吹込まれたやうな感じがして、フラ〳〵と裡に入ッた。微に手先を顫はしながら、額を取上げて、左見右う見してゐて、

「こりや若干錢だね。」と訊ねた。聲が調子外れて、腦天からでも出たやうに自分の耳に響いた。

「其ですかえ、そりやね。」と些と言を切ッて、「一圓卅錢ばかりにして置きませう。」と賣ッても賣らなくつても可いといふ風て、火鉢の傍を動かずに此方を見てゐる。年の頃四十五六、頰の思切つて出張ッた、眼の飛出した、鼻の先の赭い、顏の大きな老爺だ。

「フム。」と少時默ッてゐて、「負からんかね。」

「然うですね、澤山のことは可けませんが……」とシブ〳〵立起ッて店に下りて來た、額を手に取ッた。して額椽の箔が何うの畵の出來が何うのと、クド〳〵と解らぬ講釋を並べて、「拾錢もお減き申して置きませうかね。」と無愛想にいふ。

「拾錢ぢや爲樣がない、八拾錢て可いだらう。」とぐづついていふ。

「ぢや、もう拾錢購ッて下さい。」

それて相談が纏ッて、由三は殆ど蟆口の底をはたいて昔の女の肖像畵を購取ッた。そして古新聞て畵面を包むで貰ッて、それをブラ下げながらテク〳〵歩き出した。氣が妙に浮ついて來て、フワ〳〵と宙でも歩いてゐるかの心地。て車の響、人の顏、日光に反射する軒燈の硝子の煌き、眼前にチラ〳〵する物

の影物の音が都て自分とは遠く隔ッてゐるかと思はれる。彼や是と思出が幻のやうに胸に閃く。彼は其を心に捕へて置いて、熱と見詰めて見るだけのゆとりとてもなかッた……、閃めき行くまゝだ。

女は綾さんと謂ッた。始めて知ッたのは由三が十四五、女が十一二の頃で、其の頃由三は叔父の家に養はれてゐた。叔父は其の時分五六人の小資本家と合同して、小規模の麥酒釀造會社を經營中であッたが、綾さんの父も其の仲間の一人で、其の關係からして綾さんは屢く叔父の家に來た。綾さんの父は、川越の藩士で、明治七八年頃からづッと遞信省の腰辨を勤めて來て、腰辨は腰辨でも、其の頃の官吏だからナカ〱幅も利けば、生活も樂にしてゐたらしい。處がフト事業熱に浮かされて、麥酒釀造の仲間に加はッた。合同資本と謂ッても、其の實田舍から出たての叔父と綾さんの父とが幾らか金を持ッてゐたゞけで、後は他の懷中を的の、ヤマを打當やうといふ連中の仕事だ。其の道の技師を一人雇ふてもないヤワな爲方で、素人の釀造法は第一回目からして腐ッて了ッた。それで叔父も財產を煙にして了へば、綾さんの父も息ついて、會社は解散。綾さんの家は西片町の椎の木界隈の汚い長屋に引込むで、一二年は恩給で喰ッてゐたが、それでは追付かなくなッて、阿母さんの智慧で駄菓子屋を始めた。其でも綾さんは尙だ何時も紫のメレンスの羽織を着て、頭髮から帶、都て邸町の娘風で學校に通ッてゐた。加之顏立なり姿なり品の好い娘であッたから、設や紫の色が洗ひざれてはげちよろけて來ても、さして貧乏くさくもならなかッた。

三年ばかり經ッた。叔父の家では、六丁目の或る寺内の下宿屋をそッくり其のまゝ讓受けて馴れぬ客

商賣を始めることになッた。すると綾さんは風呂敷包にした菓子箱を抱込むで毎日のやうに駄菓子を賣りに來た。頭髪は桃割に結ッて、姿の何處かに窶れた世帶の苦勞の影が見えたが、其でも尙だ邸町の娘の風は脱けなかッた。上品ではあッたが、口の利方は老せた方で、何んでもツべコべと饒舌ッたけれども、調子の好かッた故か、他に嫌はれるやうなことはなかッた。加之擧止がおッとりしてゐたのと、割合に氣さくであッたのと、顔が綺麗だッたのとて、書生さん等は來る度に、喰はずとも交々幾らかづゝ、菓子を購ッて遣ッた。無論由三も他の小遣を節約して購ッた。そして綾さんは、時とするとゆッくり搆込むで種々なことを話す。例へば近頃些々或る西洋畫家の許へモデルに頼まれた行くことや、或るミッションのマダムに可愛がられて、銀の十字架を貰ッたり造花や西洋菓子を貰ッたりすることや、一家路頭に迷はせるばかりにした麥酒釀造仲間の山師連の憎くてならぬことや、親切にして吳れる近所の奥さん等の心の悅しいことや、然うかと思ふと阿母さんが父に内密で日濟の金を借りて困ッてゐること、其の父が毎日鶯と目白の世話ばかりして、何もせずにブラ〱してゐるのに困ることなどを其から其へと話しつゞけて、さも分別のあるやうに鬱込むでゐることなどもあッた。して其の冬には、父は心臟に故障のある體をお邸の夜番に出たと聞いたが、其から間もなく由三は、故郷に歸らなければならぬ事になッて、三年ばかり綾さんを見る機會がなかッた。

　四年經ッた。由三は父に死なれて、尙だ廿を越したばかりの年を家の柱となッて、一家殘らず東京に出た。東京ではボッ〱白地を着てゐる人を見受ける頃であッた。先づ叔父の家に落着いて、其となく

蓮沼――綾さんの家の姓だ――の家の樣子を聞くと、皆達者ではゐるが、相變らず貧乏で、近頃小さな氷屋を始めて、綾さんは鉛筆を製造する工場の女工になッてゐるといふことであッた。由三は何んといふ意味もなく、たゞ靜な邸町に住はうと思ッてゐたので、家を探しがてら綾さんの家の前を通ッた。そしてフラ／＼と立寄ッて見る氣になッた。家は以前から見ると、ヅッと廢頽して、今にも倒れるかと思はれるやうに傾いてゐた。たゞ葡萄棚だけが繁りに繁ッて、小さな薄暗い家を奥深く見せてゐた。葡萄棚を葭簀で圍ッて氷店にして、氷をかく臺もあればサイホンの瓶も三四本見えた。棚には葡萄酒やら苺水やらラムネの瓶やら、空罎にペーパだけ張ッた飾罎やらが二三十本も並べてあッて、店頭には古グットを掛けた床几の三ッも出してあッた。綾さんは店頭に盥を持出して、ジャブ／＼何やら洗濯をしてゐた。見ると樣子がスッカリ違ッてゐる、中形の浴衣を着てゐたが、帶の結び方、頭髮、思切ッて世話に砕けてゐた。

由三の姿を見ると、呆氣に取られた體で、「まア、由さん、何うなすッたの。」と謂ッたが、音の出方まで下司な下町式になッて、以前凛とした點のあッた顏にも氣品がなくなり、何處か佻ッぽい愛嬌が出來てゐた。たゞパッチリして眼だけは、處女の時其のまゝの潤みを有ッて、活々として、奈何にも人を引付ける力があッた。

家の裡には矢張鳥籠が幾ッもかけてあッて、籠を飛廻ッてゐる目白の羽音が、バサ／＼と靜に聞えた。前からある時計もチクチク鈍い音で時を刻むで、以前は無かッた月琴の二挺も壁にかゝッてゐた。

父は火鉢の許に坐ッて、煙草を喫しながらジロリ〳〵由三の樣子を瞶めて、ちよッくら口を利かうともしない。そして時々ゴホン〳〵咳込むで、蒼ざめた顔を眞ッ紅にしてゐた。前から無愛想な人だ。顔にはむくみが來てゐた。

由三は、其の甚く衰弱してゐるのを見て、

「お惡いんですか。」と訊くと、

「アヽ」と横柄に謂ッて、「肺に熱を持ッたといふことでな。」

と平氣で謂ッてケロリとしてゐる。

「可けませんナ。」

と顔を顰めると、

「何有」と被せて、「養生さへすれば可いといふことだが、何分家が此の通ぢやて、思はしく行かんのでナ。」

と隔なく謂ッて苦笑する。

娘や家内は浴衣がけてゐるといふに、これはまた何だ木綿の黒紋付の羽織に垢づいた袷て、以前の通り堅くるしい態をしてゐた。

由三は何がなし冷い手で胸を撫でられるやうな心地がした。

綾さんには男の兄弟といふがなかッた。妹が兩人あッて、次の妹はお粂と謂ッて、姉にも優ッて美し

かッた。もう十六になッたといふ。其は近頃印刷局に通ッてゐるとのことであッたが、末ッ子のお芳というのは、大した駄々ッ子て、九ッにもなッて尙だ母親の膝の上に乘ッて、萎びかゝッた乳をさぐッてゐるといふ風てあッた。母親は氣の好い人て、開けひろげた胸を芳坊にいじらせながら、早口にクド〱と貧乏話を始めた。そして由三が家を探しに來たことをいふと、綾さんと兩人て、那處は何うの此處は何うと、恰て親族の者が引越して來るとてもいふやうな騷をする。父は一切沒交渉て、其の話が始まるとプイと立ッて緣側に出て、鶯に遣る餌を搯ッてゐた。

結局綾さんが案内に立ッて、近所の空家を探すことになッた。そして適當な家を目付けて、其を借りることになッたが、敷金家賃其の他一切の話合は都て綾さんが取仕切ッて、由三は只其の後について挨拶するだけてあッた。て由三は、餘りに綾さんの世馴れた所置振に、何んとも謂はれぬ一種の不快を感じた。其ても左に右話が定ッて、由三の一家は直に其の家へ引越した。して其の當座、兩人はこッそり其處らを夜歩きしたり、また何彼と用にかこつけて彼方此方と歩き廻ッて、芝居にも二三度入ッた。其は然し、二月ばかりの間て、兩人の關係は何時とはなく疎々しくなッた。其ても綾さんは毎日のやうにやッて來て、母や妹と一ッきりづゝ話して歸ッた。何うかすると工場の歸りだとか謂ッて、鉛筆の心の粉て手を眞ッ黑にしながら、其を自慢にしてゐるやうなこともあッた。兩手共荒れて罅の切たやうになッて、そしてカサ〱してゐた。言にしろ妾にしろ其の通て、何んでもあけすけにさらけ出して、世帶の苦しいことが口に付いてゐた。て體面もなく米も借りに來れば小遣も借りに來た。此方に都合があッ

て、質屋の事でも相談すると、オイソレと直に受込むで、サッサと自分に出掛けて來て呉れる、見得も外聞もあッたものでない。此方で頼むのに極の惡いやうなことでもいふと、

「何有、何處のお家だッて然うですわ。幾ら玄關を張ッてゐらしッても、此の邊のお家で質屋の帳面の無い家と謂ッたら、そりや少ないわ。」と低聲に謂ッて、はしやいだ笑方をする。

綾さんは近所の家の世帶を軒別に能く知拔いてゐた。そして其家此家の質使をすることを平氣で吹聽した。かと思ふと茶屋女のやうな、嫌味に意氣がッた風をして、白粉をこッてり塗りこくッて、根津や三崎町あたりの小芝居に出てゐる役者の噂をしてホク／＼してゐることもあッた。蔭沙汰では根津の下廻りの後を追駈け廻してゐるといふことも聞いた。

氷店は春の間ひッそりとして、滅多と人の入ッてゐることがなかッた。で母親は能く居眠をしてゐる、父は何時も火鉢の傍で煙草を喫しながらゴホ／＼咳をしてゐる、芳坊は近所の男の子の仲間に入ッて、カン／＼日の照付ける大道で砂塗になッて遊んでゐた。が夜となると、店の景氣がカラリと變る。綾さんも粂さんも、奇麗にお化粧をして店に出てゐる頃には、一人または二人づゝ若い書生さん等が集ッて來て、多い時には八九人も頭を揃へて何やらガヤ／＼騷いでゐた。何れも定連だ。そして月琴を彈く者もあれば、明笛を吹く者もあり、姉妹がまた其がいけたので、喧しい合奏は十一時十二時まで續いた。母親はこッそり其の騷を脫けて、翌日の米の心配に來たことも往々あッた。由三は他に若い血を躁がせて歩くところが出來たので、決して其の仲間に加はらなかッた。して冷ッこい眼で傍觀者の地位に立ッ

てゐた。

秋になッた。氷店はスッカリさびれて、夜集ッて來る定連も少なくなッた。秋が深くなるにつれて、父の衰弱も目に立ッたが、一家の窮頽も目に立ッて、綾さんはせッせと工場に通ひ出した。て綾さんの手は何時も鉛筆の粉で眞ッ黒になッてゐた。其でも滅多と呟いだり悄氣たりしてゐるやうなことはなかッたが、何うかするとつく〳〵と、「阿父さんが那如してゐたんぢや、幾ら稼いだッて到底遣切れやしないわ。寧もう家を飛出して了はうかも思ふこともあるけれども……」と謂ッて歎息してゐた。然うかと思ふと、ノンキに根津の替りを見て來た狂言の筋を話したり役者の噂をしたりして獨ではしやいでゐることもあッた。然う此うするうちに綾さんに婿を取るといふ話が持上ッた。婿は綾さんの出てゐる工場の職工で、先方から望むで貧乏な家に入らうといふのであッた。無論綾さんの容貌を命にして來る婿だ。綾さんも満更でもなかッたらしい。て、其の話の進行中に由三は一家を提げて下谷の七軒町に引越した。そして綾さんの家との交通は、ふッつり絶えて了ッた。

其から四五年も經ッて、由三は一度本郷通で綾さんに遇ッたことがある。十月も半ばであッたが、綾さんは洗ひざれた竪縞の單衣でトボ〳〵と町の片側を歩いてゐた。何處か氣脱のした體で由三が眼前に突ッ立ッても氣が付かなかッた。て聲を掛けると、ソワ〳〵した不安な眼光で、只見て置いて、辛面にッこりして挨拶をするといふ始末。家はと訊くと、越ケ谷の方に行ッてゐるといふ。そこで些と立話に一家の事情を訊くと、那から間もなく父は死んで了ふ、婿といふのが思ッたより意久地がなくッて、到

底一家を支へて行く力がなかッたばかりか、病身で稼が思ふやうでないて、家が始終ゴタ〳〵する。するうちにお粂は定連の一人と出來て神戸の方へ駈落ちして、彼方で世帶を持つ。家は益々遣切れなくなッて、遂々世帶を疊むで了ふ、芳坊は川越の親類に預かッて貰ふ、母親は東京で奉公することになる、自分等は世帶を持つ工面の出來るまで越ヶ谷に引込むことになッて、一家は全く離散の運命に陷ッて了ッた。して今日は、母親が奉公先で病ついたといふとて、取る物も取りあえず久しぶりで東京に出て來たとのことであッたが、然ういふ自身も、世帶の瘻か、それとも病氣か、頭髮は地色の見えるまで薄くなり、顏も蒼ざめて、腫物の痕の見えた首筋には絹のハンケチを卷付けてゐた。そして聲は變に喉に引ッ絡むで、色も匂も失せた哀な姿となッてゐた。

由三は只聞いたまゝで別れて、格別同情も寄せなかッた。でも二三日は影の薄くなッた綾さんの姿を胸に活かして、變な氣持になッてゐた。併し直に忘れて了ッて、ついぞ思出して見るやうなこともなかッた。して其の後全く消息も絕えて了ッた。

* * * * * * * * * * *

由三は然う謂ッたやうな過去の事象を胸に描いたり消したりして、フラ〳〵と步き續けた。紫の羽織を着てゐた頃の綾さんの姿を思浮べると、遉に胸頭に輕い痛みを感ぜぬでもなかッた。叔父に、「要ッたら何うだ。」と謂はれたことなども思出した。兩人共夢を見て――意味も姿も違ッてゐるが――活きてゐた

ことなども考へた。

由三は何時か白山の森の中に入ッて、境内をグルリと廻ッた。森の中の空氣はしんめりとして冷たかッた。其處は始めて綾さんの手を握ッて、其のカサ〱してゐるのに驚いたところだ。して今は自分の心のカサ〱してゐるのに驚いた……其の思出の深い地を踏むでゐるからと謂ッて、由三は何んの感じにも味にも觸れなかッた。矢張飽々した心の底から、何か切に空乏を訴へて、ツク〲と自分の生の凋落を思ッてゐた。

何しろ家へ歸るのが嫌だ！　埃深い癈滅の氣の漂ッた家に歸ると、何時でもドン底に落込むだやうな感じがする……其の感じが嫌だ！　て外さへ出ると、少時でも其の感じから脫れてゐやうとする。今ヨも其だ。由三は無意味に神樂殿の額を見たり、拜殿の前に突ッ立ッたり、または白旗櫻の碑を讀むだりして時を經てゐた。そしてもう何も見る物もなくなッた時分に、ウソ〱と森を出て、御殿町の方へ上ッた。其から植物園の傍の道を通ッて氷川田圃に出た。只ある工場の前に出ると、其は以前鉛筆を製造する工場であッたことを思出した。そして其の門、其の邊の路、何れも綾さんが毎日通ッた其てあることを思ッた。たゞ思ッたゞけだ。由三は何がなし其の乾いた心が悲しくなッた。

フト輕い寒氣が身裡に泌みた。見ると日光は何時か薄ッすりして、空氣も空も澄むだけ澄みきり、西の方はパッと輝いてゐた。其處らには暗い蔭が出來た。由三はブラ下げてゐる肖像畫の重みが腕にこたへて來て、幾度か捨て了ふか、さらずば子供にでも與れて了はうかと思ッた。て今更なけなしの錢をは

たいて購ッたのが悔られもする。かと思ふと、故郷に歸ッてゐた頃、切りと綾さんのことを思出してゐた其の時分のことが懷しいやうにも思ッた。

　また小時フラ〳〵と歩續けた。そして林町から巣鴨通に拔けて、瘋癲病院の赤煉瓦の土塀に沿ッて宮士前に出た。動坂に入ると、其處らがもう薄々と黄昏れて、道行く人の吐く息が目に付いた。霧の深い晩景であッた。高い木立の下を拔けると、家並が續く。冷たさうな火影が、ボンヤリ霧の中にちらついて、何の家も何の家もひッそりしてゐた。由三は腹をペコ〳〵に減らして、棒のやうになッた足を引摺りながらコソ〳〵と町を通ッた。そして何んの爲に的もなくウロ〳〵歩き廻ッたかを疑ひながら長屋の總門を入ッた。何んだか穴にでも入るやうな心地がした。地はしッとり濕ッて、井戸のあたりには灰色の氣がモヤ〳〵と蒸上ッてゐた。其の奧の方に障子に映した火光が狐色になッて見えた。荒凉の氣が襲ふ。

　家に入ッた。尙だ洋燈も灯さずにあッて、母親は暗い臺所で何かモゾクサ動いてゐた。向ふの家の臺所から火光が射してゐて、其が奈何にも奧深く見えた。其の狹い區域にも霧の色が濃に見える……由三は死滅の境にでも踏込むだやうな感がして、ブラ下げてゐた肖像畫を隅ッこの方に抛り出した。そして洋燈を灯した。微暗い火影は沈靜な……といふよりは停滯した空氣に漂ッて、癈頽した家のボロを照らした。由三は近頃になく草臥れた兩足を投出して、ぐッたり机に凭れかゝッた。そして眼を瞑ッて何んといふことはなく考出した。フト肖像畫の綾さんの姿が眼前にちらついた……何んだか癈物でも

歸ッて來たやうに思はれてならぬ。で眼を啓けて隅ッこに抛出した肖像畫を熟と見詰めてゐたが、ット立起ッて引ッ攫ふやうに肖像畫を取上げた。そして古新聞を被せたまゝで、こッそり戸棚の奥に抛込むだ。

* * * * * * * * * * * *

少時すると由三は、何か此う馬鹿を見たやうな心持で、久しぶりで肉の味を味はッた。して由三は何時まで經ッても肖像畫を戸棚から出さなかッた。

（をはり）

閑日月

正宗白鳥

北も南も二階建ての大きな家に遮られてゐるが、それでも隙間洩れて、細い光が障子の隅にさしてゐる。小春日和にこの谷底のやうな部屋も温かくて、火鉢の炭火も消えかゝつたまゝ忘られてゐる。山地佐太郎は中古の括枕に長く髪の伸びた頭を乗せて仰向けに寝てゐること既に二三時間。目は開いてゐるが、心はとろ〲と眠りかけ、心臓の鼓動ものろい。壁一重隔てゝは、天氣のいゝせいか、豆腐屋の聲屑屋の聲も賑やかに響いてゐる。車の音や自轉車の鈴や下駄の音が消えては又起り、追かけ〲絶え間がない。屋根の上には鳥が喧しく鳴いてゐる。雀の聲も忙しさうだ。しかし佐太郎の耳には何の刺激をも與へない。妻君は朝から出掛けて、茶の間もひつそりしてゐる。

やがて雲が隠したのか、日がもう西へ廻つたのか、障子の光が消えてしまうと、佐太郎は目をこすりながら起きて、火鉢の前に坐はり、火を掻まはして、煙草を一本吸ふた。吸ひ終ると、茶の間から炭斗を持つて來て添炭をした。そして又煙草を一本吸ひながら、枕の側に散かつてる新聞を引寄せて、取留め

もなく目を通したが、頭に殘る文字もない。て、二三本吸殻を灰の中に突立て、もう煙草にも厭いたらしく、唾を吐いて、乾いた唇を嘗めずり、漂へる煙の中に肥つた膝を抱いてゐた。

ふと表通りに怒鳴る聲が聞える。荒々しい言葉が亂發されてゐる。それが遠のくと、大勢の走る足音が續く。

「今日は馬鹿に戸外が騷々しい」と思ひながら、彼れは肘枕で横になつた。

無念無想で、今朝から彼れの頭は白紙のやうである。

暫らく戸外の音が消えて、炭のはじける音と懐中時計の音と、彼れの鼻息とが部屋の空氣を動かしてゐたが、やがて北隣りの二階から蓄音機の音が落ちて來た。日曜毎に三時頃からこれが聞えるので、最初が義太夫の三人上戸、その次が箱根八里の追分節、終りが唱歌。今日も變りはなく、誰れかゞ緣側で足拍子を取つてる樣子だ。

彼れは寢ながら、頭と指先で拍子を取り、口の内で蓄音器と合唱を試みてゐたが、ガラッと格子戸が開いて、「御免なさい」と威勢のよい聲がするので、彼れは寢たまゝ頭だけ持上げて、「何方です、……お上りなさい」と云ふ。その聲が顏に似合はず、可愛らしい。

入つて來たのは色の白い美しい青年。佐太郎の甥の時男である。額の汗を拭ひながら、

「叔父さん、先日お頼みした事はどうなりました」

「あゝ又忘れた、明日か明後日、屹度間違ひなく聞いて見てやらう」

「困りますねえ、早くあの方が極らにや、私も落付けせんからねえ」
「まあ安心して居れ、大抵は成功するよ」
「あれだつてあまり望ましくもないんですけれど、私ももうどうしても自活しなくちやならんのですからね」
「はゝゝ自活なんて仰山だね」と、佐太郎は目尻を下げて笑ふ。
「でも、假令十圓でも十五圓でも、自分の腕で儲けるとなると愉快ですから、それに私も來年は二十五だから、何時までもブラ〳〵して居られませんもの」と、甥は勢込んで云ふ。
「お前がもう二十五か早いもんだね、おれは來年が四十一か」と、甥の顔を見てゐるが、甥は自分が四十一になるまでは、まだ隨分年月があると思つてゐる。
「ぢや御面倒でも明日の朝是非向うへお出になつて、私を推薦して下さい、私は一生懸命に職務を忠實にやります、英語なら友人の中ぢや誰れにても負けやせんのだから、貴下からよくさう云つて置いて下さい」
「うん、そりや甘く云ふさ、入り込みさへすりや、後はどうにかなるからな」
「私は入つたら無責任な事はしないんだから……それに」
「うん、もう分つたよ」と、佐太郎はガサ〳〵する頤髯を撫でながら、甥の力んだ言葉の先を壓へて、
「今日は久振りに御馳走しやうか、叔母さんが歸つたら」

「えゝ、私はまだ用事があるんだが……神田の友人の下宿へ行つて、本を借りて來なくちやならんだが……それやまあ明日に延していゝ」と、考へ〳〵承知して、「今日、叔母さんは何處へ行つたんです」と問ふ。

「七軒町へ行くと云つて出たんだが、何處を喋舌り歩いてることか」

「實は今日天氣がいゝから叔父さんは留守ぢやないかと思つてたんです。でも工場の方は毎日出勤してるんですか」

「まあ休んだり休まなかつたりさ、しかし今月は出勤勝の方だらう」

と、眞面目で云つたが、甥は叔父の呑氣な口振りに呆れ氣味て、その顏を見守つた。そして自分の頼み事に對して多少の不安を感じた。この人の肝煎で果して成功するだらうか。成るものまでも成らずに終りやすまいかと疑はれた。

佐太郎は茶の間へ行つて、長火鉢の抽出を索り、銅貨白銅かい交ぜて、二十錢ばかりを持つて來て、「これで「朝日」を一つと餅菓子か何か買つて來て與れ、おれがお茶を拵えて置かう」と甥に渡した。甥は命を奉じて駈け出し、「朝日」一と竹皮包とを剝出しに持つて歸つた。二人は無言て茶を啜りムシヤムシヤ餅菓子を食べてゐると、蓄音器の音のした二階から、琴の音が響いて來る。甥はふいと立つて、北側の障子を開けて見上ると欄干に添うて、白い足袋黑い足袋が四つ五つ微見える。

「いゝ音だな、私は音樂が一番好きてす」

「おれも好きだよ、此處にゐると、寢ながらいろんな音が聞えるんだから有難いさ、ヲルガンでも琴でも三味でも。それに夜靜かになると、寄席の囃子まで聞える」

「さう云へば、此頃鈴本へ初代の綾之助がいつてゐますね、この先の酒屋の前に幟が立つてた」

「さうか、そいつはちつとも氣が付かなかつた。今夜でも一緒に聞きに行かうか、おれも十二三年前にや彼奴の尻を追つかけたものだが、彼奴ももう老込んだらうよ、女の盛りは短かいからねえ、」

「でも藝人は得だ、あんなに喝采されるんだから、男でも職業の撰擇によつて、將來非常な損得がありますからね」と、甥は考へた。

「女房の撰擇でもさうさ、おれなんかも藝人を嚊にしてりや、まさかの時にや役に立たあね」と、佐太郎は笑ふ。

妻君は火灯頃に、アタフタと歸つて來た。座敷へ入るや否や、「貴下大變揉めてるんですつて、天神町の家が」と云つて、それから甥を見て、「オヤ」と云つて、鼻の低い平たい顔に愛嬌を湛えた。

「お君さんの離縁の事ですか」と、甥が先へ口を出した。

「えゝさうなの、お君さんの方だつて、あゝ踏みつけにされて默つちやゐられませんわね、だから此方から押かけてうんと油を取つてやらうつて、今日一日七軒町の叔母さんと話してたんですよ」と、妻君は佐太郎の方へ向いて、「その事で叔母さんもね、貴下に會ひたいと云つてなすつたから、明日歸りにでも七軒町へ寄つて下さいましな、どの道佐太郎さんにでも掛合つて貰はなくちや仕方がない、外にや女

か老人ばかりで手寄りになるものはないからつて、叔母さんもさう云つてましたから」

「まあさう大騒ぎするにゃ及ばないさ、都合てそりや、おれが話をつけてやつてもいゝがね」

「私ほんとに口惜しくつて仕様がありやしない、逆捩ぢを喰はせて、グウの音も出ないやうな目に會はせてやりたい」と、云ひながら、羽織を疊んでゐる。

「ハヽヽヽ」と、佐太郎は罪もなく笑つて、「時男に御馳走をして呉れ、それから今夜は皆んな一緒に鈴本へ行くことに極つてるんだ」

「おやさう、有難いわね」と、妻君はもうお君の事件を忘れたかの如く、寄席の噂に夢中になつた。「鈴本が新規に建上つてから、まだ一度も行かないんですもの、本當に寄席は久振りだわ。時さんはよく行くんでせう」

「えゝ、私は一時よく行つたんですが、仕事が極つたら、もうあんな所へは滅多に行かんことにして、暇があつたら勉強するつもりです」

「感心だわね」と、妻君は夕餐の仕度に取掛つた。

食卓の話は綾之助の噂で持切つた。そして食事が終ると、妻君は今疊んだばかりの羽織を着て、佐太郎にも着物を着替させながら、「お錢は」と小聲で聞いた。

「あゝさうだ、おれは持つてないから、お前の中から出しとけ、明日は借りて來てやらあ」と云つて、妻君が長火鉢の引出に手をかけるのを見て、「其處も駄目だ〳〵、もうちやんと引上げたんだから」

「おや驚いた。明日前借りするつたつて、貴方、あんなに休んでばかりゐて」

「なあに大丈夫さ」と苦もなく云つて、眞先に戸外へ出て、「やあよく晴れてる、いゝ月だ」と、詩を微吟し始めた。

妻君は小さな毛糸の財布を出して、中を二三度改めながら、小首を傾け白目を寄せてゐたが、やがて得心したらしく、財布を帯の間へ挾んで、「時さんお待遠樣」と、續いて戸外へ出た。

時男はその財布までも不安な氣がしてならなかつたが、妻君はチョコ〱と先へ立つて急いだ。

「ぢや叔父さん、お頼みしたことは成べく早く極めて來て下さい、出來なきや出來ないで、外の方法を取りますから」と、時男は最後に深く釘を打込んだが、叔父の返事が如何にも張合ひがない。(をはり)



長詩二章

太田正雄

暮春調

ゆるやかに薄暮のほの白き大水盤に
さららめく、さららめく、暮春の鬱憂よ。
その律やや濁り、緑金の水沫かをれば、
今日もまたいと重くうち濕り、空氣淀みぬ。
おぼろかに暈して落日いま薄黄にけぶり、
青銅の怪魚の像、蒼白う鱗かがやく。

戀の子ら手を翳し、わりなしや、木の間をすきて、
大空ににじみゆく悲哀の淡藍色ながめ、
すずろにも胸いだき涙する時しもあれや、
ひそにさと、あな少時、窗もるるそぷらんの聲!!
『古き世の、古き世の愁ゆゑ絃しみだるる。』
『さば星の影明る彼の島に、いいい、してゑるの島に
わが小舟よせなむに、さどてさは歎ふと云ふ。』
『この舟の、この絃の、この戀の朽ば――と答ふ。』
花ちりつ、花ちりつ、灯にゆれて花ちりちりつ。
ともすれば深みゆく心の沈默うち擾し、
わかき日の薄暮のおおぼいいは泣きこそさぐれ、
石楠花の葉も垂れて、ああつひに怨恨ぞ暮るる。
かっしかっしむらむらばつと『時』の足、戀慕、なげかひ、
歌、小唄、樂譜の亂群黑みゆく丘を逃げかふ。
ああ暮春、その堂の錆びし扉は音なく潤れ、

西の空やや明かり、濃き空氣おぼめきたるを、
ただひとり今もなほ、ゆるやかに、さはれ悲しく
さららめく、さららめく、ほの青き鬱憂よ。

海の悲哀

夕、——日は沈みにたれど月いまだ
登らず。われら二人して默し歩めり。
潮にほふ岸のはたては
空氣凝り、冷かに市はかすみぬ。
浪の音ほのかに笑ふ。
こし方の郷に聞きたる唄、耳に再びきこゆ。

われら尙ほ語りも出でず。
いと重し。夜の狹霧は
更に凝り、果しらぬ砂道は、海は、
深傷に惱む巨人が憂の面、
さはれ、いと靜やかなりき。紫の其悲哀の
そが中に、あてに、仄に、遠船の黄なる燈火。

浪の音再び笑ふ。
されどまたなべては默す。
われ語り出でむ術なく彼の人もまた物いはず、
かくてまた此一夜、かく二人して
果しらぬ砂道を歩む。

長詩二章

吉井勇

酒宮へ

さる程に行列は、黒金の橋に懸りき。
日は眞晝。時は大夏。
濁りたる河の面に、たまたま落つる[illegible]のかげ。
眞先の水牛に跨がれる尖帽の子は、
我なりき。

何事か、大口に哄笑して行き過ぎぬ、
慵げに駛りゆく小蒸汽船のうすけぶり。

次に來る色赤き、土耳古帽。もそろもそろの
驢馬の背に鞭當つるたはれ男も、あな我なりき。
キユラソオの罎を振り、黄金の鞍も危し。

濁りたる河水に毒薬流し狂人の群。

續きし髪の雅びたる男は蒼き額を垂れて
惱むらむ。しかはあれ、可笑しや足も蹌踉と、
とざまかうざま亂れたる。
これも我。

そりから晝の月白く映りて消えぬ、河の面に。

あな次なるも我なりき。

乘れるはをかし、豚が曳く酒樽の車。
青き帽、青き服、青髭の我の姿は、
さながら酒の恐怖かと。
巽より風吹きて、逆さまに河水流る。

次の子も、次の子も、すべて皆我なりき。
幾百人の行列は。

かくて幽かに聽ゆるは都のなかの豹の聲。

『酒宮へ。酒宮へ。
バッカスの神ゐます、
酒宮へ。酒宮へ。
あはれはれ、酒宮へ。』

口々に叫びつつ、
騒ぎつつ、歌ひつつ、躍りつつ、狂ひつつ、
急ぎゆく。…………

此處にまた我ありて、行列をひとり見る。
背後には鐵橋が欠伸するものの音。

鷲の子

わが父は巖のうへに、
我を捨て空のあなたへ
飛び去りぬ。暴風の夜半の
海の城崩るる時に。

鷲の子はされど笑ひて、
その夜より絶えず歌ひぬ。
海の精。潮より出てて
もろともに戯れ遊ぶ。
或る時は角吹き鳴らす
トリイトン躍り狂ひて
群がりて岩をめぐれど、
我父は歸りきたらず。

或時は刧掠の船の
黄色の帆九つばかり、
おほらかに沖を過ぐれど、
我父は歸りきたらず。

かくて或る暴風のゆふべ、
漁夫の爺われを拾ひぬ。
云ひけらく。南の王の
あはれなる遺孤か。

さならずば海馬の稚兒か。
その白き髯を凝視めて、
なほ歌ひ續けたるのみ、
鷲の子とわれは答へず。
鷲の子とわれを知らねば、
新しき父は育てぬ。
われかくて人に來りて、
われかくて常に歌へる。

SONGS OF INSECTS.

Under the night of full breath,

Fired by the wine the golden goblet-moon spilt,
The insects are mad in their tremor of hearts:
There are a thousand voices of joy and dance,
But only one song of sadness and ghost.
O passionate song of ones, I believe, returned to the ground,
Now awakening to the sad songs they still left unsung!
The spirit of a song is never content till it is fully sung:
O the passionate songs of night and wounded heart,
Are they not the cry of my soul of fever and dream?

FOUR SPIRITS.

1st SPIRIT.

Into the leaves the spring of breeze strays,
I, with the bell rung, seek down the road of eve.

2nd SPIRIT.

The joy of the sea is that of Summer mist.
The rise and fall of tide is my prayer to the heart of song.

3rd SPIRIT.

Weaving a dress of journey, I'm Autumn spirit,
My way is where a leaf flies up to the sky.

4th SPIRIT.

I come down riding on the Winter snow,
Only to wait to be saved by the love of sunlight.

A CRADLE SONG.

Sleep, my love : your way of dream
By the fireflies shall be lighted,
That I gather from the heart of night.
Your father is off, good night,
To buy the honey from the stars :
The city of stars is away a hundred miles.
But by the dawn he will return,
Riding on the horses of the dews,
For you, with a drum as big as the sun.

THE LADY OF UTAMARU'S ART.

Too common to say she is the beauty of line,
However, the line old spiritualized into the odor,
(The odor soared into an averlasting ghost from life and death)
As a gossamer, the handiwork of dream,
'Tis left free as it flaps :
The lady of Utamaru's Art is the beauty of zephyr flow.
I say again, the line with the breath of love,
Enwrapping my heart to be a happy prey :
Sensuous ? To some so she may appear,
But her sensuousness divinized into the word of love.
Today I am with her in silence of twilight eve,
And am afraid she may vanish into the mist.

YONE NOGUCHI.

和歌選

○ 大石天裳

あゝ幾夜君待ちけるに眠らざる性とはなりぬ老いたるに似て

あゝ昔柱めぐれる其日より覺えし罪に君を誘ひぬ

君恐る心はつきぬ他に求め君をも捨てぬ心よりして

あから目の妖女らあまた黄昏の花の中より吾を見て笑む

悲は泣けるに厭きて泣かぬときそゞろより來る淋しき日かな

我か強いし罪受けませし君に厭きて饑ゑを覺えぬ淋しき夕

破れてはかたくなゝりし我性の淋しさを泣く日頃となりぬ

ほのかなる方に影してありしもの愁となりて逼り來る日よ

二人世に馴れてありぬと語る日を淋しさのみな集まりて來ぬ

時と世の外に吾あり子等はみな來よとて闇に死の神は立つ

あゝ二人燃ゆる思をはらからの隔つるさまに語る淋し

あゝ心毛蟲のごとく青きもの見て食まむとすあさましき日や

戀ひよとて男は强く戀はれよと女は弱き性に生れて

はぢぬやうなれるにあきていさゝかの饑を覺えぬ君を見つゝも

○ 關本梁村

返り花咲く一もとの老木にも似たりとおもふ思ひ得つる日

瑠璃に澄む木の間の空に一筋の光はありてわれを照しぬ

あゝわれの胸はかすかになつかしき寂しさおもふ夜の靜けさに

秋の空さ青のなかの濃みどりのなかに靜けきも

のやあるらし

偉ひなる人よと君におもはれむ願のあれば悲みに笑む

倦み果てぬよろこび果てぬ泣き果てぬかくてちひさき慰安を得ぬ

ふと醒めし其さびしさの眼をひらき闇をすかしぬをののきながら

ああ君よ君が涙のまた今日の如く流るる日をおもひ見よ

あまり野のひろきに立てば何となふ心に起る悲しびどもよ

われ行けばわれの前よりうしろより我呼ぶ聲すよろこびとせむ

わが胸はいとも靜かに來る日をいとも靜かに來る日を待つ

あゝ寂しなべての人にあざむかれあざむかれ居し日の戀しさよ

うたがひの心の胸にちひさなるうれひの影のさすさびしさよ

〇　山村龍子

倦み易きわれ逝きし子を今もなほ戀ふる心を誇らひてあり

君に似し人とかたりてわが心なぐさむるまで心うえぬる

乳よりも甘き涙に養はれ我が戀ついに大人となりぬ

かゝる時君の在はさば手を打ちて童の如く喜びまさむを

小春日や祖母がひざによる心地覺えて座しぬ枯草の上

喜びにつながる細きいとほそき絲を頼みて日をぬるかな

を見て心の中の戀と云ふ心たちまち大くなりぬ

戀故にあやまちしかど戀知りし日はふる里の如なつかしき

〇　青柳子

大海に石を拋ちさて得たる此の悲みの源を知る

われと別れ君はふたゝび北海の、氷い室に住ひ給ひぬ

君ありき瞳にうつる數人の、赤き火を吹く少女が中に

末法の國の少女等われをよぶ、あゝ敗殘の城に
入る時

我が若き瞳は常に君を見て、贅ずらく眼は北海
に似る

○　　井淵みたま

後のためよからぬことゝ思ひつゝみす／＼許す
弱きわれかな

いとつよき心とおもひたのみたる身をいまさら
に悔ゆる我かな

ひとゝきの望得たさに心にもなきと云ひてくる
しうなりぬ

つく／＼と思にふける日はすぎてたゞ老のみに
迫まらるゝかな

むくつけき人と思へどなにとなくうるめる眸の
心のこりぬ

○　　村田愛美

今にして君とむつみし稚き日をおもふに胸のこ
の冷たさよ

淋しさといふこと知らず二十四時こゝろの車君
を追ひゆく

君と乗る愛の小車かたことと人目の關をしの
かに行く

泣きはれしおん眼になほもの足らぬ心地おぼ
えて空仰ぎ居ぬ

み年さるに心許さずさはれまた背きてあるによ
ろろこぬばかな

○　　竹園磯草

草雲雀母懐かしき故郷の歌もてくらし遠島の家
（島にて）

かすれては雲飛ぶ日より青海のかなたの國に泣
く君をおもふ

海の青空の青見てひたなげく白鳥に似て心いた
みぬ

○　　川波律子

いささかの事ありし日やおどろきの眼してひね
もす物怖づる鳥

上目して物見る癖を君に見きつちに影こき初夏
の岡

君を得し刹那君をば見ざる日の心安さのふと胸
に湧く

○　　木春洋

何ものか我れを壓するかく覺え月の巷をうなだれて行く。

海見れば心なごみぬあたゝかき唇吸ひしその日を思ふ

○ 鎌田雅美

ふとあひし瞳そらして空笑みす君にしあれどなつかしきかな

○ 管原喜代藏

なに思ふ事ともなしに心みな一つに念じ胸さわがする

○ 管原迫村

別れてふあやしき時は君と我か快樂の領に襲ひきたれる

美しき御聲の中に此の門出をしむ袖に秋風わたる

○ 千葉高軒

そのかみの若き思ひを辿りては頭も重う秋の日暮れぬ

○ 芝野花

單調に倦みぬ心は何物か欲りするらしき秋日和かな

○ 三溝三星

蠟燭（ともしび）の炎は夜半もきえうせてなみだのあとのうづだかきかな

○ 野の衣

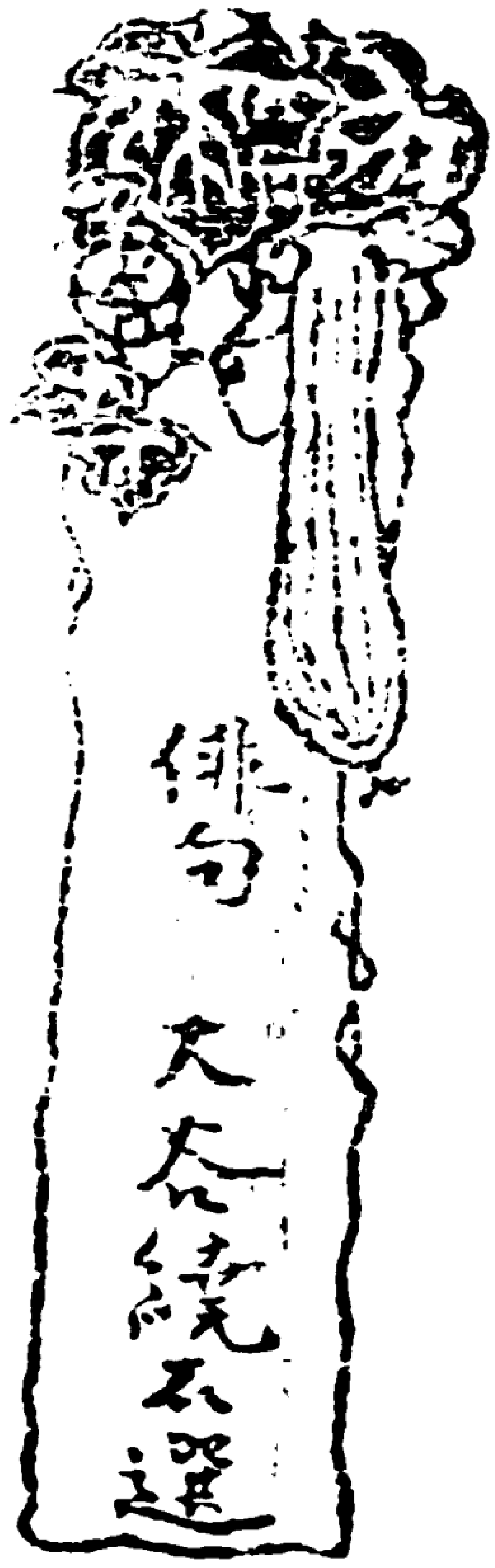
われはなく豆がらを食むけだものゝそのこれにゐてかへるすべなし

○ 岡積臥牛

けふも又戀を得ざれば空車ひきてかへりぬいと力なく

○ 太田生麥

天（そら）はつゆ秘すべき事もあらぬさまされど病むらしその蒼さ見よ



冬田

こゝらまで阿蘇の灰降る冬田哉　　へき
狐追ふ犬の後くるゝ冬田かな　　同
藻屑焚く島の小村の冬田哉　　同
雨降れば鴨鳴く夜ある冬田哉　　同
穢多村の聾火事見ゆる冬田哉　　同
畔違ひ僧と犬行く冬田かな　　同
流木を引きあげてある冬田かな　　同
煙毒のこゝ迄及ぶ冬田かな　　同
冬田越しに見る白壁や朧寺　　起堂
枯尾花の川十手長き冬田かな　　石頭眠
稲船の打捨てられて冬田かな　　竹風
木母寺ハ冬田にうつり月夜哉　　錦江
冬田流柴荷炭荷の往来かな　　白花蛇
村境冬田の畔の並木かな　　溪外

隼の鶴搏ち落とす冬田かな　　火箭
大江山生野の道の冬田かな　　仙山
道造ると打つ杭古き冬田哉　　黄柚
冬の田や案山子の骨の十文字　　平凡骨
くねり道千住へ出る冬田かな　　梓水
近道や冬田の畦の片さがり　　抱虎兒
吉原の灯遥かに冬田かな　　淺水
一谷の落葉吹きよる冬田かな　　篁月
盗人の追はれて墜ちし冬田かな　　布哇 知風
目の廣き會津平の冬田かな　　杏所
塚幾つ冬田に冷えて見ゆるかな　　穂驟雨
學校の敷地となりし冬田哉　　春溪
日は山に雁は冬田に落らとんす　　靜貝
山沿の家十許り冬田かな　　枕橋
雁立つて水田に月の亂れけり　　蘆江
蜜柑畑垣根の外の冬田かな　　人生
打ち〳〵て牛追ひ入れし冬田哉　　古郷
鮒取りの荒して寒き冬田かな　　小茶
蟻塚に鴉啼き居る冬田哉　　枯葉
街道の三々五々に冬田かな　　月耕
から〳〵の馬糞の道や冬田原　　黒星

鳥一羽鳴かで渡りし冬田かな　茶童
獵人の犬先きだてゝ冬田かな　花瓢
祭から土俵のまゝの冬田かな　千曲
鶺鴒のいつからか來て冬田かな　雙嶼
縱横に干割れ〳〵し冬田かな　背南
家二軒の垣根につゞく冬田かな　如山
人力を荷車避くる冬田かな　寒山老
道ばたに糞あり〳〵と冬田かな　李雨
網の如き冬田の畦を見はらしぬ　紅梯梧
朝霜のまばゆき冬田日和かな　石人
銃音にパッと鳥立つ冬田かな　喜久
月うすく冬の田面を照しけり　木蓮
乾田の御觸届かぬ冬田かな　奇溪
姥捨の冬田淋しき夜汽車かな　霞洋
射落とせし鳥探し行く冬田かな　白有
柏の木に落日寒き冬田かな　藻川
島原へ冬田拔けしも昔かな　吟朗
村校の窓の下なる冬田かな　鳴象
土手並木に風吹き募る冬田かな　不言
冬田而案山子は棒となりてあり　春濤
藁塚のくづれて殘る冬田かな　キヌ村

澤近き此處ら鴫居る冬田かな　太郎
寺の森へ鳥が急ぐ冬田かな　哲郎
鶺鴒の夕日に光る冬田かな　花舟
温石にぬくもる臍や冬田道　鹿の子
犬驅けて鳥群れ立つ冬田かな　不子
島原の火事に明るき冬田かな　其蜩
首塚の枯草映る冬田かな　木犀
街道の馬糞吹き散る冬田哉　壺人
藪寺へ稀れの葬儀や冬田道　偕葵子
聽法の人歸るかな冬田道　鯨舟
水堰きて芥しがらむ冬田かな　秋灣
禁獵の札立てゝある冬田かな　三聲
早駕の城下を出てゝ冬田かな　桃紅
徑通ず冬田の中の塚一基　初聲
水きれぬ長者堤の冬田かな　伍平
葛哂す水落ちて行く冬田哉　骨童
晴れ渡る冬田や鶴の聲もがな　鬼子房
あらはなる畔路遠きか冬田な　同
落つる日や冬田の果の竹林寺　嵐舟
町はづれ郡部となりし冬田かな　同
村塾の荒垣見ゆる冬田かな　桃華

義仲の馬荒れ狂ふ冬田かな　桃華
近道にふみかためたる冬田かな　刀川
村費の後は廣き冬田かな　同
獵犬は冬田を主は往來を　梨山
打上の旗落ちて來る冬田かな　同
親溝も子溝も涸れて冬田かな　胡角
水塚の影斜なり冬田尻　同
楢枯木冬田の隈を寂しうす　天唖郎
山本の里は晴れたり冬田原　同
隣村の火の見あらはに冬田かな　朝影
歌枕たづねて來れば冬田かな　同
年々に家減る村の冬田かな　吼天
畑とび／＼冬田々々の水寒し　同
里の子の氷ふみ行く冬田かな　木瓜
電柱の冬田に寒くうなりけり　同
冬田つゝと通り行く人の顧みず　草童
潺湲と何處に水鳴る冬田かな　同
眞落としに比叡山颪冬田哉　青葵郎
火の子降る冬田や巨刹焼け落つる　同
山落葉溜る冬田の四隅かな　尺水
富士見ゆる冬田の中の住居かな　同

赤錆びし田螺の殼も冬田かな　青城
美濃尾張こゝに岐るゝ冬田道　同
犬行くや屯田村の冬田道　花星
雁下りる比叡の日影の冬田かな　同
冬田道藤樹の門に通ひけり　同
天王寺の銀杏散り來る冬田かな　波弦
干鮭といづれ冬田のからびかな　同
朴林に隣る冬田の落葉かな　同
白壁の長者が構へ冬田かな　静阜
昨日からしぐるゝ背戸の冬田哉　同
火葬場の煙突高き冬田かな　同
鴫網や冬田の關を人走る　月蟾
萬頃の冬田榛の木ところ／＼　同
手負猪追ひ込んで突く冬田かな　同
橋越せば葛飾の里冬田かな　麥花
森見えて煙突見えて冬田かな　同
火葬場へ行く人三五冬田哉（三河島）　同
汽車下りて町まで遠き冬田かな　春陵
東京の空は煙濃き冬田かな　同
午砲遠くきく柴又の冬田かな　同
山門へ一徑通ず冬田かな　湖村

叔母許へ冬田の徑迴りけり　樹村
坂に沿ふて幾段々の冬田かな　同
國分寺へ道一筋の冬田かな　柿陽
野鳥の人におぢざる冬田哉　同
島原は冬田のはての灯かな　同
棒杭に鳥鳴き居る冬田かな　槐山
隣村へ新道つきし冬田かな　同
役場から退けて歸るや冬田道　同
汽車の窓冬田の風に閉ぢにけり　游翁
前は沼後ろ冬田の番屋かな　同
隣村の火事にあかるき冬田哉　同
移されて冬田の國の陸奥ノ守　華星
町を遠れて鍛冶屋一軒冬田かな　同
村と村遠く離れし冬田かな　同
放れ鳥冬田となりて人住まず　同
月の暈の下の冬田の水眠る　茶青
山の雲冬の田面に吹かれけり　同
冬田見えて下る山路の險しさよ　同
兩側の冬田や町へ急ぎけり　同
足痕の深く斜に冬田かな　柿山伏
二股の川に窄まる冬田かな　同

痩犬の何咬へ去る冬田かな　柿山伏
吾が門に盡くる冬田の一路哉　同
段々に涸れし涸れざる冬田かな　方外
鼎立す三つの御陵や冬田原　同
山裾や冬田を前に家二三　同
雁一夜發して去りし冬田哉　同
枯蘆や舟から上る冬田道　盛花
遠火事の冬田の水にうつりけり　同
放れ馬追ふや冬田の畔傳ひ　同
門前の松たゞ青き冬田かな　同
冬されば鶴ぞ鳴く狹田長田哉　美島
焚火して冬田に獵の晝餉かな　同
塊の光る冬田や霜朝日　同
津輕富士晴れて麓の冬田かな　同
鷲宙に射られて落つる冬田哉　梁存
泥深き冬田の水の澄みにけり　同
鳴が來る冬田の中の小沼かな　同
右は山左冬田の道直し　同
峠越して人見ぬ冬の山田かな　同
泥炭が出ると堀り居る冬田哉　鱗洲
學校の白壁劃す冬田かな　同

蘭の屑を焚き捨つ冬の門田哉　鱗洲
行迷ふ蜘手の路や冬田原　同
石標や冬田横ぎる名所路（洛外）　同
吉原の甍が見ゆる冬田かな　鬼洗
渡船場へ近道横ぎる冬田かな　同
千松原潮風荒ぶ冬田かな（沼津）　同
品川をすぎて大森冬田かな　同
小停車場新に建ちし冬田かな　同
この堤江戸まで續く冬田かな　同
洛外のあちこちの灯や冬田原　秋紅蓼
尿して冬田の路を急ぎけり　同
寺の杉黒き冬田の月夜かな　同
冬田道淋しく通る巡査かな　同
冬田晴田舍人力通りけり
小松原冬田が少しありにけり　同
此町のどの口出しも冬田かな　石鐘
柚子黃なる籬に見えて冬田かな　同
學校の吹き曝されて冬田かな　同
鷺の刈株にとぶ冬田かな　同
大島の畔に物食ふ冬田かな　同
鷺るゝ子におとし置く冬田哉　同

道崩れて冬田の中を馬往來　豐川
草鞋店と賴み來て非ず冬田道　同
積藁の尖りて並ぶ冬田かな　同
屠牛場へ牛曳いて行く冬田哉　同
小高きに葛原見ゆる冬田哉　同
冬田原橋の普請木積み古りぬ　同
山伏を追ひ吠ゆ犬や冬田原　同
一人客下りて馬車返す冬田哉　同
ねらひよる冬田の鴨や二羽たゞし　碧雲居
斜かけに道と踏まれて冬田かな　同
積藁に鳥なきよる冬田かな　同
大根引かへる冬田の一路かな　同
用なしの君は冬田の案山子かな　同
掛稻の杭ぬき去りし冬田かな　同
鳴子繩くちしがまゝの冬田哉　同
狐罠かけて暮待つ冬田かな　同
狼と見る瘦犬も冬田かな　同

本號應募者總て百拾七名、句數二千四百八十一句、殆んど空前の盛況なり。應募句數の多かりしは、篁月氏の五十八、背南氏の五十五、波弦氏の五十三、鬼子房、槐山、石鏑氏の五十づゝ、仙山氏の四十五、艸川氏の四十四、麥花、鱗洲二氏の四十づゝ、黃柚、梨山二氏の三十九づゝ、花舟氏の三十八、美島氏の三十七、茶童、柿山伏二氏の三十四づゝ、茶背、碧雲居、鬼洗三氏の三十三づゝ、黑星、盛花、靑城、秋紅蓼四氏の三十二づゝ、溪外氏の三十一、一雫、靜貝、柿腸、尺水四氏の三十一づゝなりき。

募集課題　手　鞠　十二月十日締切
　　　　　出　代　一月十五日締切

應募俳句は加賀國金澤市櫻畠九番丁十九番地大谷正信宛の事、また必ず締切日までに到着するやう郵送さるゝ事。

仙臺澁翁氏に白す、貴稿に添書の件拜承。宇佐兩李氏に白す、以後封筒に留意されたし。直江津桃紅氏に白す、御序の節御本名御洩し下されたし。



電話使用料度數制に對する當局者と新聞紙との態度

野　逸　道　人

僕は一介の書生であつて、政治上の實際問題には何等の智識を持つて居らぬものである。然るにも拘らず、實際問題について嘴を挾さむと云ふのは烏滸がましき限りであつて、自から顧みて心耻しくも思はるゝ。が、所謂岡目八目と云ふ事もあるから、局外者、傍觀者の評言時に多少の參考になる節がないとも限るまいと思

ふ。茲に電話使用料度數制に關する當局者と新聞紙との衝突を評論せんと思ひ立つた所以てある。

詳しい事は一向に知らぬ。電話の數がいくづあるか、其收支は幾何であるかと言ふ樣な現在の電話の狀態も知らぬ。又度數制に就ての細かい事も全く知らぬ。只だ新聞紙に依つて報導せられた記事を讀み、先輩知人に逢つて聽き取つた事柄を綜合して見れば今度の改正の要旨は、電話を使用すべき數を一日いくらと極めて置いて、それ以上使ふ者には一回一錢若くは一錢五厘の料金を課する。かくして一年六十萬圓の增收を得たいと言ふ事にあるらしい。

六十萬圓の增收を得んとするのは何の爲めてあるか、之れを以て電話の擴張を圖り改良を圖る爲めてあるか。但しはまた其の增收を一般歲入若しくは電話以外の或る特定の費途に充つるが爲めてあるか。當局者の所置に慊らざる人は云ふ。どうせ桂內閣の遣る事ではないか。假令六十萬圓の端金でも電話の料金から遣り繰りして、この苦しい財政の難局から幾分でも遁かれたい氣に相違ない。併し僕はそれは余り酷い評ではないかと思ふ。矢張其の增收は電話の擴張改良等の費用に充つる事であらうと思ふ。今日電話の架設を申込んて許可せられざるものは澤山ある。お話中や混線で用事の辨ぜぬことは屢々である。擴張も改良も一日も忽にす可らざる必要に迫られてゐる。或は今度の制度改正を以て屬官等が後藤遞相のお目に留ろうと思つて献策したものであると云ふ人もあるが、それはさうかも知れん。併し後藤遞相が其の献策を容れて實行しやうと決心した上は最早遞相の意見と見てもいゝ譯である。人氣取に妙を得てると噂せらるゝ後藤遞相が不人望な度數制度(尤も賢明なる遞相も箇程迄激烈なる反對に遇ふとはよもや思ひ掛けなかつたろうか)を實行して其の增收を緊急の必要に迫られて居る電話の擴張改良等に用ゐず。其れ以外の費途に充てんなどゝは僕の信じ能はざる所てある。若し果して僕の想像通り其の增收を以て電話の擴張、改良等に用ふると云ふとてあるならば、度數制度の得失は未だ論ずるの餘地があ

るとしても、僕は兎に角增收を圖ると云ふ一點には同意するものである。

が、併し若しさうであるならば、何故明かに聲言せぬか。電話はどうしても擴張せねばならぬ、改良せねばならぬ。これを擴張し改良するには費用が掛る。外に費用を得る見込みないから、暫く度數制を採用して其の增收で以て其の費用に充てる。不平な方もあらうが國家全體の通信機關を擴張し改良するとてあるから一時の犧牲になつて貰ひたいと正面から堂々とやッつけたらよいではないか。それを、ヤレ公平だとか、不公平だとか妙な理屈を擔ぎ出して、恰も公平不公平が目的であつて、增收はあつてもなくても構はないと言ふやうな風を粧ふのは、陰險なる小政治家の好んてなす所にして公明なる大政治家の敢てなさざる所なりと思ふ。この點は後藤遞相に取つて惜しむべきとと思ふ。

飜つて此の制度を攻擊するもの丶態度殊に、攻擊者中の最も有力にして且つ最も激烈なる攻擊者たる新聞紙の態度奈何と見る。僕は之に對しても推賞の辭を呈するを躊躇するものである。彼等は云ふ。電話の如きは公共的通信機關であつて、當局者は寧ろ人民の一回でも多く使用するとを奬勵すべきである。これに使用料を課するが如きは其の使用を禁止するも同樣であつて公共的通信機關の性質に反すると夥しい。また當局者は詰らぬ用事にも電話を使用するとを難ずるが、元來電話と云ふものは重要な用事よりも重要ならざる用事に用ふべき性質のものである。重要な用事ならば態夫か若しくは直接自身で辨ずべきものて、電話は寧ろ閑なら遊びに來ないかとか、之れから押掛けるが都合がどうだと云ふやうな事に用ふべきものである。極言すれば詰らぬ事に電話を使用する數と正比例して、電話の發達をトすべきものである。況や新聞社の如き最も煩雜なる事務に電話を使用するが如きは、これぞ即ち電話の架設の本來の目的であつて、これから多くの料金を徴收せんとするが如きは、全く電話の性質をさへ知らぬものである。吾等をして言はしむれば、曰く

一回か二回しか電話を使はず、只た見得のために架けて置くやうなものからこそ罰金として多くの金を取るべきてある。公平不公平の議論の如きは全く電話その物の性質を解せざるより出てたる愚論にして噴飯に堪えざる事てある。況して度數制の如き煩雜なるものを採用したならば、その度數を算する費用丈けでも大したものであらうと云ふ。併し乍ら此の最後の議論の如きは全くノンセンスである。度數は度數を算する器械夫れ自身が算する。何等人間の手を煩はさない。只た月の終りに器械夫れ自身のあらはして居る回數に一回の料金を乘ける丈けて濟む。だから煩雜云々の議論は議論になつて居ない。それから通信機關云々の説は説としては成程尤な説てある。けれども若し此の説から割り出せは、汽車の如き交通機關も、その距離の長短に拘らず、同じ料金を徴收していい譯てある。否、長距離の人は汽車本來の目的に叶ふから、廉くして短距離の人を高くすべしといふ論になる。否、利用すれば利用する程その物本來の目的に叶ふから無代價でやつた方がいゝと云ふ論になる。電車然り、電信然り、郵便然り。凡ての公共的通信交通機關無代價説となる。現に社會主義の人、其他これを主張する人少くはない。僕等も無論さうして貰ひたい。けれどもそれが出來ず、今日の如く電車は一回每に（距離の長短に拘らず同一代價なれど）料金を取られ、電信は字數によつて、汽車は距離によつて、郵便は重量によつて、其料金に高低の差ある以上は、今日の交通通信機關料金の高低は、その使用者の利益を受くる程度と正比例をなして居るものと言はねばならぬ。この一點より觀察すれば、電話料金を使用回數に應じて徴收するの一事のみ必ずしも深く攻擊の材料とせらるべき筈はなく、道理上は寧ろ正當の事と言はねばならぬと思ふ。只た併しながら今日の電話加入者の得て居る權利――即ちその使用度數の如何に拘らず同一の料金て濟むと云ふ權利――は彼等の既得權てあつて當局者は濫りに既得權を害し得ざる者てあるから、彼等は此一點を以て抗すれば抗し得るのてある。吾等は其の使用度數に拘らず、

いくら〳〵の料金てやつて來た。今突然度數制などにされては迷惑この上もない。吾等は既に得て居る吾等の利益を保護するがためにこの制度に反對する。と何故ハッキリと男らしく言ひ放たぬか。それをヤレ通信機關の性質がどうだとかかうだとかと言つたり、ヤレ煩雜の制度だとか言つたりして、正面から切つてかゝらぬのは、如何にも淺間しき事と思ふ。

つまり當局者も新聞紙も本當の理由をソッと後ろに隱して置いて、前には妙な理屈を揑ねて掛引の喧嘩をして居るのである。僕は天下の政治を行ひ、若しくはそれを議する人士の今少し公明正大、正々堂々たるを望むの情に堪えぬのである。

僕のこの文に言はんとする事はこれて盡きたが、此の問題は僕の玆に論じた事よりも、論題としては更らに興味ある一事を含んで居る。何ぞや。當局者と新聞紙との力比べ之れてある。後藤遞相が如才なく振廻つて、之れ以上の名案が出たから、吾輩の自說は撤回する、アハヽヽと言つて撤回するか、若しくは何處迄も我慢を張り通して、これを實行するかは、實に此兩者の力の優劣を判ずる試金石であつて政治的觀物としては最も興味あるものゝ一つと思ふ。而して此問題はまた明治四十四年に起るべき關稅制度の改革に當つて、外國輸入の紙に課する稅率を定むる時にも多分起るべきものであつて、これを研究する事は興味あると共に、有益なる事であるが、僕の論ぜんと思ふた主意以外の事であるから略する。（完）

蕪村の冬の句

寒月や鋸岩のあからさま
化さうな傘かす寺の時雨哉
鰒汁の宿赤々と燈しけり
狐火や髑髏に雨のたまる夜に
楠の根を靜にぬらす時雨哉



歌舞伎座と市村座

醉美生

舊劇の十一月興行て見るべきは無論歌舞伎と市村座とてある。歌舞伎は幹部委員の出し物をズラリと並べて景氣を附け、市村は吉右衞門、菊五郎の流行ッ兒を招いて客を呼んで居る。

歌舞伎の序幕、「景淸」は高麗藏の出し物で、高麗藏近來の上出來、顔見世として並ぶ他の俳優を呑んで了ふ程の出來榮であつた。殊に牢中に於ける科白廻は大きくしてユトリもあり、此三四年來高麗藏の將來を悲觀して來た僕をしても高麗藏亦捨つべからずとの感を起さしめた。こういふ荒事にかけては何といつても今の所高麗藏が一等旨いと思はしめた。一番目の「三國無双瓢軍扇」は四幕とも何等の連絡統一なく劇としては誠につまらぬもの、宗十郎の左馬之助何等の妙味なく、八百藏の齋藤利三、病に罹つて乳母の家に立寄りし處暫々見直したれど子息伊豆守（羽左衞門）と別るゝ所は例の一本調子のヌッとしたもので一向に詰らなかつた。殊に左馬之助の場も、八幡河原の場も、乳母宅の場も皆馬が出るので、或見物人が馬匹改良會のやうだと皮肉を言つて居た。只松助の乳母は藝、神に入り見物の溜飲を下げしめた。本當の名人といふは今日の所先づ此人なるべし。宗十郎の百姓大助も餘り惡くなく仕て居たり、僕は左馬之助などより此方がよいと思ふ。

大詰の大德寺はもとより大舞臺。序幕と共に歌舞伎ならねば見られぬ壯觀なれど、猿之助の柴田勝家は先生師直をやつて居るやうな氣になつて見え、八百藏の瀧川一益、芝翫の玄以法印、梅幸の前田利家何等の働なく、高麗藏の佐久間玄蕃顔の作りもよく、又大に活動すれども之れ又藝に旨味あるてもなく、羽左衞門の秀吉、此人の出し物なれど持て生れた顔の造作、身體の恰好、祟りをなして重味なく、聲もよく通れど威嚴に缺け、「無禮といふこと心得居るかッ」と怒鳴るあたりは馬鹿に見苦しかつたり。此作其物已に下劣な、くだらぬ、人物を小さくしたものなれど、俳優の腹があれば今少し何とかなり相だが、ならざりしは情けなし。

中幕「戻橋」は梅幸と猿之助の出し物。振事の巧みな二人の事なれば惡いとは無論いへぬが、一方は鬼、一方は切る氣だといふ事をウルサイ程見せるのはイヤ也、精々て二度位て止めて欲しい。一度も見せなくても番附を買つた見物は一方は鬼て、一方は切る氣て居るといふことを知つて居る也。但し宙に釣上げられてからの二人の形は大變よく、猿之助の摑岙屋根の上に落ちた形もよし。

二番目の「大内鑑」。芝翫の出し物なるが、葛の葉は感服せず、此前の「女歌舞伎」の桐大内藏などに比べては見劣りすること夥し。高麗藏の惡右衛門餘りに道化染みて惡るく、僅かに松助の庄司、吉右衛門の奴が異彩を放てるのみ。

市村座で菊五郎の出し物たる御所の五郎藏は亡父がこしらへて一度も着なかつたといふ衣裳を着た所はよけれど科白はあの締りなきダルイ調子て、些もシャキリした所ないのてイヤになる。あれは矢張り羽左公のやうにやらなくては駄目だ。粂三郎の土右衛門はボウとして大きい丈けて、何等の取得ないが見た目は立派なので或は此方が優しかとも思はれる位だ。全座で見るべきは矢張り吉右衛門の熊谷。僕が豫期した程には出來なかつたが、先づあの若さてあれ丈けやれるのはエライといはればならぬ。打入の場ては取立てゝいふべき程の佳所もないが組打の場で黑馬に跨り、紫の母衣に風を孕ませて驅け込み來る赭面の熊谷。遙かなる海中を望んて「其處へ落ちさせ給ふは平家方の公達と見奉る」と呼びかけ、「かく申す某こそは武藏國の住人士の黨の旗頭熊谷の次郎丹治直實なるぞ……」と呼び、扇を上げて「オーイ〳〵」と呼び戻す邊りの勇ましさ凛々しさ、心地よしとも心地よし。又敦盛(實は直家)の首を打てからの仕草、一々沈痛なる悲哀をあらはして上出來。只此、「一谷嫩軍記」其物は見物を二重に歎くやうに出來て居るので、芝居の中に又芝居あり、馬鹿々々しき氣もするのは役者に取て大いに損な譯也。粂三郎の玉折姫、見た目如何にもヒステリー的也。而して今はの際に敦盛の死首を頰にあてゝニコリと笑ひ給ふ。當人は大いに出來した積りだから可愛相なもの也。翫助の平山、上の出來、三津五郎の直家、敦盛(實は直家)共にイヤ也。陣屋の場にて芙雀の相摸。女寅の相摸などを見てからは見られたものてなけれども若手にしてはあの位のものか、吉右衛門の熊谷の花道の出は、少し俯向けるのみにて首を左右の何れへも曲げざるは哀感薄き心地す。之れは矢張り芝翫の如く少し左へ曲げたる方よしと思ふ。又珠數をかけて來て、「思を胸に」のチョボて袂に入れるは團洲の型か何かは知られど少し小細工に過ぎるやうに感ぜらる。但し「一度の相摸を尻目にかけて」てちよと振向けるのみにて、芝翫の如く、木を入れて、グッと振向かざるは仰々しからずしてよし。藤の局に三段に低頭平身する處、充分に大きくやりて大向ふの喝采すばらしきものなれど僕等には少し大仰(おほげう)に見え、「誰彼の容貌がならうかッ」て局の切てかゝるにビックリして手を後ろについて身をそらすは熊谷を小さくすること夥しく、最もイヤに感じた缺點也。相摸が局を「御卑怯な、御未練な」と諫め勵ますを聞いて、「ム、出來した。〳〵」と腹に一物あつていふ呼吸は現今の萬俳優中此人一人より出來ず、又「十七年も一昔、アヽ夢てあつたなア」とシンミリさせた處流石は吉右衛門、芝翫が剃髮してからは尼さんになつて了つたとは天地の相違。お若い所のチョイ〳〵見ゆるは年の罪、是非なしとして襃めてやつて差支なし。勘彌の義經「爺や健固であつたか」で一寸羽左公を摸したのは愛嬌、駒助の彌太六、聲を高調子にすればイヤな嗄れ聲になるは疵、だまつて居る時に終始頭を振り目をセク〳〵させて年寄な

あらはさんとしたる心遣、神妙と褒めて遣はす。竹三郎の梶原は困つたもの、紋三郎の軍次、少々色男を氣取り過ぎ、高麗三郎の局、例によつてかつ響の立たぬは氣の毒なりき。中幕の「車曳」、三津五郎の「存分いおうぢやおんめいーか」と聲を大きくしやうとすればする程人物が少さぐなるは困つたもの、駒助の松王、顔のつくり惡しく、又「ありがていどさんぺいなし」（時代がまはぬ關東言葉は此人、此劇に限つた譯ではなけれどが）

ば耳に妙に響いてならなかつたり。然し何といつても舊劇では此二つ、第一番見應あり、好劇家行て見るべし〳〵。（完）

子規の冬の句

鷺の羽に薄雪積る靜さよ

水仙の蕾に星の露を孕む

星冴えて篝火白き砦かな

新刊批評

島崎藤村著 籾山書店發行

▲春

明治廿六七年頃の新思想を抱ける青年社會を描いたもので、主として「文學界」諸同人——北村透谷、著者自身、戸川秋骨、平田禿木、星野天知、馬場孤蝶等——をモデルとして使つたものらしい。而して其仕手主もなる役割を勤めて居るもの——は透谷と著者であらうと思はるゝ二人で、他は脇師となつて居る。此小説が「朝日」新聞にあらはれた當時は一向氣乘りのせぬ作物で、實は中途で止めて了づた位であつたが、一册の書になつてから通讀して見ると、ユトリがあつてコセ〳〵せぬ書振の中に、いふべからざる情趣を含ませ、成程藤村は大家であるとシミ〴〵感じさせる。我輩は新體詩人的筆遣ひ及び空想の多い「綠葉集」中の作物にも少しイヤケが差し、又「破戒」にも餘り感服せず、「並木」「黄昏」扨ては最近の「壁」「收獲」にも動かされず、一言にしていへば小説家としての藤村をば未だ崇拜する能はざる一人（新體詩人としての藤村には隨喜渇仰の情を捧げたる事あれど）であつたが、此「春」では全く感心して成程藤村の小説は實にいゝ處があるとつく〴〵感じた。勿論局部〳〵の描寫及び言葉遣には感服されぬ處が數へ切れぬ程澤山ある。直譯らしき洋文脉の背振り、直截ならずして廻りくどき形容、洗錬せられざる語句の排列、吾輩には如何に贔負目に見やうとしても、どうしてもイヤに感ぜられる。而し其等の缺點を包んで全體は實にユックリした處があり、又フレッシュな處があり、對話の及び難き情趣が溢れて居る。第二十二、三、四章等の感じ、又終りに近き方の書き方などは實に何ともいはれぬ

位よい。「春」を讀むといふやうな題で、長所と缺點と細かく論じて見たい所、今は暇がないから、只ザッとした感じ丈けを述べて置く。獨り藤村作中の最も優れたるものなるのみならず今年出た長篇中の最も見應へある作である。（定價九拾錢）

▲生　田山花袋著　易風社發行

藤村の「春」が「朝日」に出てしより僅かに一週間ばかり後に「讀賣」に出初めたもので、當時新聞小說の兩大關として是非の評なか／＼喧しかつたものである。終るには「春」よりも餘程早く終つたが、本になつて出たのは「春」よりもずつと晩い。編輯〆切に間近く寄送を受けたので、未だ通讀の機を得ぬが、之れも通讀したら定めてよい作であらうと思ふ、新聞に出た時は三分の二ほど讀んだが、「春」よりは遙かに／＼面白く讀んだ。之れを精讀して「春」と比較したら實に面白からうが、前にいつたやうな譯で通讀せぬから次號まで預ておく。次號の「戊申文壇回顧」で委しく書く積りである。（定價九十五錢）

▲チエホフ傑作集　瀨沼夏葉譯　獅子吼書房發行

チエホフの傑作にして且つ比較的長篇たる「六號室」を卷頭に、短篇十二篇を收め、添ふるにドストエフスキーの「薄命」一篇を以てせり。而して「六號室」を除く外英譯の「ブラック、モンク及び其他の短篇集」中になき故、讀書壇には珍らしきもの也。故紅葉山人の激賞せしとかいふ「月と人」「寫眞帖」などは吾輩には一向面白からず、又「人影」「たはむれ」などは讀んで見て面白い處もある代り、又我等の胸にシツキリと合はぬ所もあるやうなるが卷頭の「六號室」丈けは其心理描寫の精細、全體の陰鬱なる空氣誠に文壇の珍とすべく、初めの部分は不自然に感ぜられ、若くは餘りに胸に響かぬ心地するが讀みゆく中、いつしか作中に引つけられて、頻りに胸を壓せらるを覺ゆるは確かに天才の筆といふべし。其他の諸篇は未だ讀まず。譯文は餘り感服せぬが、まづいといつては少し酷なるべし。白鳥氏若し露國に生れしならば必らずチエホフの如き作家となりしならんと思はる。（定價九十錢）

▲小說血寫經　堀內新泉著　成功雜誌社發行

新泉氏の短篇八篇を集めたるもの也。文藝上嚴密なる批評に遭はゞ、隨分批難もあるべけれど、槪して健全なる思想を通俗に書きあらはしたるもの、文學專門ならざる青年の讀物としてよし。（定價四十五錢）

▲報德の眞髓　留岡幸助編　警醒社發行

二宮尊德翁に關する諸大家の論文、講演、詩歌、文章等二十篇を集めたるもの也。二宮翁の崇拜家又は研究者には好き讀物也（定價六十五錢）

▲子規句集　瀨川疎仙編　文山堂發行

瀨川疎仙とは俳壇で名ある人かどうか吾輩は知らぬ。題言を見ると、子規の句に趣味を持て、子規の句を澤山書き止めて置いた人らしい。けれども此人は俳壇の事情には餘り通ぜぬ人に相違ない。何故かなれば今日迄子規の句集は一つもないといつて居るが、現に子規自選の「獺祭書屋俳句帖抄」上卷が出て居るし、又子規自選のものに虛子碧梧桐選擇のものが編纂して出版する準備も略ば出來て居るらしい。其れを知らぬのか、若しくは知らぬ振りをして居るのか、其事を一言もしてないのはチト可笑しい。又子規の多方面なりし事をあらはさんが爲めに、佳句秀吟をのみ集めず駄句凡吟を除いた丈けの飾りのなき子規句集であるとは編者の言である。其選擇の當否は俳句專門家ならぬ我等の評し得る所でない。（定價參拾錢）

▲模範名家俳句大成　　沼波瓊音編　東亞堂發行

俳句に關する著述の甚だ多き沼波瓊音氏が杜南氏の助けを得て俳諧發端の時代より明治の今日までの大家（故人となりし人のみ）百名を選み、各其名吟を春夏秋冬に分ちて編し、其句の前に時代、年代、門派、號、編著書名、並に小傳等を附したれば、俳句を研究する人にも、又之を愛讀する人にも極めて都合よき書也。俳諧に興味ある人の歡迎を受くることなるべし。（定價一圓廿錢）

▲チヨンブル及び其郷土（下卷）　　草野柴二譯　中西屋書店發行

十月の誌上にて紹介せしものゝ續きにて此卷を以て完結す。マツクス、オーレルの觀察の奇警にして文章の面白き皆人の知る所、此書殊に英國の風俗人情を穿ち得て頗る興味あり。我官私學校の教科書として採用する處の多き亦故なきにあらず。此書原文及び註釋をも附したれば英文研究者には殊によき讀物也。（定價六十錢）

▲梁川書簡集（上卷）　　綱島梁川遺稿　警醒社書房發行

故梁川氏の親戚、知人朋友等に送りたる書簡端書等を集めたるものにして此上卷には明治二十九年より明治三十八年までの分を載せ、下卷には其以後の分を載する害なりといふ。讀みもてゆけば梁川氏の温情、友愛、敬虔、謙虚、眞摯、誠實悉く此中にあらはれざるなく、今更らに此哲人の純清なりし靈魂の此世を去りしを嘆惜せざる能はず。文章亦佳麗にして清高。單に文學的產物としても實に出色の讀物也。況んや此哲人を研究するの資料としては絕好無二のもの、深く之を江湖に推奬す。卷頭の「綱島榮一郎年譜」亦梁川研究者にとつて缺くべからざるもの也。（定價一圓十錢）

▲豐太閤　　山路愛山著　服部書店發行

愛山氏の史眼の卓拔なる、文章の壯快なる世に定評あり、其史眼と其文章を以て日本第一の英雄とせらるゝ豐太太閤を論評す。蓋し近來稀に見るの痛快なる書也。かくいへば世間或は少しの材料に獨斷的臆測を加へて只面白く讀ましむるものにあらずやと早合點する人もあらんかなれども、決して左にあらず、其涉獵する書籍の弘くして且つ調査の精細なる、專門歷史家をして顏色なからしむる程にて。論斷に於て若し多少の異議ある人はあるべけんも、氏のペンステーキングに對しては何人も感嘆せざるなかるべし。日露戰役當時「國民」に連載されたる事ありしが。かく一卷となつて通讀すれば益々興味の加はるを見る。何人も一讀して益を得る本也。（定價八十錢）

▲復活（前編）　　內田魯庵譯　丸善書店發行

トルストイ翁の晚年の作、「復活」は藝術品として「戰爭と平和」「アンナ、カレニナ」等に劣ることを論ずる人あれども、其着想の深酷にして觀察の鋭利なる、又遙かに前二者を凌ぐ所あり、殊に一層深く人道問題社會問題に心を潛められたるもの故普通の意味に於ける小說以外に種々の研究に値するもの、或は名けて十九世紀文明彈劾史ともいふを得べし然れども此書の價値については譯者が卷頭に揭げられたる殆んど三十頁に近き「トルストイ」及び復活著述始末の文中に、盡しあればこゝには言はず。譯文は飜譯界の老手魯庵氏の苦心に苦心を重ねられたもの、殆んど一言一句のソツなし。日本文として上乘なるもの也。只餘り文字に骨を折られ過ぎていくらか粗朴の氣を薄くせしにあらざるかと思はるゝ節（例へば英譯本には「The sun shone warm, the air was balmy」とあるをこゝばかりは温かに、風は[illegible]と譯されたるが[illegible]

文は一層巧くなつたが、然しぼかぐ、そよぐなどいふ形容なき方粗朴で面白いやうに思はれぬでもなし）なきにあられど、然し此文章にケチをつけなば恐らく罰が當るべし。予は二葉亭氏の譯文よりも輕くなくて却てよいと思ふ。兎に角、かゝる大小說をかゝる好醜譯で讀めば紛々たる駄小說は到底讀むに堪へず、あつてもなくても構はぬやうな氣がする。後篇の一日も速かに出版せられんことを熱望する。製本の贅澤にして上品なること無類。卷頭の「トルストイ及び復活著述始末」の光焔と共に此著の價値を益々高からしむるやうに感ずる。（狩生）（定價一圓五十錢）

▲俗曲評釋

佐々醒雪著
忠文舍發行

德川時代の文學に熱心なる著者が、更に人の左迄注意せざる俗曲方面に秩序立てる研究を試み、精細なる評釋を敢てして、一見支離散漫なる語句の上に幺微なる消息を尋ね、人をして俗曲には俗曲の用意あり一捲想あるを知らしむると同時に、兼ねて江戶趣味の如何を偲ばしむるものである、此篇は先づ其一篇として長唄だけが收めてある（定價金六十錢）

▲北滿洲の產業

外務省藏版
金港堂出版

在哈爾賓の川上總領事の一行が特に本省の命を受けて北滿に於ける農商工業の現勢を視察して來た、その報告が錄せられて此一部の大著を成したもので、第一篇農業及牧畜の部には　土地。農產物。耕作。牧畜。第二篇の商業の部には對外貿易幹線に於ける及び內地商業路に於ける各市場と其位置、狀況、集散貨物の數品及び價格、重なる商舖の名稱。營業課目及び資本金。金融。商業機關第三篇工業の部には清國人並に露國人の經營に係る工業等を詳說し其他第四篇には交通第五篇には租稅等細大漏さず收めてある、尙ほ附錄には各地の度量衡、氣象表、行政區表、土壤分析表、主要農產物の種類別表其他尙數項の有益なる表類があり、特に松花江流域の極めて尨大なる圖をも添えてある、北滿に志あるものゝ必ず目を曝すべきものと思ふ（定價金二圓五十錢）

▲戀の山賤

尾崎紅葉著
梁江堂發行

卷首の小說一篇の名を取つて書名としたので、その他尙ほ驍馬の骨、江戶水、口惜きもの、文盲手引草等で都合五篇收められてある、即ち之で紅葉全集に洩れたものゝ全體である、豐腴にして艷麗なる筆付き、今更ながら讀み行くと一種捨て難き滋味がある、江戶水と文盲草との極めて洒脫にして滑稽の妙ある、自余三篇の人情の委微を寫して巧なる單に筆の上からしては矢張り現代の諸作家を凌駕するものと言はざるを得ぬ、唯餘りに妙に過ぎ巧に過ぎる處、之を現代の諸作に比するに、如何しても親接の感じの乏しいのは巳むを得ぬ、卷末に於ける露伴氏の批評、これ亦看過すべからざる麗辭であるが批評としては單に文字の末にのみ拘つてあるのが慊らぬ（定價金五十錢）

▲十千萬堂日錄

尾崎紅葉著
佐久良書房

明治卅四年の正月からその年の九月の末日に至る迄の紅葉山人の日記を集めたもの、附錄には明治卅六年に於ける銚子紀行が收めてある、誰に見せろうとて留めしにもあらぬ書き捨ての筆にも、並々ならぬ力見えて簡勁の中に一味の詩情あり、更に眞率僞らざる處に、山人の性行あるが髣に想ひ浮かばれて限りなき興趣がある、最後の銚子紀行の中に、浴前體量を測るに十一貫八百九十目とあるは、早や既に死の手に迫られつゝあることが思はれて、何となく陰濕の氣に襲はれる（定價金八十錢）

▲新自然主義

岩野泡鳴著
日高有倫堂

文藝は遊戲にあらず、即ち詩歌小說の凡ては遊戲的文字にあらず、吻

中止まんとして止み難き悶々の思、炎々の情が、必至の力に促されて、落ちて紙上の墨となり、斯くて文藝となるといふのが著者の根本思想である、即ち文藝と現實とを劃する一線あることを認めぬのがその意見である、本書は此思想意見を持して、現代幾多の評家と新聞雜誌に戰つたその熱烈な文字を集めたものである、更に角他との軒輊を計る爲に此所謂新自然主義なるものを一應讀了するも宜かろう(定價金九十五錢)

▲獨逸刑法論　吾孫子勝、乾政彥共譯　早稻田大學出版部藏版

原著は伯林大學の碩儒フオン、リスト教授の名著、レールブツフ、デス、ドエツチエン、シトラーフレヒツであつて、已に十五版を重ねたといふ好評嘖々たるものである、從來我國の刑法は重に範を佛國に採つたものとはいへ、今や新刑法に於ては獨逸に於ける最新學理を少からず參照したものだから、玆に此譯書の公にされるのは我國の學者に大なる利益を與へる事と思ふ、特に此譯者は親しく獨逸に遊んで原著者の教に與つたといふのであるから、玆にその學說を紹介するに於ても十分の信用を置いて然るべきである。(總論各論各一册完、定價總論二圓四十錢各論二圓六十錢)

▲大聖釋迦　中川、濱口、狩野三氏共譯　文明堂發行

英國の詩人エドウキン、アーノルド氏の原著亞細亞の光なる、即ち大聖釋迦の威德を讚嘆したる詩を譯したもの、譯は頗る流暢平易であるから、以て東洋哲學の詩とすべき佛教の教理が、如何に泰西の基督教國の詩人に解せられたかを見るによい(正價六十錢)

▲恩寵の宗教　多田鼎著　無我山房藏版

淨土眞宗の信仰に立てる著者が自己平生の心證の跡を丁寧に[illegible]に敍述したもの、道に入るの徒に多大の裨を爲すであろう。(定價金一十三錢)

▲親鸞聖人の信仰　近角常觀著　無我山房藏版

甚深廣大なる佛教の玄理は中々に悟入し難いところを、唯それ一念横超の易行道を開いて、何人も彌陀の慈光に浴せしむるを得しめたものは偏に親鸞聖人の御蔭である、此著は淨土宗の敬虔なる信者として名聲の籍甚なる近角氏が平生親しく體得せる信仰上の經驗を緯として聖人の信仰を親切に說き明されたものである(正價金七十錢)

▲プラトーン全集第三卷　木村鷹太郎著　富山房發行

本篇にはフアイドルス、ゴルギアス、テアイテートス、辯證論、政治家の五大篇を收めて居る。プラトーは誰も知る如く絕世の大思想家であつて、單に形而上の一境に籠つて論じて居るばかりでなく、幽玄微妙なるそれの上に政治、道德、美術、論理有と有ゆる方面に下つて意見を立てゝ居る、本卷に於てもその修辭法、論理を說くものより始めて自餘の諸論に及んで居る、千餘頁に餘る大册子、その勞を思ふと共に、著者が此かる大著に志して全部五卷の中已にその三卷をまで出せる勇猛心に服する(定價一圓八十錢)

國寶

贈從一位太政大臣九條兼實公記
公爵九條道實公題字
東宮侍講文學博士三島毅先生序

校閲
文學博士栗田寛先生
文學博士黒川眞頼先生
文學博士小杉榲村先生
文學博士井上賴圀先生
文學博士黒板勝美先生

忝賜天覽

攝政關白兼實公記 玉葉

菊版洋装美本二册
全貳千貳百餘頁
定價拾貳圓
小包料貳拾四錢

此書世上流布の本は皆玉海と稱し誤脱錯謬考證に資するに足らず本書は曩に紅葉山秘閣本を寫し尚誤あらんとを恐れ更に九條公爵家に請ひ其原本に據し校讎數回漸く完璧に達し茲に始めて世に公にするを得たるものなり

抑玉葉は月輪關白九條兼實公の日錄なり 公才學兼備久く台鼎に居る時適々王室柄を失ひ源平迭に興こるに際し天下多事即ち朝野の變故一々詳記して遺す所なく實に我國無比の寶典と謂ふべし今其一二の例を擧ぐれば叡山僧徒の跋扈、清盛の專横、法皇の幽囚、關白基房の貶謫、義仲の橫暴、賴政賴朝の擧兵、粟津原の合戰、宇治の奮闘、福原の遷都、一の谷の奇襲、平氏八島嚴島に遁竄し遂に壇浦に戰歿し、後鳥羽帝神器なき即位は、國體に關する云々の抗議、義經の凱旋、神器の奉迎、平族捕虜の處分、先帝の追尊、追討將士勳功昇敍の評議、賴朝義經の軋轢賴朝追討の宣旨及之か取消の抗議、義經の都落、高尾文覺の懲罰等當時源平時代に在て現に目覩するの想あらしむ、又此間に在りて世上の呼物となりし人物、重盛、重衡、維盛、賴政、梶原、北條等各種人物の動作進退向背正邪一々掌を示すが如し、且兼實公は深く佛法を信して法然上人に歸依し、後師の言を納れて其姫君を親鸞に嫁するに至れり、故に當時卿相雲客ノ奉佛、佛像伽藍の建立、高僧碩德の動靜等毎頁過半之を占む、卷首掲ぐる所の兼實公法體の肖像を拜するも之を推知するに足れり、又注目すべきは歷代の外交即ち彼の唐宋吳越等の我に對するの狀及我の之に處するの道、技術家の招聘歸化等の事蹟なり足利時代の美術發展は多く此間に胚胎するを概見すべし、されば本書の如きは獨り專門歷史家の獨占に委すべからず、佛教家、美術家、政事家等見逭すべからざる珍書なり 一たび之を購讀玩味するときは永く其興趣と利益とを得らるべし

本書は哲學書院に於て新に發行したるものなれども、賣捌方を弊社へ依托されたれば特價金八圓五拾錢(外に郵稅金貳拾四錢)を以て取次販賣すべし

本郷西片町十
電話下谷九百十九番
(振替口座三十四番)

反省社營業部

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

銀製洋盃及木盃



紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達を致し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一金七圓五拾錢也　同徑三寸丸　同目方正味二十九匁付
一金拾圓九拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一金拾參圓貳拾錢也　同徑四寸丸　同目方正味九十匁付
一金拾六圓五拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑五寸丸　同目方九十匁付

三ツ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸盃三ツ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也　同徑三寸丸同　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑三寸五分丸同　同目方正味八十匁付
一金參拾壹圓也　同徑四寸丸同　同目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也　同徑四寸五分丸同　同目方正味百八十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也　同徑五寸丸同　同目正味二百卅匁付

一定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢
一文字彫刻　一字　金拾錢
一大字彫刻　一字　金七拾錢

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

商　玉寶堂

東京市下谷區池之端仲町二十九番地
（電話下谷特九六五 一二四四）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝　神田裏神保町	上田屋
仝　京橋尾張町	東海堂
仝　日本橋呉服町	北隆館
仝　本郷本富士町	盛春堂
仝　京橋鎗屋町	良明堂
仝　日本橋本石町	至誠堂

關西大賣捌所

大阪備後町	盛文館
仝　京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

○壹冊定價　金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（海外郵税八錢）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢

以上郵税共

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十一年十一月廿七日印刷
明治四十一年十二月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

